
イーリアス —獅子の涙—

おに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーリアス ― 獅子の涙 ―

【Nコード】

N6826T

【作者名】

おに

【あらすじ】

七剣聖の称号を持つ異形の女剣士テイラータは、幼い頃より守り慈しんだ姫を守るため、蛮族と蔑まれながらも一人闘う。そこは地上の楽園イーリアス。大陸の東にある小さな国は、神の恩恵で国土が守られていた。巨大な結界のような魔法障壁は数百年もの間、豊かな国と人を守った。だがまるで時を止めたかのような幸せは、いつしか他の国々や文化に遅れをとり、今や衰退の兆しをみせる。同じ剣聖との出会いと別れ、そして個性的な仲間たちに囲まれ、破滅の足音迫る王国を舞台に、剣と魔法が息づく世界の、一人の少女の

葛藤と成長を描く。

森での出会い 1（プロローグ）

深い、深い森

西の森と呼ばれるその森は、またの名を迷いの森とも呼ばれる。人を寄せつけずしかし豊かな、動物たちの楽園だ。

西の国境を覆うその森は国王直轄の領地であり、この国にとって要の地でもある。なんぴとたりとも立ち入ることを禁じられている。ただ一人、管理を任されている者を除いて。

西の森の中ごろに、ひとときわ高く茂る楠がある。その根元には、小さい泉が滾々こんこんと湧き出ている。

そこだけばかりと緑の開けた木々のほとりに、森の管理を任せられたひとりの少女が馬を寄せる。

名は、ティラータ・レダ。

馬を降り泉の水を飲ませ、鞍を外して休ませる。

少女が深くかぶったフードを外すと、目に鮮やかな金髪が朝日に輝く。

マントを外しそのまま躊躇すること無く着ていた服を脱ぎ捨て、そして春になったとはいえいまだ冷たい泉の水に、ためらうことなく入水する。

誰もいない森深く、朝日に照らされる白い肌と金の髪はきらきらと水しぶきとともに水面に反射し、それ自体が光っているかのようだった。

まだ幼さの残る少女の身体が、水しぶきをあげて水の中へ沈む。泉の中央は見た目よりも深く、頭まで潜っても足がつかない。

ティラータは潜ったまま、頭上の水面を眺める。静かな水面を通

して見える青い空と、覆いかぶさるように茂る新緑のコントラストはお気に入りの眺めだった。しばらくはその美しい光の揺らめきに目を奪われ、口元がそつと微笑む。

何度か息継ぎをしては潜るを繰り返してから、ようやく上がってきたその手には、ピチピチと魚が二匹暴れている。

獲物を岸へと無造作に放り投げ、自らは再び水に潜り泉を一回りしてようやく水から上がる気になり、肩にかかる金髪の水気を絞つつつゆつくりと岸に足をかける。

「……誰だ？」

ふと誰もおらぬはずのこの森に己と愛馬以外の気配を察知し、新緑の瞳が細く締まる。

かすかな葉ずれの音をとらえ、ティラータは素早く岸の枝に掛けておいたマントで身体を覆う。

——上か

ティラータは素早く目前の大楠を仰ぎ見る。

次の瞬間、目の前に何かが落ちてきた。

ティラータは咄嗟に後ずさり身構える。

目の前に飛び降りてきたのは一人の長身の男だった。

「何者だ」

突然の侵入者から目を離さず、脇の剣を取る。

ティラータは目の前に佇む涼しい表情の男を、鋭い視線で射抜く。

男は長身細身ではあるが、マントからは鍛えているとひと目でわかるしなやかな両腕の筋肉がのぞき、腰には長剣がある。

ブラウンの長髪は後ろでひとつに束ねられ、何を考えているのか読めない切れ長の目元、整った鼻筋に綺麗な唇。総じて言うならば、世の女たちが放っておかないだろう、いわゆる見目麗しい顔立ちをしている。

——外見だけならば、の話だが。

しかし目の前の見知らぬ男は悪戯そうに口元をほころばせ、どこから見ても軽薄そうな表情でティラータを見ている。

ティラータは男の漂わせる気配に、愛剣を握る手に思わず力を込めていた。

ふいに肌が粟立つような強い気配が、男の微笑みと共に消え去る。ティラータも少し殺気を押さえ、再び問う。

「何者だ」

「そう怖い顔をするな、はらから同胞だ」

再びニヤリとする表情は、まことに胡散臭い。

だが、ティラータは剣にかけた右手を下ろす。

「はじめまして、だな。レグルス黄金獅子……俺はシリウス天狼星だ」

男はそう言々と腰から取り出した六芒星の紋章を見せる。

銅盤に象かたどられた六角の先には色とりどりの宝石、星の中央には赤い紅玉がちりばめられている。

それは証。

ティラータと同じ七剣聖の称号を持つ、世界最強の剣士のひとりである証。

彼は“仲間”だった。

森での出会い 2

ティラータの眉間のシワは、消えないままだった。

「ここに居る理由を言え。たとえお前がシリウスだとしても、ここにいっても良い理由にはならない」

樹の枝葉の陰から服を着ながらまくし立てる。

「……まあ、暇つぶし？」

「っひま？」

大きな瞳を見開き、ティラータは呑気な声のする方を振り返る。

ここがどこなのか、この男に分からないはずはない。

この森はイーリアス国王直轄の領地だ。

その上ここには――。

ティラータの憤慨をさらりと躲し、何食わぬ顔で楠の根元に腰を下ろすシリウス。

「そう怒るなよ。ついでといつてはなんだが、色々と初めてづくしのお前の顔でも覗いていこうかと思ってな」

シリウスを名乗る男の瞳に、強い気配を感じる。

「残念だったな、とりたてて面白いことなど私には何もない。それに私は他の剣聖たちには興味無い」

服を着込み葉の茂みから出て、シリウスを一瞥する。

ティラータは確かに、永く続く歴代剣聖の中では異例中の異例とも言える存在だった。

レグルスの地位に就いたのは一年半前、十六になってすぐの頃だった。

史上最年少、そして女性として剣聖の地位までのぼりつめたのも、

彼女が初めてのことだ。

シリウスは、不躰にティラータを見る。
美しく輝くような、まるでその通り名のごとく獅子を思わせる金の髪。

金系の中から時折顔を出す、尖った耳。

大きな新緑色の瞳の奥でコロコロと形を変える細い瞳孔は、まるで猫科の獣のように太さを変え、見る者を怯えさせる。

——蛮族。

シリウスの視線の指し示す意味を、ティラータはすぐに悟る。
幼い頃から現在に至るまで、彼女に与えられた分類はそんなぐいのものだった。
ヒトというにはあまりにも野生的で、獣と呼ぶにはいくぶん迫力に欠けている。

「……おい、いったいそこで何を始めている、お前は」
目の前で、人も話もそこに火をおこしている男に呆れ、いつに無く自分のペースを乱されることに少し苛立ちを覚える。
「何って……せつかく美味しそうだから。」

そう言って彼が視線を送るのは、足元に転がる魚だ。

——食べる気、なのだろうな。

呆れて言葉も無い、という経験は初めてだった。

結局、何がどうしてそうなったのか。

ティラータはおとなしくシリウスの向かいに腰を下ろし、共に朝食にありつく羽目になっている。

火に小枝をくべながら、ティラータが口火を切る。

「お前の事はどうしてかベクシーから聞かされていない。シリウス

が存在している、ということだけだ。この国の者ではないのだろうか？」

常に七人全てが揃っているわけではない。空位のある方が常の七剣聖のなかで、要となるアルクトウルスだけは欠けることなく引き継がれる。なぜなら赤星アルクトウルスは剣匠だから。

剣聖の持つ剣は、全てベクシーの拵えだ。

そのアルクトウルスのユリス・ベクシーから他の仲間の名は聞いているが、このシリウスを名乗る男の名や素性はすべて伏せられていたのだった。

目の前で飄々と魚を食べる男に、不信感は拭えない。

「……それより美味しいなこの魚」

肝心な事には答える気がない様子のシリウスに、ティラータは呆れつつ再び観察するのだが、それだけでは彼の真意は窺い知ることができなかった。

仲間というには何かが足りない。だが顔すら知らなかったこの男の纏う気は、確かに自分と同じ部類の人間であることはすぐに悟った。

だが信用における人物なのかどうかといえ、それは全く別問題だろう。

さぐる目つきを隠さないティラータに、シリウスを名乗る男はニタリと笑う。

「お前の噂は聞いている、ティラータ・レダ。その年でイーリアス剣術師範長も、異例だろう」

その言葉にティラータは眉を寄せる。

「余計なおしゃべりをするつもりはない。目的を早く言え。私の事をそれだけ知っているのなら、尚更ここがどんな場所なのか知らぬ筈はなかるう。陛下の私有地であり、そして……」

チラリと彼の後方に視線を移す。

森の深緑を切り裂くように、空高く虹色の半透明の光の波がゆらめく。

「イーリアスを庇護している、魔法障壁を護る森だ」

鋭くなるばかりのその視線をよそに、先ほどの悪戯そうな顔を崩してふわりと微笑むシリウス。ティラータより五つ程年上だろうと思われていた容姿に、いかばかりか訂正を入れなくなる、少年のような笑みだった。

「噂に違わぬ、堅物だ」

そして堪えていたのか、クックククと笑い出す。

「見た目も噂通り、小娘だしな？」

一瞬、ティラータの頬がヒクリと動いたかと思うと、次の瞬間には辺り一面に凍りつくような殺気が立ち込める。

「これが最後だ。シリウス、ここに何をしに来た？」

低い声と共に、ティラータの左脇から鐸^{つば}鳴りが響く。

全てを解っていたかのように、素早く後方へ飛び退かれ、内心チツと舌打ちする。

——速いな、あの長身で

「だからそう怒るなつて。目的について嘘はついていない」

そう言つと後の楠の太い幹に、ひょいっと飛び乗る。

「じゃあ、またな。」

最後の言葉に全身の毛を逆なでた猫のごとく反応するティラータだが軽薄そうな笑みを最後に、シリウスは次々と枝に飛び移る。

「あ、こら待って……もう二度と来るなっ！」

猿のごとき器用さで、あっという間に深い木々の奥に隠れてしまった。

「なんだつたんだ、あの男は」

短く息をつく、抜きかけた刀身を鞘に収めた。

二つ名を天狼星^{シリウス}ではなく山猿^{モナーク}にすべきだと、心の底からティラー

夕は思っていた。

黒真珠の姫 1

『麗しのイーリアス』『ローラシアの秘宝』

そう謳われてかれこれ三百年。

かつてのこの国を称える言葉は、いつまでも民にとっては、喻えようもない程に心地良いものであるようだ。

王都へ戻る馬上から、ティラータは街を見下ろす。

街の中央にそびえる王城。それを市街が囲み、さらにその周りを数年前にはほとんど見られなかった貧民街が外側を囲む。

まだ日も高いというのに、男たちはようやく雨を防げるかどうかという小屋の前で、座り込んだまま動かない。ボロ切れのような衣を着て、目は虚ろだ。

……本当に、いつからだろうか。

元々この国の人々は、競い合うことを好まず温厚な者が多い。生活も日々事足りれば良し、とする風潮であったのは事実だが。

この街を覆う閉塞感、いったい何なのだろう。

ティラータは、胸の奥にヒヤリとした違和感を覚えた。

これはティラータのみが感じている事ではなかった。

国王陛下や大臣たち政を司る者達の一部にも、言い知れぬ危機感を抱いている者が少なからずいたようだ。

今年は四年に一度の祭りがある。

女神ファラへ捧げる、豊穡祭だ。

国を挙げての祭りを何としても成功させ、この国に活気を取り戻す。それが今この国の、最優先事項となっている。

祭りまであと一月。

ローラシア大陸でも、イーリアスのファラの大祭は有名であり、

諸外国からも大勢の人々が訪れる。

閉ざされた楽園の、王都がにぎわう唯一の祭りだ。

ローラシア大陸東端にあるイーリアスを、護るように横たわる魔法障壁は、それ自体が西側の国境線となっている。

この魔法障壁は、虹色に輝き、キラキラと美しくゆらめく。

その美しさに惑わされ少しでも触れようものなら、その身は一瞬にしてすえた臭いのする黒い塊と化す、ひどく厄介な代物だ。

まさに「壁」なのだ。

この魔法障壁を越えることは不可能なのだが、イーリアスへの入国は別ルートで可能である。

それは唯一国境を接する、北の隣国シンシアから。

ただし、国境は迷いの森と大河で分断され、その河に架かる橋のみが、イーリアスへの入口となる。つまり、陸の孤島といったところか。

貧困街を抜け市街にさしかかると、ティラータは更にフードを深く引き下げ、馬を降りる。

急に賑わいを見せる城下町は、大祭が近いためだ。

そこかしこに市が立ち、通りに面した商店は、軒先まで商品を陳列して客引きをしている。

人通りも多くなり、馬が暴れぬように手綱を短く持ち、ティラータは城を目指す。

先ほどのような虚ろな目をした者は、ここには居ない。

子供達が、賑わいの中を、楽しそうに駆けてゆく。

「……つつ」

ティラータの横をすり抜けた子供達の一人が、石畳に足を取られ、転んだ。

その時、咄嗟に手に触れたマントに掴まりながら……

ティラータの鮮やかな金髪が露になる。

「っうわぁん」

見事な転びっぷりに自分でも驚いたのか、小さな少女は少し溜めた後に、大粒の涙をこぼす。

ティラータはすぐに膝をつき、幼子を助け起こす。

「大丈夫か？」

膝とお尻の土を払い、泣き止みそうもない幼子を覗き込む。

すると、そんなティラータと目が合うと、ピタリと泣き止み、今度は少女が見つめ返す。

大きなブラウンの瞳を、零れるかと思うほど見開いて…。

少女の口が微かに動き、「きれい」と小さく言ったのが聞こえたかと思うと、後から少女を優しく包む手が伸びていた。

「まあ、大丈夫、怪我はない？」

慌てて駆け寄ってきたのは、この娘の母親らしい。

「あ、ママー」

母親は娘の無事を確認すると、安堵のため息を漏らす。

「どうもすみません、娘が――」

母親はようやく頭を下げ、そして再び礼を口にしようと顔を上げた瞬間、顔から色が失せる。

身体がピクリと強張る様子を、ティラータはあえて見ずに視線を逸らした。

母親は青い顔をして傍らの娘を抱きかかえ、慌てて後ずさる。まるでティラータから引き離すかのよう。

「ママ、どうしたの？」

娘だけが状況を理解できず、母の顔を不思議そうに見上げた。
「ば、蛮族、娘にさわらないでっ」

母親のヒステリックな叫びに、行き交う人々が足を止め、ティラータに視線を送る。

立ち去ろうとティラータが振り返ると、賑やかだった通りに音が消え、ザワリと緊張した空気が一瞬で辺りを染める。

ある者は青い顔で目線を外し、ある者はあからさまに眉を寄せて何かを毒づく。そしてある者は蔑むように薄ら笑う。

再びティラータは深くフードを被り直し、愛馬を引いて歩き出す。それを見て、まるで蜘蛛の子を散らすように行く手を空ける人々。目深に被ったフードの下で、ティラータが苦笑いをしたのを、気付く者はいない。

「蛮族女が…この国から消えてなくなれば良いものを…」
少し離れたところから聞こえてきた。

いつもの事だと胸の内で繰り返す。

こんな言葉で傷つくのも、心を動かされることも、もう無いと。面と向かって言われる事がないだけマシなのだろう。

いちいち相手をしてもしゃないのだと言わんばかりに、ティラータは固く表情を閉じるのだった。

黒真珠の姫 2

ティラータは城下街を南側から入り、城を迂回するように西にしばらく進むと、次第に古い街並みへと変わっていく。

旧市街は、先ほどまでの市が立つ処とは違い整備されておらず、路地が入り組んでいる。さながら迷路のようだ。

新しい市街の中に、忘れられ取り残された旧市街が浮島のごとく、ぽつりぽつりといくつか浮かぶ。そこはいくらかの事情を抱える者が隠れ住むのに、かっこうの場所となっていた。

ふと見上げれば、城が東にそびえ立つ。

大通りから少し入ったところ、古びた建物の残る路地まで来て、ティラータは周囲に目配せする。

すぐに背にしたレンガ造りの壁の影から、低い声がした。

「今日も、目立った動きはナシです」

「そうか…他には？」

「城へ戻って下さい。今日はあなたの担当ですよ、レグルス」

「ああ、そうだったな」

ティラータの気の抜けた応答に、影の向こうから苦笑いが返ってくる。

「そろそろ、姫と女官長の攻防が始まる頃合いでしょう」

落ち着いた声の主の名は、ランカス・ボルド。近衛副隊長にして王宮剣術師範の立場にある。

つまり、彼はティラータの部下にあたる。

——ただし剣術場においてのみ、ではあるのだが。

年はティラータより四つ年上の21歳で、ティラータ同様に天賦

の才で異例の出世を遂げ、誉ある王室の近衛隊副隊長に就いていた。最近旧市街に潜む者たちの中で徒党を組むものが増え、きな臭い噂が伝わってくる。それらを警戒して、近衛たちが密かに交替で見回りをしているのだ。本来ならば街を警らする兵の仕事なのだが、残念ながら末端の兵士にまで汚職や賄賂が横行していて、ティラーたちの求めるような結果は恐らく望めないだろう。

ティラータは、ふと何か言いたげなボルドに気付き振り返る。

「どうした、何か他にも？」

訊ねられためらいがちに、年下の上官に淡いブルーの目を向ける。

「いえ、先程の様子を見ていたものですから」

——ああ、とティラータは納得する。

「別にいつものことだ気にしてない。…相変わらずだなアーシャといい、お前といい」

スクリ、と笑う。

だが、納得しかねるのは当の本人ではないようで、ランカス・ボルドの目には強い憤りが見て取れる。

「あなたはそう言いますが…そもそも謂れない差別だ。むしろ…」

…

「ボルド！」

ティラータの鋭い声が、その続きを口にすることを許さなかった。

「……すみません、つい」

男は我にかえり、くしゃりと己の栗毛を掻きあげる。

そのまま空を仰ぎ見て目線だけで、ちらりと頭ひとつ分小さいティラータを窺う。声の割には不機嫌そうには見えず、何かを考えているようだった。

「今日は、何かあったんですか？」

「…ん？」

ティラータは問われた意味が掴めないのか、新緑の瞳を不思議そうにボルドに向けた。

「何か、良いことでもありましたか」

久しぶりに見る憂いのないティラータの表情に、ボルドは問わずにおれない。

「…ああ、あつたといえば…会ったな。西の森でシリウスに」

ランカス・ボルドは反応できずに固まっている。

シリウスといえば、それが何かであるか一剣士である彼にもすぐに分かる。

ティラータは苦笑いを浮かべていた。

「何者、ですか？」

ボルドは驚いた様子で、ようやく出た言葉はそれだけだった。

在位していることのみ、彼も噂で耳にしたことのある剣聖の称号。とはいえ未知の存在だ。

「さあな、喰えぬ奴ということだけは分かったが」

「よりによって、今、西の森ですか」

ボルドの顔に困惑が見てとれる。

「奴が何者だろうと、我らの邪魔をするのなら容赦するつもりは無い。が——」

言葉を途切らせたのは、先程のやり取りを思い出したせいだ。森での苛立ちを思い出すが、どうしてかあの男には警戒心が沸いてこない。とはいえ、信用に足るとは言い切れないのも事実だ。

「あの馬鹿者は、あまり気にしなくてもいいだろう」

近衛たちにどうにかできる相手でないし、あの男に関しては自分が警戒しておけばいいとティラータは結論づけた。

そのティラータの言葉に、ボルドは目を瞬く。

「珍しいですね、あなたがそんな風に言うとは。興味が沸きますね、その馬鹿者とやらに」

やめておけ、と笑いながら手綱を引き寄せる。

「では、後ほど城で」

二人はそれぞれ分かれてその場を立ち去った。

「なりませぬ、姫様！」

神経質な甲高い声が、石造りの長い廊下に響く。

『姫』と呼ばれた娘は、腰まで届く豊かな黒髪を二つに束ね、歩くとたびに美しく揺らしている。

すぐ後に付き従う初老の女官は、眉間にシワをくつきり寄せながら尚も悲鳴にも近い声で、黒髪の姫を呼び止める。

ようやく振り向くも『姫』は歩みを止めようとせず、老女官に華やかな笑みを向ける。

「あーん、もう我慢できないっ。ねえ、走っちゃおうか、ばあや？」

嬉しくて堪らない風の浮き足立った姿に、すぐ後に従っていたばあやこと女官長が青い顔で固まり、その後をさらに追っていた護衛の女兵士と若い女官もつんのめるようにして固まる。

「あ、ア……アシャナ様！」

ヒステリックな悲鳴とも呼べる叫びが廊下に響き渡る。

アシャナ姫は再びふわりと王女らしく微笑んだ。

「やあね、冗談よ。うふふ」

この国では珍しい黒髪の姫の名はアシャナ・ル・イーリアス。イーリアスの第一位にして唯一の王位継承者だ。

抜けるように白い肌に、真っ直ぐで艶のある腰まで届きそうな黒髪。董色すみれをした瞳を持つ王女は、コロコロと変わる愛くるしい表情のせいか、十六という年齢よりも幼く見える。

美しく整った容姿に加えて、人好きのする社交的な気取らない性格が人々に愛され、「黒真珠の姫」と称されている。

アシャナ姫は今、ふわりとした大きめのズボンに革のブーツを履き、動きやすい半袖のブラウスにベストといういで立ちだ。長い髪

を根元で二つにまとめ、両手には似つかわしくない長剣を大事そうに抱えている。

「あ、いけない遅刻しちゃうわ」

慌てて歩を速める。

「お待ち下さい、姫様。危うございます、何もあなた様が剣術をお習いにならなくとも、近衛に任せておけば良いのです。しかも、あの汚らわしい者に手ほどきを受けるなど、なぜ陛下はお許しになれるのでしょうか……」

最後は問うようになってしまった女官の言葉を、歩を緩めることなくアシヤナは聞いていた。だがその形の良い口角が、ほんの少し歪み、小さなため息を漏らしたことに気付く者はいない。

「危険なんてあるわけ無くてよ。ティラータ・レダは黄金^{レグルス}の獅子の位を持つ、この世界の最高位の剣士なのだから」

アシヤナは思い出す。

珍しい片刃の美しい剣を持ち、舞うように相手をなぎ倒す華麗なティラータの姿を。

「そ、それは……」

老女官は視線を泳がせ、神経質そうな薄い唇を噛む。

女官たちを置き去りにして剣術場へと去った姫を、マイヤはため息まじりに見送る。

——どうしてあの蛮族を傍に置きたがるのか。

それは幾度となく巡らせた思いだった。

マイヤは苦しい胸のうちを、声に出さずにはおれなかった。傍らの若い女官には、聞こえてもかまうものかとさえ思える。

「幼き頃よりこの手で育んできた筈の姫が、どうして……」

もっとも理解し難いところであった。

誰にでも分け隔ての無い優しい姫であるのは確かなのだが、それはあくまでも王女という立場を超えない範疇のことだ。ティラー

タ・レダに対してのそれは、臣下への範囲を超えている。

女官長マイヤは、もういく度目になろうかという小さなため息を漏らす。

姫とティラータが並び立つ姿にも、苛立ちの原因があった。

可憐な容姿に似つかわしくない闇色の髪と、目も覚めるような黄金の輝き。

「なぜ……なぜ我が姫が黒髪であるというのに、よりもよって忌々しい獣の血を持つあの女が、王家を象徴する黄金をもつなど……」
マイヤは腹立たしさでいっぱいだった。

加えてその忌々しい対比をわざわざ晒すかのように、並び育てた国王陛下にすら不信感を抱えて久しい。

「なんと不憫なわたくしの姫様」

我が姫の不運を慮り、女官長は自らの頭の中の記憶にすら目を逸らしたい気分だった。

始終ご機嫌だったアシャナ姫と苦みばしった女官長マイヤ。

そして姫の去った後、苦悩のあまり少々立場を忘れて毒づく上司のマイヤを気遣って、ただその眩きに同意する若い女官。

そんな女官たちの芝居があった——しかし本人達はいたって真剣なのだろうやり取りを、護衛の女兵士は冷ややかな目で振り返る。
しかしすぐに姫を追って、剣術場へと消えていった。

黒真珠の姫 3

金属が触れ合う甲高い音と威勢のいい掛け声。切れる息遣いと身体が激しくぶつかり合う音。

人の闘争心を煽る空気が、そこにはある。

王城に設けられた広い剣術場には、さまざまな立場の者が集う。所属部隊だけでなく、身分の上下も関係なくただ鍛錬を行う為の場所。

ここでは実力のみが問われる。

出自に関係なく、己の力を向上させたいのなら実力に見合った者と手合わせするのが最も効率がいい。

昔からの慣例として、剣術場へは身分と地位を持ち込むことを禁じられている。

例外はもちろんある。それは剣術での優劣。

そしてその頂点に立つのが、剣術師範長であるティラータ・レダだ。剣術場にいるかぎり、それは誰にも——国王陛下にでさえ犯されることのない事実。

ティラータがそこに立てば、もうマントやフードなどでその身を隠すことなど必要なかった。

ティラータは場内に目を配りながら、奥の詰め所に向かって歩く。直接兵士たちに、彼女自ら剣を取って教えることは少ないが、誰がどの程度のレベルに達しているのか隅々まで把握していた。

「お帰りなさい、ティラータ！」

詰め所で待ちかまえていたアシヤナ姫は、顔をほころばせてティラータに飛びついた。

それを受け止めるティラータには、柔らかな微笑が浮かぶ。

「遅くなつてすまない、アーシャ」

肩越しの黒髪に手を添える。

その姫君らしからぬ行動を苦笑まじりで見守る、女兵士と目が合う。

「レイチエルも一緒だったのか？珍しいな」

赤毛の印象的な女兵士、レイチエルが片手を挙げてティラータに応じる。

彼女は弓射隊いちの使い手、レイチエル・リンド。

燃えるような赤い髪は、彼女の気性そのものだ。派手な顔立ちにソバカスが目立つのが少し残念、と言うと彼女は怒るだろうが、それでも美人には変わらない。

「大祭が近いからね、私が護衛を仰せつかったのよ」

「ここは剣術場なのね。心配性なのよ、皆は」

ティラータの首に回していた腕をとき、アシヤナが付け加える。

少しだけばつが悪そうに眉を下げるが、その暗さは一瞬で消え失せ、目の前のティラータに眩しい笑顔を見せた。

「今日はティラータに良い報告があるの！」

「——報告？」

「大祭中にシンシア王太子が、国王陛下の名代でイーリアスを訪れることになったの」

「……そうか、それは良かったな、アーシャ。ずいぶん、久しぶりなのだろう？」

桃色に頬を染めながら大きく頷くと、アシヤナは可愛らしくはにかんだ。

隣国シンシアの王太子は、それは大層な美丈夫との噂で、現王妃はイーリアス国王の姉であり、アシャナにとっては従兄弟にあたる。そして、アシャナ姫の初恋の君だ。

「あのね、今度こそ必ずティラータに紹介するわ。きっとティラータも彼に会ったら気に入ると思うの」

それを受けてティラータは言葉に詰まる。

唯一イーリアスと外界をつなぐ窓口となるシンシアは、最も重要な友好国である為、王室間の交流は頻繁であった。

ティラータは幼い頃アシャナ姫と共に育ったとはいえ、これら外国の要人との接触は故意に避けられてきた。

王族ではないのだから当然といえば当然なのだが、剣聖の地位につくまでは、護衛の任につくどころか隔離され出歩くことすら禁じられてきたのだ。シンシアの王子など、遠目で拝んだことすらなかった。

とはいえアシャナが逐一報告してくれたので、その行動や人となりは王宮の女官並みに些細な事まで知ってはいた。何でも美しい銀髪の長身の、絵に描いたような色男——女官の噂話なみの知識によると——であるらしい。

しかし、実際に会うとなると色々と腰が引けるティラータだった。それが他の国の要人ならば、全く違う気持ちなのだが。

「ティラータ？」

返事に窮したティラータだったが、王女の申し出を断るわけにはいかず、「時間が合えば」とだけ答えてその場をやりすごした。

気を取り直して、本来の目的を思い出す。

「早速、稽古を始めよう」

ティラータはアシャナ姫を促し、剣術場に出る。

王族の者がこうして護身術を身につけることは、よくあることだった。陛下は例外だが、王弟アレス公や若かりし頃の現シンシア王

妃もここで剣を握ったようだ。

この国では人の上に立つ者でも、剣術を収めることが慣例となっている。

『イーリアス』には、古い言葉で「戦士を称える」という意味が込められているのだ。

よって貴族から末端の民まで、子供達の憧れは宮廷剣士だ。

「後で私が相手をしよう。アーシャ、基礎訓練から入って」

「宜しくね、師範長殿」

アシャナはおどけたように言うと、他の兵たちに混じって基礎の型の練習を始める。

そしてティラータは彼女に気を配りつつ、他の兵士達にも厳しい視線を送るのだった。

黒真珠の姫 4

一心不乱に型の鍛錬をするアシヤナ姫の周りには、いつの間にか鍛錬を装って近衛兵が囲む形になっていた。

当の姫はそれを知ってか知らずか、隣で剣を振り回していた新人近衛兵の若い男に、こそこそと近づく。

「ねえ、ベルナル？近衛のお仕事はもう慣れたかしら？カナン隊長に随分しごかれてるって聞いたけど……」

——ヒソヒソ話を装っているようですが、見られてますけど姫！と内心ヒヤヒヤしつつ、離れたところに仁王立ちする剣術師範長を視界の端にとらえる、ベルナル。

「ご心配ありがとうございます姫様。何とかやってます。でも、どこからお聞きになったんですか、その……しごかれてるって」

つられて小さな声で返す。

「まあ、そこかしこから。ふふ、可愛がられているのね、ベルナルは」

「はあ、恐れ入ります。」

苦笑いを浮かべながら再びティラータの方に視線を移すと、ぱつちり目が合い、背筋が緊張で跳ねて固まる。

「そこ、無駄口をきかない。集中しろ！」

ティラータの叱責が飛ぶ。

それだけでなく、つかつかとベルナルの元へやってくるのに気付き、今度は冷や汗をかく。

「す、すみません」

ティラータは特に返事もせずジロジロとベルナルを観察すると、眉間に皺をよせている。

何か怒らせるような失敗をしただろうか、と思い当たる節の多さに己を呪う。

「ベルナル」

「はいっ」

「お前、ちよつと太りすぎだ」

「……へっ？」

思い描いていた説教パターンでなかったことに相当拍子抜けしたのか、ベルナルは啞然としたままだ。

「いい、いやですね師範長。僕……いえ私は太ってなど」

「無駄に筋肉をつけるな。身体が硬くなる。得物に剣を持ちたいのなら、尚更だ。」

ベルナルは何か身に覚えがあるのか、バツの悪そうな顔をしているので、ティラータが無言のプレッシャーで睨み、「言ってみろ」と促す。

「実はその、砂袋で足腰の鍛錬をと思って……」

やっぱりな、という呆れ顔でティラータは聴いていた。

「まあいい。ベルナル、アシャナ姫の相手になってやってくれ」

「——え、ええ?!」

突然の切り返しについてゆけず、きょとんとしていた若い近衛兵の顔が、追いついてきた理解とともに蒼白になる。

「アーシャ、丁度いい相手がいた。まず、ベルナルとやってみて」
「わかったわ。よろしくね、ベルナル？」

固まるベルナルに、にっこりと微笑みかける。

ちよつとしたイベントになりつつあった。

新人近衛隊員のベルナルと、我らが世継ぎの姫アシャナの対戦だから、当然か。

アシャナ姫の応援をする者がいても、ベルナルへのそれは皆無
とっていい程のアウェー状態。

それがますます面白いのか、男たちは野次を飛ばす。

「では、両者かまえ……はじめ!」

ティラータの掛け声と共に、近衛と姫という立場上きわどい試合が始まった。

「どうした、ベルナル、腰がひけてるぞ」

どっと笑いがおきる。

怪我など負わせられない相手である。

腕が確かでなければ入れない近衛に、新人とはいえ名を連ねているベルナルだったが、さすがに緊張で身体が強張る。

だが万がいち手心を加えて負けたりなどしたら——今以上の同僚達からのしごきが待ちかまえているであろうことは、嫌でもわかる。

勝たねばならない。と珍しく真面目に剣を構えていた。

アシヤナ姫は、細身の長剣を繰り出す。

それをベルナルが慎重に受け流す、ということを先程から繰り返している。

と、そこへティラータが無情にも声をかける。

「アーシャ、本気出していいぞ」

につこりと、しかし目は笑っていないティラータに気付き、ベルナルは青くなる。

ティラータの声に反応して、アシヤナの動きが変わる。

身体の柔軟性を最大限に生かし、ベルナルを上下に翻弄するかのよう^にに攻撃してゆく。

「わ、わわ、姫」

慌てるベルナルに、周りの男から更に野次と笑いが巻き起こる。

「相変わらずね、彼」

レイチエルが腰に手を当てて、尊大に言った。

「本人は真面目に励んでいるつもりのようなだが、方向性が常にズレている」

「ふふ、その点、アシヤナ様は期待以上なのよね。素質あるわ、うん」

二人の対比を、それは可笑しそうに笑って見ている。

「アーシヤは身体が柔らかいからな、上手く受け流すこともできるし、際どいところからでも攻撃に転じられる。それに比べてアイツは……」

ティラータは肩を竦める。

「硬い、わよねえ。もう、ガチガチ」

レイチエルが、あっぱっぱは、と大笑いすると、姫と間合いを取っていたベルナールがこちらを見ていた。

自分が笑われていたことを、本能で悟ったらしい。

「アーシヤと立ち会って、気付けばいいのだがな」
ぷはっ、と再びふき出すレイチエル。

「ムリムリ。あいつの鈍さは天下一品だもの。苦勞するわね、ティラータ？」

眉を寄せて、ため息をつくティラータ。

それでも、近衛という花形に就けるほどの実力はあるのだが……
ここらで一皮むけてもいい筈なのに、と肩を落とす。

当然ではあるが、程なくしてアシヤナの剣を奪い取るかたちで、ベルナールが勝利を収めた。

二人を兵たちが取り囲み姫へは労い、新人近衛へは労わりという名の可愛がりを施している。

「やれやれ、もうしばらくは雑用係り延長だな」

背後からの落ち着いた低い声に振り返ると、ベルナールの上司であるアズール・カナン近衛隊長が立っていた。

「いらしたのですか、カナン隊長」

がっしりとした体軀だが、人に威圧感を与えない穏やかな表情をする男だ。

四十余年という齢を刻んできた、深さを感じさせる。

「君と打ち合わせのための、打診をしにきたんだが……師範長殿？」

日に焼けて浅黒くなった顔に、ニツと笑って白い歯を見せた。

「あなたにそう呼ばれると、未熟な己を恥じたくありません。どうか以前のように名で呼んで頂きたい」

「いや、私は君に後を任せて引退した身。剣術場けんじうばでの立場を守るのも、老兵の務めだろう」

穏やかだが、鋼のように揺らぎない芯を見せられ、ティラータはそれ以上何も言うべきではないと悟った。

「ところで何ですか、打ち合わせの打診とは？」

「ああ、そうだった。大祭中の姫の護衛についてだ。どうやらボルド副隊長もいない事だし、日を改めて細部を確認しておきたいからね……他の者も、たまにはここへ鍛錬に来たいだろうさ」

ちょっと可笑しそうに笑う、近衛隊長。

「そうですか、で、誰ですか運動不足の方は？」

カナン隊長らしい言い回しに、ティラータはクスリと笑い、同調する。

「あら、私も身体がなまっているから、お誘いいただけますか隊長殿？」

横からレイチエルも参加してくる。

「ああ、君ももちろんだ、リンド君。そうだな——魔術次官と薬師殿にも気分転換にどうかね」

その言葉に、ティラータとレイチエルが顔を見合わせて苦笑い。

「オズマはいいかもしれないですが、ジャージャービーンが来るかしら……」

「まあ、種は撒くさ」

そう言って、カナン隊長はウインクして見せた。

「それで、運動会？ とやらは何時ですか」

「明後日の、正午あたりといったところかな」

ようやく、兵たちの取り巻きから脱したアシヤナが、ティラータに駆け寄る。

「どう、ティラータ？ 少しはマシになって？」

「ああ、ずいぶんさまになってきたなアーシヤ。もう少し上達したらベルナールに引けを取らなくなるだろう」

その言葉にアシヤナは、大きな眼を輝かせてそうだったらいいな、と喜んだ。

ティラータの横に立つカナンに気付いた。

「来てたのですか、カナン隊長」

アシヤナの言葉に、近衛隊長は右手を胸に置き、頭を下げて世継ぎの姫に最敬礼をする。

「姫様、失礼ながら拝見させていただきました」

「カナン隊長、ここでは敬礼は不要よ。ところで、まだお迎えでは……ないわよね？ この後ティラータが直接手ほどきをしてくれる事になっているのよ」

心配そうに伺うアシヤナ。

女官長の差し金でここに来たのではないかと勘ぐっていたようだ。

「いえ、私はその雑用係りを拾いに来ただけでございます。ご心配には及びません」

姫の背後で、ベルナールが蛇に睨まれた蛙のごとく、固まって青くなった。

慌てるベルナールの首根っこをむんず、と掴み、にこやかにアシヤナへ挨拶をすると、カナンは雑用係りを引きずっていった。

それを見て、アシヤナが「まあ」と眼を丸くしていたかと思えば、ころころと鈴が転がるように笑い声を立てた。

「少しだけ、同情するわ」

二人を見送っていたレイチエルも、そうこぼしたのだった。

「さあ、少し休憩したら、次は私とだアーシャ」

そう言ったら思いのほか嬉しそうなアーシャを見て、ティラータの心が温かくなる。

久しぶりの休息に、アシャナとレイチェルの華ふたつ。

今までのむさ苦しい男所帯を思い出し、やはり女性がいるだけで場が華やいでもいいものだなあと、ティラータは達観せずにはおれなかった。

いや、ティラータも女ではあるのだが、そこはもう置いておいて……。

罣 1

悪い予感というものは、願いに反してよく当たるものだ。

思っていたよりも、事件はすぐに起きた。

近衛隊長が危惧し護衛を強化するための算段すべく、ティラータの元を訪れたその翌日だった。

アシヤナ姫が何者かに襲われた。

「きゃあああ——！！」

侍女の叫びに、次の間に控えていた近衛兵たちがいつせいに、居室になだれ込んで来た。

たそがれ時、お茶を楽しみながら一息ついていたところを狙われたのだった。

ポタリと鮮血が絨毯に滴り、赤い染みをつくる。

「ティ……ティラータ！」

「くっ……」

アシヤナ姫を壁際に押しやり、その身で庇うように立つティラータの左腕をかすめ、壁に矢が突き刺さっていた。

「ボルド！」

駆けつけた近衛副隊長を呼び寄せると、手早く指示を出す。

「早く姫を安全な部屋へ。矢は西の方角から放たれた。探させろ、私もすぐに追う！」

そう言つと、自らの剣で刺さったまま軸を切り落とし、念のため血に染まった矢尻を抜き取って腰の袋に収める。

ティラータは、上腕の肉を少し抉られた状態だ。

アシヤナに傷をつけずに済んだなら、このくらいの傷は厭わない
ティラータであつたが、剣を抜く隙が無かつた己の無防備さに、思
わす舌打ちしていた。

ランカス・ボルドはティラータの止血を手伝いながら、部下に大
声で追跡と護衛増員の指示を出す。

「姫は私とこちらへ！」

「い、いや、ティラータが」

ティラータの腕から、赤い筋となつて流れた血を見て、アシヤナ
は真つ青だつた。

ボルド副隊長はアシヤナを促すのだが、呆然とティラータを眺め
ていて動こうとしない姫を強引に抱き上げた。

ティラータはマントの切れ端で腕の傷を縛り終え、痛みを微塵も
感じさせることなく微笑んで見せた。

「大丈夫だ、アーシヤ。あなたは早く安全な場所へ」

勢い良く踵を返すと、窓を乗り越え外へ飛び出していく。

「ティラータ！」

アシヤナの呼び止めには応じず、猫のようにしなやかに2階から
着地する。

あつという間に薄暗い夕闇の中へと消えていった。

泣き崩れるでもなく、ただ呆然と涙を流すアシヤナ姫を抱え、ボ
ルドは居室から寝室へとつながる扉をくぐる。ベッド脇の長椅子に
アシヤナをそつと下ろした。

「ランカス、ランカス……お願い私はいいの。ティラータが怪我を
つ、血が」

ランカス、と昔のように呼ばれたボルド副隊長は姫の前に跪き、
取り乱す白い肩に両手を添えて落ち着かせる。

「大丈夫ですよ、彼女なら応急処置はしましたし、急所も外れてい

ましたから」

「でもっ！」

両肩の手に力が込められるのを感じ、涙で潤む眼をボルドに向け
る。

「姫、あなたに大事あれば、彼女は、黄金の獅子レグルスはここにいる意義
を失います——そして誰よりも悲しみます、判りますね？」

くつと息を飲み、不安を押し込めた反動からか唇がかすかに震え
ながらも、しっかりと頷く。

ボルドも頷き返して、不躰にも肩に乗せていた手を引っ込める。

扉の向こうからバタバタと、それこそ不躰な足音を響かせて、乳
母でもある女官長が数人の侍女を連れて駆けつけてきた。

「姫様、ご無事でございますか！」

それを受けて、ボルドはスツと立ち上がり姫の御前を女官長マイ
アに譲り、後ろへ下がる。

「行くの、ボルド？」

アシャナの不安そうな眼がボルドを追っていた。

「いえ、私は姫のお傍に。何かありましたら、必ず声をおかけ下さ
い」

一礼すると、寝室から居室につながる狭い部屋で、護衛を続ける
ことにした。そしてそこから他の近衛兵に指示を出す。

「陛下の護衛をされているカナン隊長に、改めて報告を——」
部下が走り去るのを、厳しい表情でボルドは見送っていた。

黄昏時は去り、城は闇色に覆われようとしていた。

城のいたるところにある、魔道灯のほのかな明かりが次々に灯つ
てゆく。

滲むようなやわらかい光は、かろうじて足元に影を落とす程度の

ものだが、無いよりは随分ましだ。
まるで霞がかった夜の月のような。

ティラータは屋根を伝って賊の影を追っていたのだが、ついに見失い、仕方なく近くのバルコニーに降りる。

王宮は大騒ぎなのに対して、ここは辺りを見回しても物音ひとつしない。

「ここは……」

確かここは城の西側にある、王弟アレス公の居住区域にさしかかった辺りだろうか、とティラータは眼をこらす。

姫が襲われたことで、当然知らせが届いているだろうにもかかわらず、あまりに静かで別世界のような。

ふと、背後に気配を感じて振り向くと、誰かがバルコニーへと出てくる。

「そこにいるのは、誰かね？」

庇の影で顔はよく見えず。が、上品な身のこなしのすらりとした長身と、深みのある凜とした声で、ティラータにはそれが誰なのかすぐに分かった。

「アレス公」

ティラータはその人物のほうへ向き直り、右手を胸に当て、深く頭を下げた。

「許可も無く立ち入りまして、申し訳ございません。アシヤナ姫を襲った賊を追っていたのですが、見失い、捜しているうちにここへ」
アレス公が魔道灯の光の内まで歩み寄ってきたので、その顔がようやくはっきりと見えた。

現イーリアス国王の弟、フォレス・ライ・アレス公。
ブロンズ色の髪が、魔道灯のオレンジ色の光に照らされて、さらに印象的だった。

「先程、アシヤナが襲われたことは聞き及んでいる」

淡いブルーグレイの瞳を細めると、アレス公はティラータに歩み寄り、強い力でその腕を取る。

「怪我をしているではないか。こんな応急処置だけで……ティラータ、手当てが先だ」

ティラータは慌てて腕を引こうとしたのだが、しっかりと掴まれてしまっていた。

強引に振り払おうとすれば振りほどける程度の力だったが、それはそれで公に失礼と思い、断念した。

「大した怪我ではありませんので」

「君がよくても、私やアシヤナは心配するのだ。跡が残らぬよう、安心させるのも務めと考えなさい」

静かに、諭すように話すアレス公は、いつも穏やかに微笑んでいる。

「——分かりました」

ならいい、とようやく腕を開放される。

「アレス公もお気をつけ下さい。供もつけずにおひとりで行動なさいませんよう……私はこれで失礼させていただきます」

軽く礼をし、バルコニーの手すりに手をかけた丁度その時、ティラータはアレス公呼び止められる。

「明日は祭り前最後の、満月だね。……森へ行ってみなさい。『ゆらぎ』の元へ」

突然の言葉に、振り返るティラータ。

「さあ、行きなさい。早く処置をしたほうがいい」
促すアレス公の言葉。

「でも……」

問いただそうとするティラータを、手で制す。

「供の者がもう来る」

ティラータはためらいつつも、素直に従い手すりを乗り越えた。階下の石畳に飛び降り、そのまま振り返らずに走り出す。

——アレス公は何を知っている？

——いつの頃からだろう。かの人が多くを語らなくなってしまったのは。

ティラータは城内を戻りながら、思いを巡らせていた。

まだ、アシャナと遊ぶことだけが己の仕事だった幼い頃。二人の娘の傍には、いつも大声で子供のように笑うアレス公がいてくれた。やんちゃな私達に振り回されつつも、飽きずに相手をしてくれた。それでも笑ってつきあつて、終いにはアーシャとティラータとアレス公の三人で、陛下に叱られたこともあった。

王弟である彼に、悪戯の供をさせていた事に、後からひどく恥じ入ったものだった。

素朴な飾らない人柄は、今のアーシャに少なからず影響を与えている。

「満月……ゆらぎ、か」

何を言わんとしているのか分からないが、それを伝えるためわざわざバルコニーへ供も連れずに現れたのだろうか、とティラータは振り返る。

明日は魔法障壁周辺への見回りを念入りにせねば、と思っていると、走る足元がもつれた。

「なっ……」

手足が、かすかに痺れはじめる。

「ご丁寧に、遅効性の毒か」

心の中で舌打ちし、ふらつく足元を剣で支えながら行き先を変更する。

もつたろうか———そういえば早く処置をとわれたな、などと苦笑しながらティラータは壁伝いに歩いて行くしかなかった。

こんな時こそ、あまり頼りたくない薬師ジャージャービーンを目

指して――。

ティラータが目を覚ますと最初に目に入ったのは、天井から束になつていくつもぶら下がる草やら木の皮やら、トカゲのこげたものなど怪しげな乾物だった。

コポコポと、瓶の中で空気が踊る音が聞こえてくる。
なぜ、こんな所で寝ていたのか分からず、天井を見つめたまま、しばし考え込んでいた。

「気分はどうかしら、お嬢さん」

ベッド脇に人がいたことに気付き、そつと首を横に向けると、そこには見慣れた人物。

どうやら、目的の場所にはたどり着けたようだった。

「世話になったな、ジャージャービーン」

そう言いながら起き上がるつと、片足をベッドの縁に下ろしたところで、頭がぐらりと揺れた。

「馬っ鹿じゃないの、あんた！」

ジャージャービーンと呼ばれた人物は、すつと片手を上げ、ティラータの額に人差し指をトンと押し付けた。

「……っ？」

たつたそれだけで、起きかけていた身体が、元のベッドの上にふわりと落ちる。

「あんたの喰らった矢には、遅効性の神経毒が塗られてあつたのよ。中和薬が間に合ったから良かったけれど、まだ完全には抜けきつてないわ。安静にしてらっしゃい」

腕を組んで仁王立ちの、ジャージャービーン。

「それから、あたしはジャージャービーンじゃなくて、ジャン・

ジャック・ビーン・ゲイブルズよ。何度言えば分かんのだよ！まったくあんたたちアシャナ姫のとりまき共は！」

彼の名はジャン・ジャック・ビーン・ゲイブルズ。王宮に薬師として雇われている。元々はフェルナンデーという遠い異国の出身なのだが、訳あってイーリアスに流れ着き、この国に根付いて久しい。

ちなみにジャージャービーンというのは、まだ舌足らずな頃のアシャナ姫が、彼につけたあだ名だ。

薬師としての腕は確かなのだが、ちょっと趣味に行き過ぎな感が否めない、毒草毒薬マニア。

容姿は、もじやもじやにしか見えないブラウンの髪に、少しだけぼつちやりとした体つきは体毛が濃く、口元には髪と同じ色の髭が少々……。

まあ簡単に言ってしまうと——「男」だった。

彼は白い薬師の作務衣の袖をまくり、ティラータの額に手のひらを当てると、しかめっ面を更に厳しくする。

「まだ熱もあるじゃないの、ほら、横になんなさい」

なぜ、おネエ言葉なのかは、年長者に対して聞いては失礼なのかとか、もつとも今更だとかいろいろあつて、ティラータには追求する勇気がないので放置してある。

仕方なくベッドに戻り、窓に目をやると、空が白み始めているのに気付く。

その横では繊細そうな指で濡れ布を絞り、薬師はティラータの額を冷やしてくれる。

「一晩中、世話をしてくれたのか？」

あら、とニヤけて、意味ありげにティラータは見返された。

「やあね、覚えてないのね。あんた、誰にここまで運んでもらったと思ってるのよ。あたしはほら、こんな細腕でしょ。いくらあんた

が女の子でも、あたしには運べないわよ。イヤね、ボルドちゃんよ。心配して来たんでしょ、あんたならお偉い王宮医師様のところより、あたしのところに来るんじゃないかって……うふふ」

——もじやもじやが、くねくねと揺れている。

話が長くなるので、要約すると……。

意識が朦朧としたティラータは、かろうじて薬師のところに辿り着き持っていた矢尻を渡すと、そのまま部屋の扉にもたれかかるようにして気絶したのだった。

そこで、毒に詳しいジャージャービーンは事態を察し、その場で毒を判別し中和薬を飲ませ、傷の消毒をして手当てをしたはいいものの、非力な彼はベッドには運ぶことができない。

思案してみたが「まあいつか、こいつ丈夫だし」と放置していたところ、ようやくアシヤナ姫が落ち着き他の兵と護衛を交代してラシカス・ボルドがやって来たのだ。

それ幸いにと彼にティラータを運ばせ、更に看病までさせて、自分はやすやと先程まで寝ていた……という訳らしい。

突っ込みどころ満載の成り行きに、ティラータはこめかみに手を当てつつ聞いていた。

「けなげよね、彼。あんたたち、ちっちゃい頃からいつも一緒に仲いいわよね」

次から次へと良くしゃべるジャージャービーンに、ツツコミどころか合いの手も入れる暇もないのは、いつもの事で。ティラータは彼が少々苦手かもしれない、と時折思うのだった。

「ボルドは確かに、私にとって最も信頼に足る者だが、私は少々腹を立てている」

少しも自分との会話で楽しげに笑わないティラータを、薬師は横目で睨む。

「そこは素直に感謝するところでしょ」

ティラータは真顔で首を左右に振る。

「あの男は仮にも近衛副隊長の任を預かる者だ。この状況下で己の護る姫を置いて、私の看病などに時間を費やすのは馬鹿げている。会ったら一発殴らずにはおれないな」

ジャージャービーンは、ぽかんつと口を開けたまま聞いていた。

「あんたって……」

呆れた——その言葉をかろうじて飲み込み、ベッドに横たわる、
気高い黄金レグルスの獅子を見下ろす。

「そうね、正論ね」

ふうつと溜息をつき、でもね、と続ける。

「殴つてもいいけれど、ボルドちゃんの気持ちには、ちゃんと感謝しなさいね。あんたのこと大事に想ってくれる数少ない人間なんだから」

珍しく良いことを言ったわね、あたし……なんて想っていそうな男に、ティラータが頷く。

「了解した。年長者の助言は、聞いておいて損はない」

もじやもじやの髪を揺らして、勢い良く振り向いた顔は、悔しそうに歪んでいた。

「きいいいいつあんたちよつと一言余計なのよ！どうせあたしは年増よ！」

想っていた通りの薬師の反応に、ようやくティラータが小さい声を上げて笑った。

しばらくすると、ジャージャービーンは大欠伸をしながら毒を中和する薬を調合し、水とともにティラータに差し出す。

「起きられる？」

ティラータはベッドに座り、薬を飲む。

「ありがとう、ジャージャービーン。私はそろそろ行くよ」

今度はしっかりとした動きでベッドの縁に腰掛け、薬師を見る。

そう言い出すのを分かっていたのか、渋い表情ではあったが薬師は先程のように頭ごなしには反論しなかった。

「止めても聞かないんでしょ、どうせ。……どこまで行く気？」

腰に手を当てて、ティラータを見下ろす。

「西の森へ」

「いつもの日課ってわけ？一日くらいどうってことなくないの？」

「いや、今日行かなければならない用ができた」

「ふうん」

首をかしげまだ何か言いたげな薬師をよそに、ティラータは靴を履いて立ち上がり、傍に置かれていた愛刀に手をかけると――。

扉をノックする者が。

面倒臭そうにジャージャービーンは鍵を開ける。

「もう、今取り込み中よ、誰なの」

そこに立っていたのは、ボルドだった。

罇 3

「罇をすれば何とやら……ね」

薬師は楽しそうにティラータを振り返る。

「ボルド、なぜまたアーシャの元を離れた？」

ティラータは信じられないという面持ちで、扉の向こうの友を見る。

「まあ、お入んなさいな」

小指を立てて口元の零れる笑みを隠しながら、ジャージャービーンはボルドを部屋へ招いた。

すると、眉間に皺をよせていたのはティラータだけではなかったようで、ボルドはすかずかと歩み寄ると、遠慮なくまくし立てた。

「あなたこそ、何ですかその姿は。毒が抜けきってないのに、いったいどこへ行こうという気ですか！」

相変わらず言葉こそ丁寧だが、表情からはいつもの彼の柔らかさは消えている。

昨夜は毒矢によって意識を飛ばすほどの傷を負っていたにもかかわらず、すっかり支度を整えて涼しい顔で剣を腰に挿す姿に、ボルドは憤りを隠せない様子だった。

そのまま無言で睨みあい始める二人を止めるのは、薬師の役目だ。

パンパンと手を鳴らす。

「はいはいはい、ちよつと落ち着きましょー二人とも」

まるで幼児に言い聞かせるような仕草に、少し納得がいかない二人だったが、とりあえず気持ちが削がれたのは確かだった。

「ティラータ、あんたは言うことあったんでしょ？」

ああ———と思い出したティラータは、徐に目の前のボルドに向かつて頭を下げた。

え……とボルドは仰天して後ずさるのだが、その顔はなんとも気味の悪い物でも見るかのように歪んでいる。

「看病してくれたと聞いた。ありがとう、ボルド。心配かけた」

その言葉に目を瞬かせて驚き、ボルドはすぐに柔らかく微笑む。

「い、いえレグルス……そんな改められると照れ……」

言い切らぬ内に、思わぬ衝撃が脳天に響いた。

「ぐっ……」

ティラータの拳骨が、下あごを突き上げていた。

何が起こったのか把握しきれぬボルドが隣を見ると、ジャージャービーンが額に手を当て溜息を漏らし、そして目の前のティラータは鼻息荒く仁王立ちだった。

顎を押さえ、うずくまりそうになるのを何とか堪えているようだ。

「ひどいですよ、レグルス」

「うるさい。夜中にアーシャの元を離れるなど何事だ！ どんな理由があるにせよ、姫の警護の責任者であるお前が悪い。殴らせろ」

「——もう殴ったじゃないですか！」

溜息をついて言うボルドと、対称的にすっきりした表情に戻ったティラータ。

「で、どこに行く気ですか」

まだ顎をさすりつつ、ボルドが問う。

「西の森だ。調べたいことがある」

「——今ですか？」

「今日でなくば意味が無くなる、らしい」

「らしい、って。誰からの情報ですか、調べるって何を？」

「アレス公からだ。詳しい事は調べてから報告する」

「アレス公？」

その名に、ボルドばかりでなく傍で茶を入れていたジャージャー
ビーンまでもが驚きの声を上げた。

「……ちょ、ちよつとあんた、それってマズくない？」

ジャージャービーンの言わんとしていることは、ボルドにも分か
っていた。

「尚更あなたを一人で向かわせるのは嫌です」

ボルドの表情が硬くなるのを、ティラータは苦笑いで見ていた。

「昨夜の件ですが、本当に狙われたのはアシヤナ姫でしょうか？」

私はむしろ、あなたこそ命を狙われていたのだと思えてならない」

ボルドの言葉に、ティラータはどう反応すべきか悩む。

彼の言う可能性は、矢を受けたその場で頭にかすめた事だ。

わざわざティラータが傍に居るのを確認できるときに襲撃するな
ど、失敗する確率を考えればおかしいことだ。

ならば姫の警護の隙を作る為、今回の襲撃はわざとティラータを
狙ったとも考えられるのだ。

だからこそティラータとしては、ボルドが簡単にアシヤナ姫から
離れるべきではないと憤るのだった。

「私が標的となるなら都合が良いではないか。アーシヤに影響ない
程度の距離で相手をおびき寄せ、潰していけばいい」

「何言ってるんですか、体調はまだ戻っていませんですね？ そ
れで再びあなたに何かあれば、それこそ本丸である姫が危なくなる
だけです」

「体調はさほど悪くない。ジャージャービーンにも外出許可をもら
った」

突然話を振られ、ぎょつとしてポットから視線を上げると、彼を
睨むボルドが目が合う。

「い、いやーね、許可っていうかほら、この娘言い出したら聞かな
いから……」

おほほと笑い、更に鋭くなるボルドの視線を手に持つポットで

遮って、わざとらしく目を泳がせていた。

「と、いうことだから、私はもう行くぞ。しばらく私はアーシャの元へは行けぬが、ボルド、私の無事を伝えてくれ」

そう言つて腰に剣を挿し直し、扉を開ける。

「ちよつ、レグルス！」

「話は後で聞く。今日は運動会だろう、ジャージャービーン？」

正午には戻る——そう言つて我関せずとばかりに去ってしまうテイラータを、眉間に皺を寄せながらボルドは見送るしかなかった。

テイラータを見送つた薬師は、やあねえ、その運動会つてのは何よ……と憤慨していた。

「ご愁傷様、ボルドちゃん。お茶でも飲んで、落ち着いてから戻んなさいな。あんまり休んでないのでしょ？」

コトリと置かれたカップの湯気を見ながらボルドは、溜息をひとつ落とす。

しかしこの茶の色は何なんだと思うが、それを胸に押し込んで一口すすり、呟く。

「あなたは相変わらず、あの人には甘いな、ジャージャービーン」
分かつてるわよと言いたげに、ふふと笑う薬師。

「そりゃ、あの娘はレグルスだもの」

「それは分かっていますが……」

「いいえ、あなたは分かかってないわ。ううん、ここの国の者ほとんどが分かかってないわ。剣聖というものの本当の存在価値を知らなすぎよ、その実力もね」

モジャモジャを細い指でくると整えながら、彼の目は遠いところを見ているようだった。

「あたしはね、小さい頃に先代のレグルスに会つてのよ」

——先代？とボルドは聞き返した。

たしか、と思い出す。

ティラータがレグルスの地位に史上最年少で就いたのは、一年前。その間、約三十年ほど空位だったと記憶している。

ボルドはいち剣士として、興味を引かれた。

「どんな人だったんですか？」

そうね、と遠い目をして語るその瞳には、憂いを知らぬ少年のように光を灯し、口元には笑みがこぼれる。

「すごい人だったわ。圧倒された……あたしの人生を変えてしまうほどに」

それ以上は語らず、ボルドに向き直る。

「信用してるのよ、これでも。あの娘は、己の身体のこともあるの言いたいことも、彼のお人の考えも、ちゃんと分かってる」

彼の人――。

ボルドの顔は曇る。

「彼女はアレス公を裏切れません。それを利用されれば……」

「ボルドちゃん」

言葉を遮られ、ボルドはハツとする。

「アレス公は確かに、反国王反体制の旗印のように祀り上げられているみたいだけれど、それは本当に公の本意なのかしらね？」

「それは……」

ボルドたち、近衛隊には頭の痛い話だった。

この国には今、現王である陛下を倒そうと考える者たちがいる。

イーリアスは経済的にも文化的にも他国の遅れを取り、既に国民の生活水準は各国の平均を下回っていると言っているだろう。

それを憂いるのは誰もが同じだ。

だが、一部のものはこの衰退の原因を、魔法障壁とそれを支える国王へと帰結させる。

事実、魔法障壁は国王ただ一人の祈りにより支えられているのだ。だから国王を廃し、魔法障壁を取り払い、真の意味で自立した国

家を建て直すべき、というのが彼ら反王制派の狙いだ。

そしてその後に新たな王を立てる。障壁を支える魔力を決して持たない者へ——それがアレス公であるらしい。

薬師は物思いに耽るボルドの手前に、瓶に入った矢尻を置く。

「ちよつと特殊な毒なのよ。あたしは出所さぐるわ、あんたは早くテイラータを狙った不審者とやらを洗い出さないな」

モジャモジャを指でくゆりながら、尊大に座った足を組みなおす。

「——やはりあなたも狙われたのがレグルスだと？」

「そうねえ、国王側にあの娘がいる限り、仮に陛下を降位させたとしてもその後上手くいきっこ無いじゃないの」

「だから、殺すと？」

珍しく難しい表情のジャージャービーン。

「さあどうかしらね。あの娘を簡単に殺せると思っているくらいの間抜けなら、取り越し苦労かも。……ファラの大祭が終わるまで、気が抜けないわねえ。カナンの誘い、断るわけにいかなくなったじゃないのさ」

「ああ、運動会って言うてましたけど……何ですかそれ？」

ジャージャービーンは両手で頬を覆い、ボルドを睨む。

「あいつのいつもの嫌味よつ。あたしを、あんな野蛮で日差しの強い所まで引きずり出すだなんて！ 乙女の肌にシミができたらどうしてくれるのよ！ ちよつと、あんたからも上司に言うてちょうだい」

こうなると、ジャージャービーンは止まらない。

ボルドは不用意な言葉を後悔しつつ、苦笑いを浮かべながら頷くしかなかった。

深い森に朝日が差し、朝もやの中に鳥のさえずりが響く頃、男は藪を掻き分け太い木の根を越えて歩いて行く。

その傍らには大きな黒い狼が一匹。

先日ティラータに、天狼星と名乗ったその男は、藪を掻き分ける手を止め、狼に目配せする。

狼はそれを受けて、従順にその場で伏せる。

足を止めたシリウスの前方からは、数人の男の声がかすかに聞こえる。

そのまま数歩だけ後方に下がり、回り込むように場所を移し木の上から隠れて様子を伺う。声がするのは魔法障壁のすぐ真下辺りからだった。

そつと幹を伝って近づくと、一人が魔法障壁の真下の土を掘り、二人の男が剣を構えて周囲を警戒していた。

三人ともにフード付きマントを目深に被り、顔がはっきりと見えなかった。

シリウスは鋭い視線でその様子をじっと見守る。

しゃがみ込んで土を掘っていた者が手を止め、脇に置かれていた石版のようなものを手に取る。

——何だあれは？

シリウスが目を凝らすと、魔方陣のような刻印がちらりと見える。それを素早く地中へ埋めると、もとあったように土を被せて踏み固める。

「よし、いいぞ。行くぞ！」

用は済んだのか、周囲を警戒しながら男達はその場を離れるつものようだ。

「——行け、ヴラド」

小さくシリウスが囁くと、黒い塊が勢い良く藪から飛び出て、男達に襲い掛かる。

「うわあああつー!!」

ヴラドと呼ばれた狼は、まず一番手前にいた男の剣を素早く避け、その手に牙をつき立てた。

仲間を庇うように、もう一人の男が咄嗟に斬りかかり、狼は牙を放して飛びのける。

「グルルオオッ」

「なんて大きさだ! ……何なんだ、この狼は」

不審な三人の前に立ちはだかる狼は、普通の倍くらいはあるだろうか。

黒い立派な毛並みに、光る金の瞳。右顔には額から頬にかけて大きな傷跡があり、獰猛さを更に引き立たせている。

じりじりと狼の気迫に押され、魔法障壁を背に行き詰る男達に余裕の表情は無い。

「倒せ、このままでは障壁に巻き込まれ、俺達が黒こげだ」

一番奥の石版を埋めていた男が指示すると、前の二人は黒狼に斬りかかる。

「うおおおー!」

巨体に似合わず素早く剣をかわすと、わき目も振らず最奥の男に襲いかかる。

「ガアアッ」

鋭い爪が男のフードごと頭部をかすめ、鮮血を撒き散らす。

「くっ、この糞狼が!」

剣を振り回す。

狼は闇雲に振られたような攻撃などモノともせず、身軽にかわす。それでも男は額から血を流しながらも、走り出す。

「抜けるぞ、お前ら援護しろ!」

狼は口元と右爪から血を滴らせたまま、大きく咆哮する。

——グルルルッ

「ひっ、化け物め!」

追ってくる気配がないことに気付いたのか、男達は一目散に逃げ

てゆく。

静かになったその場に、黒い狼が腰を下ろす。

「ご苦労だったな、ヴラド」

シリウスが高見の見物から降りてくると、狼の頭をポンポンと撫でる。

目を細めてそれを受ける姿からは、先程の激しさを想像できないくらい穏やかなものだった。

「さて……アレを掘り起こす前に、お前のそのケガレを洗い流すか」
血糊でべつとりと汚れた連れを見て、零す。

「クウウ」

同意のような声に、シリウスは苦笑する。

「悪かったな、ついでに好い場所教えてやるから、そう勘ねるな」
一人と一匹は、森の泉に向かって歩き出す。

ティラータは愛馬ブランシスを駆って西の森に入っていた。いつもどおり森の泉に向かい、馬を残して魔法障壁の見回りに、歩いて森を分け入るつもりだ。

泉までの道のりは比較的平坦で木々もまだまばらなのだが、泉を境に奥に行けば行くほど鬱そうとして馬の足では入れない。

馬を泉の畔につなげ水をやりつつ、泉の清らかな輝きにティラータは心奪われる。

森への探索の準備の手を止め、しばし誘惑に負けることにした。昨日からの騒動で水浴びすらできなかった為、汗を流したい衝動にかられたのだった。

「少しくらい、いいかな……本当はあまり時間がないけど」
独り言で言い訳しつつ、服を脱ぎはじめ。

冷たい湧き水に腰まで浸かると、水をすくって顔や身体を洗い清める。

——気持ちいい。

左腕の傷が水に浸らないよう気を使いつつ、簡単に水浴びを終えて戻ろうとすると。

ちょうど脇の茂みから、覚えのある気配ともうひとつ、黒い影が飛び出してきた。

咄嗟のことでティラータは、腰まで泉に浸かったまま、一糸纏わぬ姿で啞然としていた。

目の前には巨大な黒い狼が、じっとこちらを見つめたまま立ち塞

がる。

そしてもうひとつの気配がすぐ側まで迫ってきたことに気付き、慌てた。

「ま、まで……来るなっ」

狼に続くように、茂みから顔を出したシリウスと目が合う。

突然現れた一人と一匹を、啞然としたまま交互に見比べるティラータ。

「……シリウス？」

狼は金色の瞳を細め、ティラータを眺めたまま腰を下ろす。するとシリウスがおもむろに泉に入り、ジャバジャバと水音を立てて近づいてくるのを、ティラータは困惑して見ていた。

「何だ、これは！」

シリウスが鋭く冷たい目で見下ろし、左腕を掴み上げる。

「な、何？」

掴んだ腕を凝視するシリウスに、ティラータは包帯が巻かれた傷のことを指しているのだと悟り、昨夜の失態を思い起こして彼から視線を外す。

「こ、これはかすり傷で……お前には」

「違う」

——え？とシリウスの言わんとしていることが分からず目線を戻すと、シリウスは相変わらず厳しい視線でティラータを見ている。

ティラータは、びくりと鼓動が跳ねる。

シリウスが腕から視線を外し、ティラータの糸纏わぬ胸の中心を凝視し、拘束していないもう片方の手をそこに伸ばす。

白く透き通るような、幼い肌。

緩やかな曲線を描く二つの丘陵の中ほどに、紅い剣を象った装飾文様が鮮やかに浮かびあがる。

——イーリアス紋——

剣と魔法に護られし、この国を司る紋章。それは王家とこの国の所有となるものに刻まれるもの……。

痛々しいまでにはつきりと刻印された文様にシリウスの指が触れると、ビクリと身体を震わせ、自由の利く右手でその手を振り払う。
「——っ、触れるな！」

振り払うその両手の肘から手首にかけても、紅い、血のような文様が埋めつくされていた。

「ただの刺青ではないな……魔術の、痕跡か」
シリウスの目には、それ以上の言葉が含まれているような気がして、ティラータは顔を背ける。

失態だ。

これの存在を、今の瞬間までティラータは忘れていた。
見られるつもりはなかったのに、とティラータは唇を噛む。

いや、他の誰に見られても、この男には見せるべきではなかった。
シリウスのグレイの瞳には、何もかも見透かされている気がして、冷や水を浴びせられたかのように背筋が冷える。

「お前には関係ない……見るな」

びくともしない左手をそのままに右手で胸を覆うが、片手では到底、紋章も二つの可愛らしい膨らみもまた隠しきれんことはなかった。

「すまん」

シリウスは己のマントを外すと、泉に浸かっただまのティラータに、ふわりと掛ける。

意外な行動に驚いてシリウスを見ると、既に彼の整った顔には、先程の鋭さは無くなっていた。

訳もわからず拍子抜けしているティラータの腕をそつと放し、自分は脇に避けることで、ティラータの視界に再び黒い狼を入れる。

「紹介する。あれは俺の半身だ。名はヴラドという……人狼だ」
ヴラドと呼ばれた狼が、立ち上がる。

「人狼……？」

黒い艶のある毛並みは、木漏れ日を浴びて輝き、両の金の瞳を引き立たせる。

すつと伸びた前足は太く力強く、どんな獲物もあの爪につかまれば無傷ではいられないだろうと思わせる。

森の王者を思わせるその只ならぬ風格に、ティラータは見惚れていた。

ヴラドは引き寄せられるように泉に近づくと、水に足をつける手前で止まり、ティラータの様子を伺う。

ティラータもまた大きな獣に近づくと、そつと両手を差し出した。狼は金の眼を細め、耳を後に傾けて、ティラータに頭を寄せる。

ティラータの指が柔らかい毛に埋もれ、そのまま屈んで頬を寄せると、日なたの臭いがした。

「私はティラータだ、よろしくヴラド？」

懐かしいような、それでいて心躍るような、くすぐったい感情が胸に湧き上がるのを不思議に思いつつ、ティラータは心地よい毛並みを撫でる。

「泉を使わせてやってくれ、血の汚れを落としたい」

すっかり存在を忘れていたシリウスの言葉にハツとしてよく見れば、ヴラドの口元と前足は血糊でべっとりだった。

それで立ち止まっていたのか賢いな、と感心して微笑む

「かまわない——好きに使え」

言い終わらぬうちに喜び勇んで泉に入ってゆく狼と、入れ替わりに泉から出た。

身体を拭き、茂みで服を着込むと、シリウスが濡れたマントを木の枝に干していた。

ちょうどそこにずぶ濡れの狼がやってきて、大きく身体を震わせる。

「あ、こらっ、やめろ！ 濡れる」

シリウスが文句を言っても、ヴラドはかまわずもうひと振り。

「お前、わざとか！ 遊ぶのなら他でやれ」

ハッハッハツと舌を出し、前足を伸ばして尻尾を上げ、まるで犬のように主であるシリウスを遊びに誘っている。

汚れを落として、上機嫌なのだろう。

「く……はははっ」

ティラータはたまらず笑い声をたてた。

シリウスは少しばかりバツが悪そうにこちらを見た。

「ヴラド、お前ちょっと向こうに行ってる」

今度は素直に従い、ヴラドは畔の岩の上に寝そべり、日向ぼっこを決め込むつもりのようなのだ。

ティラータが笑いながらその様子を眺めていると、シリウスに座るよう促された。

「腕を出せよ、巻き直してやる」

そう言われて左腕を見ると、包帯がほどけてしまっていた。

不思議と、素直に腕を差し出していた。

シリウスは黙ってティラータの包帯を一度全て外し、現れた傷口を見て、少しだけ顔をしかめた。

「矢傷か。……深いな、縫うか」

独り言のように呟くと、腰袋から何かを取り出す。

「かすり傷だと言っただろう、かまうな」

ティラータがそう言うと、彼は眉間を寄せる。

「すぐ済む。じっとしている」

ティラータが引き戻そうとした腕は、またしてもびくともしない。困惑するティラータを無視し、シリウスは片手で液体の入った小瓶の蓋を口で引き抜くと、その中の液体を傷の上から盛大にぶちまけた。

「……っあ」

傷にしみる。度の強い酒のような臭いだった。

眉を寄せるティラータを他所に、なにやら針と糸のような道具にも小瓶の液をかける。

ティラータは嫌な予感にたじろぐ。

「ま、まさか本当に『縫う』のか？ 傷口を！」

シリウスはいつものようにニヤリと笑う。

「すぐ済む、我慢しろ」

そう言つと、有無を言わず、摘んだ傷口に針を当てた。

「痛い」

すっかり元通りどころか、ずっと丁寧に巻かれた包帯を押さえ、ティラータが呟く。

それを道具を片付けながら、くつくと笑うシリウス。

「三日ほどしたら傷が塞がるだろう、その頃に抜糸する……初めてだったか？」

「……」

ティラータの無言を、シリウスは肯定ととらえた。

「ここ数年はこれが世界の主流だ……見たことなかったか？」

ティラータは言葉もなかった。

少し俯き考え込むティラータを、シリウスは黙って見ていた。

「誰もが、その恩恵にあずかれるのか？」

傷が塞がらず、開いては出血を繰り返したり、傷口から毒が入り死に至ることも減るのだろう。

「ほとんどの医師は、技術を持っているだろうな」

「……そうか」

短く、それだけしか応えられなかった。

こんなにも遅れているのかと、ティラータは溜息をつく。

濡れたブーツを脱ぎ水を切るシリウスを、遠い眼で眺めながら不思議に思う。

「何も、聞かないのだな」

身体に刻まれた紋章のことも、ティラータ自身のことも……。

呟くようなティラータの言葉に、ブーツ片手に振り返った。その向こうではヴラドも薄目を開けてこちらを伺っていた。

「聞いて欲しいのか？」

ティラータは愚かな事を口にしてしまったと後悔しつつ、首を横に振る。

「いや、忘れてくれ」

ティラータは気を取り直すように立ち上がり、腰に剣を挿す。

「思いのほか、時間を無駄にしてしまった。私は見回りに行くが……」

……

シリウスが濡れたままのブーツを履きながら、その綺麗な顔に笑みを浮かべる。

「もしかして、魔法障壁の見回りか？」

「そうだが？」

それを聞いてシリウスが可笑しそうに笑うと、岩の上で寝そべっていた狼が、主の傍らに飛び降りる。

「先程面白いモノを見つけたんだが、来るか？ 案内してやる」

まるで自分の庭でも案内するかのような堂々とした物言いに、ティラータは驚きを通り越して、呆れる。

緊張感に欠ける男と狼を見ていてふと、ティラータは気付く。
狼の付けていた血糊――。あれは一体、何の血だ。

ティラータは自分の迂闊さに、舌打ちする。

「一体何があつたのか、詳しく話せ！」

厳しい眼を向け、シリウスを睨みつけた。

ティラータはシリウスとその僕^{しもへ}ヴラドを伴い、魔法障壁に急いでいた。

泉から一番近い障壁に辿り着くと、そこから北上してシリウスが何者かと遭遇した場所まで歩く。

「だいたい、そういう事は真っ先に言え！」

ティラータはシリウスの話を聞くと、腹を立てながら一人と一匹を同行させたのだった。

「そう言われてもな……その後見た眺めのほうが衝撃的だったしな、ヴラド？」

——ガウ。

がつくりと頂垂れながらもティラータは歩を緩めない。

「しょーげきてきって何なんだ、いったい……」

ティラータはぶつぶつと文句を言っていたが、少し拓けた場所に出てようやく足を止める。

「ここか？」

「……多分な」

ゆらめく魔法障壁の根元に、点々と血と足跡があり何事かがあった形跡があった。

ティラータは空の白い月を見上げる。

——満月。

「おい、何か変じゃないか？」

シリウスの警戒した低い声にハツとしてティラータが目線を戻すと、魔法障壁が見たこともないくらい激しく揺らいた。

咄嗟に三人は壁から後ずさり、身構える。

「そんな……」

ティラータの目の前で障壁の光が揺れ、地面の一点を中心に半円形に闇い穴が現れた。

「気をつける、何かいる」

呆然としていたらシリウスに肩を引かれる。

気付くと穴の向こうに幾人もの気配——殺気が立ち込めていた。
「チッ」

ティラータは剣に手を添え、鋭い声で警告を発する。

「この壁を越えること罷り成らぬ、死にたくなくばここから去ね！」
ティラータが鋭く言い放つと、穴の向こうがざわめく。

顔は見えないが、ひと一人が通り抜けられるであろうサイズまで広がった穴の手前に男が出てきた。

「女か……ということは、そっちの奴らは失敗したのか。使えねえなあ」

その男の声は、低く太いが若いものだった。

ティラータがシリウスを窺うと、彼は受けて『ああ』と頷く。

「俺が……というよりヴラドが追っ払った奴のことだろうな」
そうやりとりしている内に、穴から人が這い出て来た。

「死にたいのか、っていうか勇氣あるな。あの穴は安定してるのか？」

感心したようなシリウスにティラータは呆れつつ、這い出てくる武装した男達を睨みつける。

「確か、下に石版が埋まっているのだったな？」

「ああ、恐らくそれが魔法障壁を中和してるのだろうな」

「……手伝えシリウス」

ティラータが剣を抜く。

森の向こうから出てきた男達も、応じて剣を抜いた。

ざつと十五人か。

ティラータが穴に眼を遣ると、先程しゃべった男は穴の向こうでこちらを見ている。恐らくあの男が指揮を執っているであろう。

「命が惜しくば、大人しくしろ」

無駄であるう勧告をすると、躊躇なくティラータへと襲い掛かる男達の剣を受け流し、そのまま流れるように目前の一人を斬り払う。どう、と地面に倒れる仲間を見ると男達の目が一層鋭くなり、怯みつつも慎重に剣を構えていた。

「ぐずぐずするな、取り残されたくなければ、そいつらを殺せ」
穴の中から先程の冷淡な声が指示を出す。

見たところ纏まりが無いように思えるこの男達は傭兵なのだろうか、とティラータは考えながらも淡々ともう一人を斬り捨てる。

「器用なものだな……急所を外してるのか？」

ティラータが斬った勢いで足元に転がってきた男を一瞥して、シリウスが感心したように言う。

その間にもティラータは襲い掛かる屈強そうな者たちをいなし、容易くなぎ倒す。

シリウスは剣すら抜かず傍観を決め込んでいる。

その足元には主の意思を酌んだのか、黒い狼が静かにかしづく。

「随分と舐められたものだ……小娘ひとりで充分とも言つつも
りか」

嘲るように穴の向こうから声が響く。

ティラータは剣を一振りして、その切っ先を声の主に向ける。

冷たく穿つような眼差しに、武装した男達の動きが固まる。年若い少女のような女剣士に、身体が竦み何故か打ち込めないでいた。

冷や汗が、頬を伝う。

「くそっ、一斉にかかれ！」

残りの兵たちが掛け声とともに剣を振りかざして斬りかかる。

ティラータは一步も退くことなく剣を構え、最初の一撃を下からなぎ払うと、その勢い衰えぬまま素早い太刀で斬り下ろす。

細い刀身は打ち負けることなく鮮やかに目前の二人を血に染め、崩れ落ちるその者達さえ利用して次の攻撃をかわすと、眼を疑うような素早さで襲い来る男達の懷に潜りこむ。

「な、早っ」

小柄な女剣士に間合いの内に入られたことに男達が気付いた次の瞬間、屈んだ姿勢のままティラータは囲む彼らの足を容赦なく刀の峰で打ち払う。

倒れこんだ男達は、次の瞬間に襲った焼け付くような痛みにより、ようやく何が起こったのかを悟る。

「ぎゃあああああっ」

女の細腕のなせる業とは到底思いも寄らない、骨まで達するその斬撃に叫喚が巻き起こる。

あつという間に半数まで減らされ、繰り広げられた惨状に残った男達の顔も青ざめる。

しかしそれも一瞬のことで、一息つく間もなく数人の後に回り込んだティラータは、剣の柄で後頭部を打ち昏倒させていた。

残り二人となったところで邪魔が入る。

「おい戻れ。そろそろ時間だ」

穴の奥から先程の男が指示を出すと、残っていた者達は心得たとはかりに素早く穴に飛び込んだ。

次の瞬間、ヴンツという音と共に再び障壁が大きく揺らぎ始める。

「おいあんた、今は引いておいてやる。……また会おう」

ティラータは鋭く睨むと、言い放つ。

「二度目は無い！」

低い笑い声が聞こえたが、じきに穴は閉じ、その向こうを窺い知ることができなくなった。

そして何かが割れるような破裂音がすると、先程の穴の下の土が巻き上がり、石版らしき破片が現われる。

「……あれか、埋めたと言っていた石版とやらは」

ティラータは障壁に近づき、土を掻き分け真つ二つに割れた石版を掘り起こした。

「……派手にやったなレグルス。手伝う隙など無かったな」

ティラータが振り返ると、呻きながら倒れている男達を避けながらシリウスが近づいて来るのが見えた。

ティラータは少し呆れ顔だ。

「手伝う気などなかっただろ、お前」

シリウスはその言葉を受けて少し肩を竦める。

「……まあ、お手並み拝見というところだ。その礼という訳ではないが、その石版を埋めた奴に印をつけといたから、それで帳消しにしてくれ」

さわやかだが胡散臭い笑顔を、無駄に整った顔に貼り付けたシリウス。

ティラータは溜息まじりに見つめる。

「印ってどんな？」

「主犯の男には顔にこう……爪跡をざっくり」

そう言って顔の右側こめかみから頬にかけて指をなぞるシリウス。そして手下の男の右手に噛み傷がひとつ。

どちらにしても相当目立つ傷だろう。

ティラータは石版を手には持ち上げる。

首謀者の割り出しに全力を傾けねばならないだろう。この森で謀を進めるのなら、この自分を足止めせねばならない。昨夜の襲撃と今日の騒動は一連の出来事と見て間違いない。

ティラータは足元に転がる傭兵らしき男達を見下ろし、溜息をつく。

「運ぶの、面倒だな」

どれも命に別状はないとはいえ、かなりの重傷者たちばかりだ。

「——これ、全部運ぶ気か？」

シリウスが呆れたように言う。

「じゃあ、どうしろと？」

「——はは」

何か言いたげな顔で誤魔化すシリウス。

「ところで、お前の剣は面白いな」

シリウスは少しおどけた様に話を変えて、ティラータの剣をじろじろと見る。

「片刃とはな……」

ティラータは剣を払い、鞘に収めた。

「私は非力だからな、競り合いで手を添えなければ押し戻せないことも多いし、片刃でなければ我が身も共に斬れてしまう。それに、峰を使えば今のようにな致命傷を与えずに生け捕ることも容易い」

それを聞いてシリウスが考え込む。

「それで、この大荷物ができる……」

シリウスが呆れ顔で足元の今だ昏倒する男達を見下ろす。

一部を残して殺してしまえばよいものを、と彼が考えているのは先程からの態度で分かるが、ティラータには賛同しかねることだった。

手伝われなくて良かったと、ティラータは思う。もし彼が手出しをしていたなら、躊躇無く殺めていたのだろうか。

「心配は無用だ。これらの者は後で城から人を呼んで運ばせる」

ティラータはそう言うと、森から調達した蔦を縄代わりに、男達を拘束してゆく。

傷の酷い者には応急処置を施しながら。

十三人もいては手間だと、シリウスをたきつけ手伝わせる。

「……うっ」

締め上げていると意識を取り戻す男に、シリウスがもう一撃を与えて再び昏倒させる。

「おい、あんまり手荒に扱うな。死んだらどうする」

ティラータの突っ込みに、シリウスはやれやれと肩を窄める。

「どんだけ冷徹なんだ、お前は。手は前で縛れよ」

「——甘ちゃんだな。逃げられたら厄介だぞ？」

呆れながらも、ティラータの指示通り手を身体の前で縛りなおす。既に拘束を終えた数人は、傷の痛みに呻きながら意識を取り戻すものも出てきた。

ティラータはその者たちをチラリと見て笑う。

「甘いかどうかは知らぬが……この者達の森がどんな様相をしているのかは分らんが、この西の森は迷いの森だ。案内無しで無事に脱出できる者はいない。手を前においてやるのはせめてもの情けだ。私が共を連れて戻るのをここで待つ間、何もない方がいいのだがな？」

そう言っただけで笑うティラータを、青い顔で見上げる男達。

鬱蒼とした森の向こうから、獣の咆哮が響き、捕虜の身体がビクリと震える。

「な……ここに置いていく気か?!」

正気に戻った男達には、ティラータが暗に指し示す状況が理解できたようだった。

「なあ、俺たちはただの雇われ……傭兵だ。頼む、置いていかないでくれ」

辺りを見回して震えながら懇願する。

どんな獣がやってくるか分からない森に手足を拘束されたまま置いていかねば、間違はなく、血の臭いに引かれて襲ってくる獣の餌食になるだろう。

ティラータは情けない懇願を無視して残り全ての者の拘束を終え

ると、十三人全てを魔法障壁の傍まで引きずった。

「お前達は城で尋問を受けることになる。それまでここで待て」

その死刑宣告にも似た言葉を、青ざめて聞く男達。

それを面白そうに眺めているシリウスとヴラド。

「忠告しておくが、逃げようなどとバカな考えは止めて大人しくしていることだ。お前達が壊そうとした魔法障壁が、今はお前達を護ってくれるだろう。森の獣たちは障壁を恐れる。よほど腹が減ってなければ……だがな」

ティラータは無表情でそう告げると、男達は手足を拘束されながらも尻でいざって障壁ぎりぎりまで我先にと退がる。

肩を寄せ合うように集まり大人しくなる様は、滑稽というしかなかった。

ティラータとシリウスは、恐怖に慄く傭兵たちを尻目に、再び森の中を引き返す。

「——待ってくれ、本当に置いてゆくのか?! おい!」

傭兵たちの情けない声に、ヴラドが振り向き金の瞳を向ける。

「ひっ!」

大きな威厳のある黒狼の姿に、これからの自分達の身に降りかかる危機を重ね、青ざめ息を呑む。

それを見止め、ヴラドは何も言わずにすっと振り返り、主を追って森の中へと去っていった。

その後、たとえ牢獄行きと分かってはいても、男達はひたすらティラータの迎えを震えながら待つのだった。

思い出と守りたいもの 1

シリウスとは泉で別れ、ティラータは愛馬を駆ってイーリアス城への帰路についていた。

相変わらず厚顔な態度のシリウスに、今回は助けられた形にはなるが、未だその正体を明かさない男にティラータは完全に気を許した訳ではなかった。

それでも剣聖という立場である以上、敵に回ることはないだろうと思い直しつつ、左腕の妙に丁寧に巻かれた包帯を見る。

あれほどの立ち回りをしたにもかかわらず、傷口が開くことはなかった。

……取り入れるべきは取り入れる。ジャージャービーンを通して、新しい医療技術の情報を得ることを心に決めるティラータだった。

程なく城下を駆け抜け、城門をぐり馬を休めると、ティラータは剣術場へと急ぐ。

既に約束の正午を過ぎようとしていた。

西の森での事件をいち早く報告せねばならないが、その相手が剣術場に揃っているのだ。陛下への報告が後回しになってしまいが、まずはカナン近衛隊長に会うのが先決と判断した。

足早に城内を走るティラータを、すれ違う文官や侍従たちが怪訝な顔で振り返るのだった。

その頃剣術場では突然集まった珍しい面々が、たまたま居合わせた下っ端の兵士達を無駄に緊張させていた。

近衛隊長アズール・カナンを筆頭に、その上司と顔を揃えることが稀な副隊長のランカス・ボルド。

弓射隊随一の使い手であるレイチェル・リンド。

陛下の信頼を得る天才薬師ジャン・ジャック・ゲイブルズと、宮廷魔術師次官のアレルヤ・オズマ。

そこが兵達の休憩所ともなる、剣術場の詰め所とは思えない顔ぶれだった。

渋い顔した薬師が、詰め所の中を熊のようにウロウロと歩き回る。

「……ちよつと、あの娘まだ戻って来ないの？」

ボルド副隊長は苦笑いを浮かべながら、ジャージャービーンをなだめる。

「心配なのは分かりますが、もう少し待ちましょう」

薬師はボルドをキツと睨みつける。

「傷だって昨日の今日よ、塞がってないんだからね！これだから体力馬鹿は面倒なのよ！ホント、自重ってモンを知らないんだから」

ぶつぶつと文句を言いながら怒りを納めきれない様子の薬師を、

赤毛の弓士レイチェルは頼杖をつきながら眺めていた。

「ねえ、本当にティラータひとりで大丈夫だったのかしら。あなたたちの話を聞くと、今日西の森で何かしら起きる可能性のほうが高いわよ。しかも、彼の御人絡みの……何かあって手間取っているとしたら——」

切られた言葉の続きを想像して、ボルドとジャージャービーンは色を失くす。

知っていて彼女を送り出したのは自分達なのだから……。

やり取りを部屋の隅っこで壁を背にして見守っていた、灰色のマントを羽織る小さな影がピクリと動く。

「……どうした、オズマ次官？」

ずっと黙っていたカナン隊長が、何かに反応した様子の小さな魔

術師に気付く。

「あ、あああの、えっと」

どもりながら、あたふたと手振りも大げさに挙動不審な動きをする。

「——落ち着きなさいよ、アレルヤ」

自分のことは棚に上げ、薬師が呆れ声をかけるのは、イーリアス宮廷魔術師アレルヤ・オズマ。

「すすす、すいません」

ふわつとしたタンポポ色の髪を無造作に束ね、小さな厚い丸眼鏡をかけた、これまた小さな背丈の少女は、イーリアス第二位の実力を持つ魔術師だった。

年は結構いつているのだが、いつまでたってもアガリ症が治らず、滅多に表舞台には現れない。

「で、どうした？」

カナンが促す。

「あ、はい……し師範長殿は今、城に入られた、よ、ようです」
一同が魔術師次官をまじまじと見る。

「す、すすす、すいません、わ私何かいけないこと言……」

「それは本当ですか?! どうして、分かるんですかオズマ殿?」

ボルドは驚きのあまり、彼女が言い終わらぬうちに聞き返していた。

「あ、あの……私、魔術で魔力の位置が、分かるんです。その彼女は特徴があつてですね……見つけやすいといいますが、その」
「アレルヤ、あんた凄いいじゃない!」

「ひいひいっ」

ジャージャービーンの感嘆の声にすら、ビクリと身体を震わせ、悲鳴を上げる次官。

丸眼鏡の奥のすみれ色の瞳が潤み、涙を浮かべて狼狽する。

「では、無事のようだからもう暫く待つとしようか」
カナンがそう判断し、泣きそうなオズマを解放してやれと、ついでに薬師に告げる。

「相変わらずね、魔術次官殿は、ふふふ」
レイチエルは面白そうに笑う。

「しかし、本当に凄いですねオズマ殿は。他の者も同様に所在が分かるんですか？」

「あ、はい。い、いいえっ」
オズマは滅多に褒められないせいか、ボルドの言葉に赤面しながらあたふたとする。

「ボ、ボルド副隊長は分かりません………すみません。あの、魔力を持っている方しか……」

ボルドが眼を瞬く。

「えーと、それはレグルスが魔術を使える、ということですか？」
「い、いいえっ、ちち違うんです、その、潜在的素質、という意味で内在している魔力で、充分です。た、たとえば、魔術師の子供とかで、将来魔術を使えるようにならなくても、ちち、血に伝わる、魔力があれば……ある程度は」

その説明に、感心した一同。

「ねえ、カナン隊長？それってつまり………すごく助かるのではないですか？護衛とか……」

レイチエルが複雑な表情でカナンを振り返ると、少し考え込んで口元を引き締める。

「ちよつと聞きたいのだが、オズマ次官？」

「はっはい、ななな何でしょう、近衛隊長殿」

竦み上がるオズマ。何か拙いことでも言ったのだろうか、と青ざめる。

「その能力は……いつから？」
んん？と首をかしげるオズマ。

「ええと、最初から……デス」

「最初?! 最初とは、まさか宮廷魔術師に取り立てられた、十年も前からかね?」

カナンが身を乗り出して問うと、勢いに押され壁に埋もれそうなほど押し付け、がくがくと首を縦に振る。

それを啞然と見ていたかと思うと、カナンは額を手で覆い、宙に浮いた腰を下ろす。

「……あ、あのお、主席魔術師ヨーゼル様も、ご存知です……よ?」

おずおずと小さい声で弁解する。

——ヨーゼル師

一同は大きく溜息をつく。

オズマがひとり首を傾げる中、皆諦めの境地にいた。

主席魔術師は齡八十を超えた、言っでは何だがヨボヨボの爺様だ。そりゃ、伝わらない筈だ……という虚しい空気が広がり、微妙な沈黙が続いたのだった。

そんな微妙な空気を破るかのように、何も知らないティラータが勢い良く入って来た。

「遅れて申し訳ない……どうしたのだ?」

ティラータはキョロキョロと静まり返った皆を見回す。

真っ先に我に返るのは薬師だった。

「ちよつと遅いわよ、あんた。何かあつたの?!」

ティラータはマイペースに一同の顔を見渡して、詰め所の扉を後ろ手に閉めた。

「——何か、あつたんですね」
ボルドが呟いた。

ティラータは先程西の森での出来事をかいつまんで説明する。
シリウスとのやり取りは、一部を省略して。

何者かが魔術を用いて魔法障壁に穴を開けることに成功した事。
それを待ちかまえるように『外』から傭兵たち武装集団が入り込んだ事。

これらはこの国の在り方を根底から覆す。

渋い表情でティラータの報告を聞いていたカナンが沈黙を破る。

「それで、障壁を破る手引きをした者たちは、どうしたのだ」

「はい、その者たちは私は直接見ていないのですが、シリウスによると――」

その名に、皆、驚きを隠せないでいた。

「またシリウスですか」

彼の狼がつけた印のことを話す。

「確か、先日モ西の森に現れたと聞いているが……君はそのシリウスをどう見る？」

カナンが問いたです。

「……剣聖のひとりである事は間違いありません。ですが、私にはまだその正体はつかめず……しかし極端な立場を取ることはないかと。後日、アルクトゥルス剣匠のベクシーに確認したいとは思っています」

「ふむ……分かった。そのシリウスとやらは君に任せる。では、我ら近衛はその傷を負った男達の搜索を引き受けよう。人の口は塞ぎようがないからな、どこかしらで情報が得られるだろう」

カナンは副官に目配せすると、了解したとボルドは頷いて見せた。

「次は、その障壁に穴を開けた方法だが――」

ティラータはオズマの前に、割れた石版を置く。

「効果としては、短時間だったが入ひとり通り抜けるには充分だった。待ちかまえて次々潜り抜けられれば、それでも相当数が侵入で

きるでしょう」

オズマは、引き寄せられるように近づき、石版を手にする。そしてぶつぶつと呟きながら魔方陣らしき紋章の解析を始めたようだ。

「魔法障壁の中和は、こちらが見ていた限りでは突然だった。発動条件が分かれば、今後対処しようがあるが……」

『また会おう』と言った男の言葉がずっと頭に残っていた。オズマは石版から顔を上げる。

「こ、これは、少しお時間を、い、いただきたいです」
頷くティラータ。

「それと、オズマ殿に頼みがあるのだが」
ティラータの言葉に、オズマは眼鏡を支えながら首をかしげる。
「……何でしょう？」

「西の森に捕らえてある庸兵十三人を、城まで運んでもらいたい」
「は、はい、お安い御用です。……あ、あああの、師範長殿わ私からも、お願いが」

もじもじとするオズマに、一同が嫌な予感に青ざめる。

「そ、その方たち、あの……」
オズマの厚い丸眼鏡が光る。

「ご、拷問しちゃっても……良いでしょうか？」

カナン隊長は冷静な顔に青筋を立て

副官ボルドは眉を八の字に下げ

赤毛の戦士レイチエルは妙に上げた口角をヒクつかせ
ジャージャービーンはもじやもじやを掻き篁りながら
そしてティラータは溜息をつきながら、言う。

「だ・め・だー!!」

気が小さい癖に何故か拷問好きの、少女のような魔術師次官（2

8）は、小さく呟くのだった。

「けち……」

幸い、誰にも届かなかったようだ。

思い出と守りたいもの 2

趣味の拷問の機会を失って、ぶつぶつと妄想に浸るオズマを捨て置いて、他のメンバーは今後の対策について話し合っていた。

まず、ティラータはオズマを連れ西の森へ戻り、彼女の魔術で捕虜たちを回収する。

その間にカナン隊長が陛下への報告を済ませ、ティラータが戻り次第捕虜たちから出来るかぎり情報を引き出す。

近衛よりも動きやすいレイチエルと薬師が分担して、怪我人の情報から実行犯を洗い出すことになった。

ボルドは暫くアシヤナ姫付きつきりになる予定だ。魔法障壁を切り崩そうと考える輩であるならば、国王とそれを継ぐ姫を排したい反国王派である可能性が強い。

特にアシヤナ姫は、陛下の代わりに魔法障壁への祈りの儀式を努められる唯一の存在だ。

そんなアシヤナ姫をティラータは心配し、常に側で守りたいのが本音だったが、四六時中居られるわけではない。だから近衛以外で信頼できて、女性であるが故により近くで警護ができるレイチエルやオズマ、また特例としてジャージャービーンを大いに当てにしている。

彼女たちは、交代でアシヤナ姫の側につめて守りを固めることになった。

それぞれが確認しあい、ティラータはオズマ次官を伴い立ち去ろうとしたところを、ジャージャービーンに呼びとめられる。

「お待ち、この筋肉バカ娘」

私のことかそれは——と少々いぶかしみながらティラータは足を止める。

「治療くらいして行きなさい。その傷で大立ち回りしたんでしょう？」

座れと言いたいらしく、呆れ顔で椅子を指し示す。

ティラータはオズマに謝り待たせて、大人しく従う。

「傷なら大丈夫だと思う」

淡々とそう言うティラータに、そんなの見てからよ、と包帯を解こうとしたジャージャービーンの手が止まる。

「……あんたこれ、誰にしてもらったの？」

今朝自分が巻いたものでないことに気付くが、しかしティラータが自分でやったにしては丁寧すぎる巻き方だった。

ジロリと自分を見る薬師から、ティラータは僅かに視線を逸らす。

「……シリウス」

「はあ？」

手早く包帯を解き、その傷跡を見て薬師が再び素っ頓狂な声を上げる。

「なに、コレ」

部屋を出て行こうとしたレイチエルやボルドまでこちらを窺う。

ティラータはバツが悪くなって顔を背ける。

「縫われた」

ジャージャービーンの顔が歪む。

「縫われたあー？ 誰に！」

「だから、シリウス」

「いつ？」

「……大立ち回りの前」

薬師はティラータの腕を食い入るようにあちこちから眺め、言葉を失う。

それからようやく何か納得したのか、塗り薬を取り出すと布に付

けて腕に当て、再び包帯を丁寧に巻きなおした。

「ありがとう」

素直に礼を言い、これで用は済んだと思ったのだが、ジャージャービーンが続けた。

「後でもう一度ちゃんと診せて、詳しく聞かせなさいよ」

「ああ、分かった」

詰め所をオズマと連れ立って出ようとすると、ティラータは何やら言いたげなボルドと目が合う。

しかしふいに視線を外され、何も言わないボルドを素通りして、二人はそのまま急いで城下へ向かったのだった。

ティラータとしてもそれ以上の追求が無いことに、実はとても安堵していた。

正直、泉での出来事は伏せておきたかった。

——この身体の紋章をあの男に知られたことは——

一方、近衛隊長アズール・カナンは重い足取りで陛下の執務室に向かっていた。

城の上階にあるそこは、カナンにとって最も滞在することの多い場所だ。

カナンの顔からは、彼独特の穏やかさは見られず、珍しく眉間に皺を刻まれていた。

執務室に近づくと、部下の近衛兵がその扉を開け何者かを通してるところだった。

貴族らしい華やかな衣装を身に纏い、だが上品に落ち着いた貫禄

ある中年男性は、執務室を出るとカナンに気付いたのか足を止めて待ちかまえていた。

いつものような穏やかな表情に戻っていたカナンは、その人物の前で恭しく頭を垂れる。

「ユモレスク伯爵、お帰りですか？」

「お前にも会いたかったところよ、カナン隊長」

ユモレスク大臣と呼ばれたこの男、政でかなりの勢力を握る実力者だ。

ガレウス・ユモレスク伯爵。

身分も実力も備えたこの男は、彼の人——王弟アレス公の後ろ盾でもある。

「昨夜の騒動は聞き及んでおる。陛下のご心配の種は早々に摘まれるよう、私からもお前にしっかりと頼まねばと思っておったところだ」

「は、只今最善を尽くしております」

カナンは鼻白みながらも、そう言って再び頭を垂れる。

近衛の指揮権は陛下にある。

議会の中枢を握っているこの男であろうと、どうこう出来るものではないことは理解しているのだらう。だからこそ、陛下を心配するという立場を盾にしつつ、『頼む』という言葉の中に数々の思惑を乗せてくる。

「期待しておるぞ。……おお、そうであったカナンよ。人手が足りねば特別に優秀な騎兵隊を貸し出すこともやぶさかではないが」

相変わらず威厳を放ったままそう言う伯爵に、カナンは涼しい顔で応じる。

「それには及びません。じきに首謀者を捕らえられるでしょう」
「だとよいがな」

無碍もない断りの言葉を特に咎めはしなかったが、皮肉にも取れ

る言葉を言い放ち、ユモレスクは帰ってゆく。

彼の言う騎兵隊とは、議会の息がかかった部隊だ。
伯爵を見送り、やれやれとカナンが一息ついて振り返ると、執務室前で警護する二人の近衛が苦々しい顔で立っているのに気付く。
「些細な事で感情的になるな。近衛の仕事を全うしろ」
「はっ」

二人の若い近衛はハツとして姿勢を正し、顔を引き締める。
それを認めてから、執務室の扉を叩き入室を告げる。すると、内の侍従長がカナンを確認して招き入れる。

「陛下、近衛隊長のカナン殿が参りました」

内扉をもうひとつくぐると、王室の居室や謁見室に比べると質素でこぢんまりとした、国王の人柄を思わせる執務室に辿り着く。

大きな執務室の机に向かい、イーリアス元首、ミヒヤエル国王が書類に署名しているところだった。

「カナン、報告せよ」

カナンは机の前に立ち、一礼する。

「陛下、人払いを願います」

その言葉に、ミヒヤエル国王は筆を止めると、白髪交じりの眉毛を挙げ、ブルーグレイの瞳をカナンに向けてくる。

「——侍従長」

後に控えていた老侍従長は頷くと、他の侍従と警護の近衛を伴って、先程カナンの入ってきた続きの間へと退いた。

「申せ、カナン」

「は、ありがとうございます——今日、西の森で魔法障壁が一部破られました……」

報告を聞いたミヒヤエル王は、しばらく黙って深く刻まれた眉間

の皺をそのままに目を閉じる。

「先程……二時間ほど前か、尋常では無い大きな揺らぎはそれであつたか」

「お気づきでしたか」

カナンは少し驚いた。

——陛下はずっと城におられたというのに、そんな僅かな変化も感じ取っておられるのか……

「ティラータはどうした、あれの管理は任せてあるはず」

報告の場に居ないことを考えれば、まだ何かあるということくらい、国王は容易に察する。

「彼女はその折に捕らえた者たちを運ぶため、魔術次官のオズマを伴って再び西の森へ向かつております。じきに戻りましょう」

カナンは国王に促され、ティラータから受けた詳細を初めから話す。

始終厳しい表情で報告を聞いていた国王は最後にひとつ頷くとカナンを労わる。

「ティラータには城に戻り次第、報告に来させましょう」

「——怪我はもう良いのか」

ティラータの心配をする国王に、カナンは微笑みで応える。

「どうやら、心配はないようです。森でシリウスに傷口を縫ってもらったようで、傷は塞がりつつあるそうです」

「——ほう、シリウスがな」

国王は少しの間遠くを見たまま考え込んでいる。

しかしすぐに何かを悟ったかのように笑い声を立てた。

「陛下……？」

こここのところ滅多に笑うことすらなくなった主の変化に、長く仕える近衛隊長は驚きを隠せない。

副隊長時代を含めて陛下のお側にいるようになって、早十二年。

様々な出来事を近くで見てきたカナンですら、今のような陛下の晴れ晴れとした笑顔は数えるほどしかない。

「そなたの思う通りに対処は任せる。それとティラータが動きやすいよう、配慮もいつも通りにな」

国王は落ち着いた口調に戻っていた。

「畏まりました」

カナンは敬礼をして王の執務室を後にする。

——陛下は、シリウスについて何かご存知なのかもしれない——
カナンは久しぶりに見たミヒヤエル王の笑い声に、そう思わずにはいられなかった。

イーリアス王は猛々しさこそ無いが、賢王である。

長く仕えるカナンにも、陛下の深い考えは読めないことがままある。

ミヒヤエル王は民の様子も貴族達の動向も、諸外国の情勢なども感心するほどよく知っている。シリウスについての情報もまた、国王ならではの情報網で何かつかんでいるのかもしれないとカナンは考えた。

その情報源のひとつが、七剣聖の要であるアルクトウルのユリス・ベクシーであるのはカナンのよく知るところでもある。

ひと癖もふた癖もある鋭い眼をした老人を思い浮かべて、肩を竦める。

ティラータは西の森までオズマを同乗させ、泉まで来たところだった。

「オズマ殿、ここで馬を降りて徒歩で行くことになる」

華奢で頼りなげな魔術師は、ティラータに手伝われておっかなびっくり馬を降りる。

「な、なな何ですって！あるき、ですか……」
がつくりと頂垂れる。

ここまで馬でありながらも、険しい森の中、揺れる馬上でぶるぶると震えながら来たのだ。

常日頃、引きこもり生活をしているオズマにとって、それだけでも相当な重労働であり、既にその顔には疲労の色が滲み出ている。

「やはり、少し身体を動かされたほうが良いな、オズマ殿」

ティラータは呆れ気味で馬をつなぐと、渋るオズマを引き連れてさっさと森へ入る。

密林と表現してもよいそこは、動物と植物でひしめいている。

「っひいいいい」

落ち葉を踏みしめれば虫達が這い出て、枝葉をかき分ければ幹には蛇が巻きついていたりする。

当然、さほど遠くないところから狼の遠吠えも聞こえてくる。

「よ、よくこんな所へひとりで来られますね」

オズマの問い、というか悲鳴のような言葉にティラータは苦笑する。

慣れたというより、こちらの方が性に合っているのだ。

蛮族は森の民だ。

森で生まれ、森で生き、生涯森から出ることは無い。

その血が半分とはいえ蛮族である自分が今、人の中で暮らしていることのほうが、特殊なのだと思っていた。

「ティラータ殿？」

オズマは自嘲するティラータが何を考えているのか分からず、何か自分が悪いことを言ったのだろうかと首を傾げる。

ティラータはそんなオズマの気持ちを悟り、話を変える。

「こんな所だからな、あの者たちにとっては既に、拷問にちかい。

オズマ殿が何もしくとも、あなたが楽しくなる状況だろうな」

オズマがふいに足を止める。

「……どうした、オズマ殿？」

俯いていたかと思えば、ふいに顔を上げてニヤリと笑う。

その眼は恍惚として、彼女らしからぬ不敵な表情だった。

「……」

何かまずいことを言ったかもしれない、と思うティラータ。

「うふふふ。さ、先を急ぎましょう」

「……そうか」

まあ、やる気が出たのならいいか、とティラータは納得することにした。

思い出と守りたいもの 3

ティラータとオズマはそう時間もかからず魔法障壁まで出ると、それを伝って捕らえた男達のところへ辿り着いた。

捕虜たちが一斉にティラータたちを振り向く。

その顔はまあ、想像通りだ。

ティラータの顔を見るや否やヘナヘナと脱力する様は、それまでの男達の状況を容易に窺い知れる。

「一、二、三……十三。うん、欠けていないな。よしよし、それじゃオズマ殿、頼む」

「お、おいっ、今度は何だよ。そいつ魔術師じゃないか、この森から連れ出してくれるんじゃないのかよ?!」

待っている間に、捕虜として牢に入るか、それとも森を抜けて逃げるかの天秤は、すっかり捕虜のほうに傾ききっている様子の男達。ティラータはそんな捕虜の声は無視して、辺りを見回していた。

「オズマ殿、広さは足りるか？」

「え、あ、はい。……ちよつとあの木が邪魔、でしょうか……」

そうか、とティラータが呟くと、木の前まで歩み出る。

楕円形に広がるその場所に、一本だけ取り残された木は、大の大人ひとり分はありそうな幹の太さだ。

この森ではまだ小さい方なのだが……。

ティラータは木の前に立つと、そつと幹に触れる。

——済まないな、許してくれ。

誰にも聞こえないほどの呟きのあと、ティラータは数歩退がり剣の柄に手をかけ、腰を低く構える。

騒いでいた男達もその気迫に、何が起きるのかと息を呑む。

次の瞬間、素早く剣を抜き払うかたちで一閃したかと思うと、そのまま流れるような一連の動作で剣は鞘に収められた。何が起ったのだろうと呆然としている捕虜たちの前で、木はメキメキと軋む音とともに倒れていった。

「……」

捕虜たちの顔は、青ざめていた。

「これでいいかな、オズマ殿……根元が少し邪魔かな？」

鋭い切り口の株を指して、ティラータが息ひとつ乱さず振り返ると、オズマは嬉々として頷く。

「ただ、大丈夫です。多少の凹凸はへ、へっちゃらです」

捕虜たちは互いに目を見合わせる。

多勢でも勝てなかった相手、ティラータの実力を本当の意味で理解した瞬間だ。

ティラータはずかずかと男達に歩み寄り、見下ろす。

「これからお前達を、魔術を使って城へ転移させる」

「な……魔術??」

再びざわめく。

まあ当然か、とティラータは思う。

本当ならわざわざ魔術など使わない。これだけの人数を転移させるなど、並みの魔術師には不可能なのだから。

「おい、あのちっこいのが一人でやるんじゃないだろうな?!」

一応、それくらいの魔術に対しての知識はあるようだ。

「ちっこくても、我が国の宮廷魔術師だが……つくづくお前達は見ただ目に騙されるのが好きだな」

ティラータは笑う。

小娘と侮って捕らえられたのは男達おとこの方なので、口を噤むしかなかった。

ようやく静かになったところでオズマは皮袋を取り出し、中に入っていた白い砂を地面に全てばら撒いた。

小さな白い小山となった砂に、オズマが手をかざすとフワリと風が巻き起こる。

「——我が魔力、我が手足となりて、描け道しるべ」

日ごろのドモリなど微塵も感じさせず、なめらかな詠唱だった。

白い砂がサラサラと動き出し、地を這い、男達の周りを流れてゆく。

そしてあつという間に、男達を囲んで魔法陣が出来上がった。オズマが一步その中に入る。

「そ、それではティラータ殿。わ、私は一緒に戻りますので」

「ああ、後は頼む。私もすぐに戻るから」

オズマが頷く。

「——我を導け、光となりて道の果てまで——」

光と共に、ティラータの目の前から、オズマと十三人の男達が消える。

巻き起こる風に髪をとられ、ティラータは目を瞑る。

「……相変わらず、鮮やかなものだな」

魔方阵すらきれいさっぱり消えた森に、ひとり取り残されたティラータは呟く。

ティラータもまた、長居は無用とばかりに踵を返すのだった。

* * *

王城の奥の院、王女の部屋にアシャナ・ル・イーリアスは居た。昨夜の襲撃からますます行動に制限がかり、大人しく自室に閉じこもるしかない状況だった。

居間のソファ―に腰掛け、侍女が茶を用意し終わると、退くことを指示して外に待機していたボルド近衛副隊長を招き入れる。

「私にも、きちんと報告してね、ボルド？ ティラータは今どうしているのかしら」

人払いされ二人きりになったのをいい事に、アシャナは気安い口調でボルドを見上げる。

「残念ながら、未だ報告できるほど犯人に目星はたっていません。レグルスは、只今西の森へ行っています。帰り次第、陛下への報告へ行かれると思います」

じつと次の言葉を待ち見つめていたアシャナに、ボルドは溜息をつく。

「彼女のケガならば、大丈夫ですよ。特に後遺症もないようですから」

ボルドは安心させる為にか、目を細めて笑顔を見せる。

「……いつ会えるのかしら？」
ボルドは逡巡する。

「陛下への謁見後、ですかね」
ボルドの複雑そうな表情を見て、アシャナは彼も同じ事を考えていたことを悟る。

「捕まえる……つもり？」
悪戯っぽくアシャナが言う。

「……ええ、そうですね」
につこりと笑って答えたボルドに、アシャナが乾いた声で笑った。

「ちよっ……待てボルド」

ティラータは抵抗するのだが、有無を言わさぬボルドの腕が腰に回され、小脇に抱えて運ばれていた。

「言い訳は聞きません」

毅然とした口調のボルドは、前を見据えたまま力任せにティラータを抱え、城の廊下をずんずんと歩く。

そこは女官もまばらで兵の出入りもほとんど無い、王城の奥の、アシャナ姫の自室からさほど離れていない場所。

「放せボルド、自分で歩くから」

さすがのティラータも、華奢な自分の腕力ではボルドの体軀に抵抗しても無駄なことは分かっている。

ジタバタした手足を引っ込め、言葉で解放を求めた。

「嫌です」

ボルドの無碍もない、短い返事だった。

一体、自分は何をしでかしてここまで怒らせたのだろう、とティラータはようやく真剣に考え始める。

この男、ランカス・ボルドは滅多なことでは怒らない。……というか激しい感情をそうそう表に出さない。いつも穏やかに笑っている。

だが、幼い頃より共にあったティラータは良く知っていた。

意外と短気である、そしてとても頑固だ。

ティラータは、ふう、と溜息をつく。

「おや、溜息ですか、良いご身分ですね」

こちらをちらりとも見ず、低い声で言うボルド。

——あ、まずい。

最初は、彼がそんなに不機嫌だとは全く気付いてなかったティラ

ータだった。

発端はアシヤナ姫の顔を見に、訪れたことだった。森から帰り、無事オズマの転移が成功して捕虜たちを牢に入れたことを確認し、ミヒヤエル王へ謁見も済ませた。

既にあらかたカナン隊長から報告が上がっていたため、さほど言うべきこともなく退出しようとしていたとき、陛下に呼び止められた。

——姫が心配している、会っておきなさい——
そんな内容だった。

ティラータとしても、昨夜心配をかけたまま不安そうにしていたアーシャをそのままに置いてきたことは、ずいぶん心に引っかかっていたのだ。

だから、特に何も考えずにアーシャの元へと直行した。

「無事で良かった、ティラータ」

心底ホッとしたようなアーシャの笑みに、ティラータは心癒される。と同時に、こんなに不安にさせた自分が不甲斐なく感じる。

「心配させて済まなかった、アーシャ。でもアーシャが何ともなくて良かった。しばらくは警護が厳重で煩わしい思いをさせるが、どうか自重して欲しい」

ティラータはアシヤナの前に跪き、そう訴える。

まるで姫に仕える騎士のように。

「ティラータ……」

「アーシャに危険が及ぶかもしれないと考えただけで、私は自由に動けなくなるよ」

ティラータは微笑む。

「うん……ティラータも無理はしないでね？ 怪我をしているのだから、ちゃんと休まなくてはダメよ」

ティラータを心配するアシヤナ姫に、ティラータは大きく頷く。

「大丈夫、大した傷ではないから」

ティラータが安心させるようにそう言うと、アシヤナは少し困ったような顔をし、おずおずと手を差し出した。

「約束して、私にはちゃんと本当のこと話して？」

「ああ、誓うよ」

ティラータはアシヤナの手を取って誓う。

……が、その手をぎゅっと握り返したかと思えば、真顔でその後立ったボルドに視線で合図を送る。

「ボルド！ やっぱりあなたの言った通りよ、回収して頂戴！」

「は、御意」

啞然とするティラータをボルドが引き寄せると、抱えるようにして持ち上げた。

「な、ボルド？」

なぜ自分がボルドに抱えられているのが理解できず、ティラータは大きく目を瞬かせアーシヤを見下ろす。

「……熱、あるじゃない」

アシヤナは姫らしからぬ笑みを浮かべ、命令を下す。

「ボルド、ティラータを回収、自室に閉じ込めて頂戴」

「御意」

ボルドも短く答えると、ティラータをまるで荷物のように脇に抱え込んだ。

「は、放せボルド」

ジタバタと暴れるティラータを他所に、ボルドは姫に向き直り一礼する。

「では姫、失礼致します。警護は増員しておきますが、信用のける侍女以外は、今夜はもう通さないで下さい」

「分かったわ。じゃ、よろしくね、ボルド」

そうしてボルドに抱えられたまま、ティラータは手を振るアシヤナの元を離れ、城内を連れていかれたのだった。

そして先程のくだりに戻るのである。

アーシャは呆れていたようだが、ボルドは明らかに怒っていた。

思い出と守りたいもの 4

勝手知ったる他人の部屋……と言わんばかりに失礼な態度で、ボルドは了承も得ずにずかずかとティラータの部屋に入る。

そして入ってすぐの椅子にティラータを降ろすと、中から扉を閉めた。

未だに不機嫌な様子のボルドに、不満をぶつけ損ない、ティラータは黙って座っているしかない。

「何故、姫と私が怒っているのか分からない、といった様子ですね」

言いながらボルドが無表情になる。

これは少々まずいかもしいれないと、ティラータは身を窄ませる。

「休憩どころか、食事もなくに取ってませんね？」

「……あ」

忘れていた。

短いその反応に全てを悟り、ボルドが深い溜息をつく。

「何か用意しますから、あなたはここで待っていて下さい」

ジロリとひと睨みして部屋を出て行った。

ほう、と一息ついてティラータは窓の外を見る。

何故だかとても久しぶりに自室に帰った気がする。

さほど大きくもない窓は、テラスなど付いておらず、明かりを取り風を入れるのに必要な程度のものだった。

その窓の下はまるで断崖のように遙か下まで何も無く、塔に囚われているかのように錯覚する造りだ。

そこからの眺めは素晴らしく、昼間であれば城下街を一望でき、

なおかつ西に広がる森と魔法障壁の一部が目に入る。

部屋は二間続きで、寝室と居間に分けられている。

剣術を尊ぶイーリアスの剣術師範長とはいえ、どの部隊にも所属せず一介の剣士でしかないティラータが、城の中でも王族に近い場所に部屋を与えられているというのは異例だった。

この事実もまた、ティラータを忌まわしく思う者や身分に拘る者にとって面白い筈もなく、彼女の立場を一層厳しいものにしていた。

ティラータはボルドが戻るまで、特に普段と変わりなく身支度をして待っていることにした。

腰の剣を外して汚れを拭い、手入れをする。そして思い革のブーツを脱ぎ、荷や小道具を外して用意してあった水で身を清める。

楽な服に着替え終わったところで、ボルドが戻って来た。

「食事を用意したので、ちゃんと食べてください」

幾分か穏やかに戻りつつあるようなボルドに、ティラータは少し安堵して席についた。

「ありがとう、ボルド。」

素直に礼を言い、小さなテーブルに置かれた食事に手をつける。部屋には小さめのテーブルと椅子が一組しか無く、ボルドは部屋の片隅に置いてあった武具を入れる木箱に腰を下ろした。

ティラータのほうは、それを見てまだ説教が続くのかと苦笑した。「解放されると思っていたんですか？」

ボルドも苦笑い。

「……ゆっくりでいいですから、ちゃんと食べてください」

重ね重ね言われる。

さして会話もなく、ティラータは食事をし、ボルドはといえばそんなティラータを見つつ、何か考え事でもしているようだった。

ティラータはふと思う。

近頃は本当に忙しくて、この男とはゆったりと過ごす事は稀になっってしまったと。

お互い口数が多いほうではないので、共にいても特に何をしゃべるでもない沈黙がかえって心地よいと、いつも感じていたことを思い出す。

だからか思いのほかリラックスして食事ができ、口元も自然と綻ぶ。

「何をにやけているんですか？」

ティラータの表情に気付いたようだ。

「……何でもないよ。まだ怒っているのか？」

怒気は感じられないが、硬い表情は完全には崩れていない。

「……自分は万能ではない。と日頃言っていたのは誰でしたか。休まねば隙をつかれるし、思わぬミスもします。そうなって後悔したくないのなら、せめて食事くらい取るべきですね」

やぶへびだったか……ティラータは目を逸らす。

「心配かけて、すまなかった」

小さい声で呟く。

この男とアーシャだけだ。ティラータの心配をして、こうしてわざわざお節介をやくのは。

だから、逆らえないのだった。

「食べ終わったのなら、もう休んでください」

ボルドは追い立てるようにティラータを立たせ、寝室へ追いやるようにする。

「え？ あ、いやまだ早いし。丁度いいからお前が居るうちに明日の打ち合わせをして……うわぁっ」

ティラータは再び担がれたと思うと、そのまま寝室の方へ運ばれる。

またかと嘆く暇も無く、今度はベッドに置かれた。

見下ろすボルドは、呆れ顔だ。

「休んでください。縛りつけられなくなったら、今すぐ有無を言わせない強さだった。」

「……分かった」

ティラータは諦めて素直にシーツへと潜りこむ。

ボルドが居間に戻ったので、ようやく解放されると安堵していると、すぐに戻ってきた。

「ボルド？」

ティラータの額に冷たく濡らした布を置く。

「熱、結構ありますよ、本当に心配させないで欲しい」

そんな風にされ、じっと見つめられると、観念するしかない。

「……分かった」

ティラータは額に気持ち良いたさを感じながら、目を閉じる。

——変わらない。

子供の頃から、本当に困ったときは同じ顔をしていた。

「ボルド」

「何ですか？」

「お前も休んでくれ。昨日、あまり寝ていないのだろう？」

クスリと笑う。

「大丈夫です、ちゃんと交替で休憩してますから」

「ボルド」

「？」

「早く戻ったほうが良い。あまりここに長居すると明日から私が女官たちにイビられる」

目を伏せたままで笑う。

「……何ですか、それは？」

ふふふ、とつい声に出してしまった。

「レイチエルによると、お前は城の女官たちに人気があるのだそうだぞ？ 私はいらん事で女達に苛められるのは御免被る」

「……はあ」

ボルドはバツが悪いのか、顔を背けて照れを隠す。

すると、そのほんの一瞬でティラータは寝入ってしまった。

「ティラータ？」

呼びかけてもピクリともせず、深い眠りについていたようだ。

ボルドは安心して、肩の力を抜く。

そして再び冷たい水で絞った布を、額にかけなおし、ボルドはティラータの様子を暗がりの中で覗き込む。

「……」

首筋に手の甲を当てると、部屋に連れて来た頃よりかは幾分ましだが、まだ熱が高い。

ボルドは目を細め、首筋に当てた手を滑らせ、頬を優しく包み込む。

安らかな寝息に安堵し、そのままそつと離れ、名残おしそくに寝室を後にしたのだった。

思い出と守りたいもの 5

懐かしい夢を、見ていた。

思い出すほど切なさに胸は軋み、それでいてほんのりと温かく何かが灯るような。

物心ついた頃には、イーリアス城にいた。

それでも微かに覚えていることがある。

森の中でたった一人で面倒をみてくれた母が死に、途方に暮れていたら、あつという間に餓死してもおかしくない状況になった。樹にもたれかかって死を待っただけだった私を、細くて温かい腕が、優しく抱き上げてくれた。

あれは、誰の腕だったのだろうか……。

次に気付いたら、小さな黒い髪の幼子が私を覗き込んでいた。

それから衣食住を保障された私は、すぐに元気を取り戻した。

まだ何も分らず、自分がどんな存在なのかも知られず、ただ毎日黒髪の少女と遊んだ。

少女の名はアーシャ。

黒髪の少女のことはアーシャと呼ぶようと、少女自身からも「おじさま」と呼ばれた男の人からもそう言われた。

名を聞かれ「ティラータ」と短く言えば、少女は嬉しそうに呼び返してくれ、「おじさま」は涙を流しながら大きなその手で頭をなでてくれた。

思い違いではないかと今では思っただが、私はそのように記憶していた。

それがアレス公だった。

それから自分の歳を教えられた。

城へ来たのが５才だった。

森で母に隠すように育てられた私は、何も知らず、しゃべる事すら事欠くほどに無知で幼なかった。

それが余りにも哀れだったのか、私は大人たちの計らいで、アーシャとともに教師について勉強させられた。

もちろん、共に教わるという立場などではなく、アーシャの勉強の傍らに控えることを許される、という形ではあったが。

だが、私にはそれで充分だった。

乾いた砂に水が染み込むように知識が入ってゆき、一年もしないうちに言葉すら知らない獣だった私が、アーシャに追いついていた。それを知った「おじさま」が、私をベクシーの元へ連れて行った。

またしても私を見たベクシーが、泣いていた。

私の向こうに、違う誰かを見ていたのだということの後から知って、ひどく憤りを覚えたのだが、その時は訳も分からずただ呆然としていた。

それから時々だが、一人だったりアーシャと共にだったりしたが、ベクシーの元に連れて行ってもらい様々な事を学んだ。

幼い頃、女官たちが私の世話をしてくれていた。

言葉も話せない幼子だったから、害のある者と認識されていなかったというのもあるが、珍しい獣を飼いならすといった認識だったのだろう。

可愛らしい服を着せられ、目を引く金髪も伸ばされてよく手入れされた。

だが、それもある時を境にぱたりと止む。

ある日他国の賓客がやって来たのだ。

共に遊ぶアーシャと私。その姿を見たその者は、あるうことか私とアーシャを取り違えた。

それは、その訪問者のみならず、私にとっても決してあつてはならない事だった。

そして私の髪は短く切り落とされ、身体には王国の所有印が刻まれることになった――。

ああ、そのすぐ後だったな、ボルドにも出会ったのは。
そうして7歳になった頃、私の置かれた状況が一変した。

「ティラータ、どうしてアーシャっていつものように呼んでくれないの?!」

剣術場に向かう私に、彼女が立ち塞がる。

「そこをお通し下さい、アシャナ姫」

7歳になった私は、国に仕える兵になるために、剣術場で他の少年たちと共に訓練に出るようになった。

それまでに様々な教育に恵まれ、自分の立場も理解できるようになっていた。

それについては、本当に様々な人々から……。

「ティラータ! どうしてなのか、ちゃんと行って!」

幼いとはいえ、アシャナにもきちんと王族としての教育が施されているのだ。本人に分らない筈がないのに、何故そんな事を今更聞くのかと、ティラータは苛立つ。

「……身分が違います」

俯いていたと、思う。

「同じよ！」

「違います！」

唇を噛みしめ、それこそ身分にあるまじき勢いで、アーシャの言葉を乱暴に否定した。

「同じなんかじゃない……私は違う、違います。私は蛮族の子」

搾り出すように言ってアーシャを見上げると、悲しそうな顔をしていたが、それでも続けた。

「それに、我が身を守るためです」

ピクリとアーシャの小さい身体が揺れた。

「このままでいたら、私は排除される。会えなくなる……いずれ殺される」

子供だった。

とても残酷な言い方しかできなかった。

アーシャの綺麗なすみれ色の瞳が、涙で潤んだ。

私は子供心に思う。この少女を泣かせたくない。

だけど、側にいればきつと泣かせる。

私が死んだら、きつと泣いてくれるから……

アーシャだって本当はこのままじゃどうにもならないって分かっている。だからこそ、呼び名だけでも繋ぎとめておきたいのだろう。しかしそれすらも、幼く何の力もないティラータには命取りだった。

アーシャの側に居ることを許されるとはいえ、ティラータは護衛の対象ではない。

むしろ、邪魔な存在だ。

攫われたこと、襲われたこと、結果殺されたことすらあった。あらゆる立場の者から憎悪と嫌悪を向けられた。

国王を崇拜するがゆえに、汚らしい蛮族が姫とあるのを許さぬ者。

反体制側からすれば、あの者の血を引く私など拒絶の対象だ。姫を貶める忌まわしき者として、女官たちの中である意味地位は不動のものであつたし。

とにかく、快く思わない者にとっては、私は目障りでしかなかった。

それでも、アレス公や陛下の口添えと、愚かで何も出来ない子供というその立場だけで、何とか命は取られずにいたのだ。

だが……抜きん出た学習能力、得た知恵、ベクシーにまで可愛がられたことで、本当に身の危険を感じるようになったのだ。それが僅か7歳になろうとしていた頃のこと。

「私はまだ死にたくない。強くなって、大人になって、必ず守るから」

アーシャの涙を見て、誓った。

これは夢だと分かっている。

涙が溢れているから……。

ずっとずっと、昔の思い出。

たった二年だけど、本当に幸せな思い出。

花畑で遊ぶアーシャの隣は私だけのもので、幼いアーシャはよく花冠を作って載せてくれた。

私も不器用ながら必死に編んで、その艶やかな黒髪に栄える淡い色の髪飾りを贈った。

彼女が微笑むのが、何より嬉しかった。

幼くて愚かな私は、それがいつまでも続くかと思っていた。

7歳の私は、アーシャに別れを告げた。
何の力もない私に出来ることは、そんな事しかなかったから。

思い出と守りたいもの 6

七歳の誕生日を迎え、私の居場所は剣術場そばの寄宿舎の一室となった。

本来ならば大部屋の一角が割り当てられるのだが、他に女の子がいなかったので仕方なく、小さいながらも個室が与えられた。

そこでは何もかも一人で身の回りのことをこなさねばならない。身よりも無く毛色の違う役立たずは、厄介者以外何者でもない。

私は毎日、必死に生きていた。

やることといえば、剣術の鍛錬のための準備や片付け、場内の掃除や武具の手入れ。その際に自分のこともこなさんければ、どんなに疲れていても食事にありつけないのだ。

手は荒れささくれ立ち、あちこちに痣や擦り傷があり、髪もボサボサでいつも汚れた訓練着を着まわしていた。

そんな慌ただしさのせいか、誰かと話すこともなく黙々と日々を過ごしていた頃、アーシャに取って代わったかのように気付けばあいつがいた。

私は適当に「うん」とか「いや」とか答えるだけなのに、気付けばしょっちゅう話しかけられている。

思い出すと胸が温かくなるのだが、この時の私は正直困惑していた。

「俺の名は、ランカス・ボルドだ。何度言えいいんだよ、いい加減覚えるティラータ」

相手の名を呼ばなくてもいいほどにしか会話しない私に、こいつは何度も懲りずにそう言ってくる。

彼は私よりも四つ年上だが、この剣術場に通い始めたのが私と大

差ないせいか、何かと一緒にいることが多く彼の持ついろいろな事情もあって、ここでは共に浮いた存在だった。

幼い者は七、八歳頃になると、この国ではすべからくどの子供も剣術を叩き込まれる。

だが城内の施設に寄宿する者のほとんどは、貧しかったり身寄りが無かったりする者が多い。

街や村々にも剣道場のようなものがあり、城へ仕官できる十六歳になってから此処にやって来る者のほうが多い。

ランカス・ボルドは、ティラータと同じように――大部屋だが――寄宿生活をしている。

だが、本来彼はここにいるはずのない人間だった。

彼の父親は侯爵で、ランカスはいずれその地位を継ぐ者だった。

だが、彼の両親は事故で亡くなり、それを画策し実行した叔父は、親族もろとも牢へとつながれた。

彼の母は庶出なことから、後ろ盾となれるような親族を持たなかった。故にその地位を狙う者達は計略し、子供でしかなかった彼から、無理やり爵位を返上することを強制させた。

そうして彼はここに来るしかなかったらしい。まったく貴族というのは、奸智に長けた生き物である。

これらは公然の秘密というやつで、誰もが知っていて、嫌でも私の耳にも入ってくる。

それが不快でなかった……。

どうして陛下はそれらの爵位返上を受け入れたのか。

どうして幼い彼は誰にも守られないのだろう。

イライラして仕方がなかった。

だからあんな事を口走ったのだと思う。

「うるさい、私にかまわなくてくれ。それに、私にかまえばいず

れ得るはずの爵位にキズがつくぞ」

そう言って彼を遠ざけるつもりだった。

「――爵位はこれからもずっと、いただくつもりはない」

「なっ……」

思いがけない返答に、つい彼の正面を見据えてしまった。

まだこれから十一歳になるうかという幼い顔には、不釣り合いな強い眼差しだった。

それが本心だと分かるからこそ、尚更イラつく。

私の苛立ちを察したのか、逆に問われる。

「侯爵にはならない。でも偉くはなつてやる。そのためにここに来た。ティラータ、お前は？」

真っ直ぐ……本当に真っ直ぐな問いに抗う術など、幼い私には無
く……。

「私、私も強くなる。何からも……全てのものから守るために」
すんなりと口にしていた。

あいつらしい、と「今」のティラータは想う。

変わっていない。馬鹿正直で真面目で真っ直ぐで……。それに人を巻き込む。

あいつが居なければ、自分はすっかり曲がって卑屈になっていた
だろう。

私の返答に満足したのか、うつかり本音を口にしてしまい慚然と
している私を見て、ランカスは笑っていた。

それから私とランカスは共に切磋琢磨しながら、着実に強くなっ
ていった。

目標があつたから、ぶれることは無い。やるべきことはいっぱい

ある。

実力をつければ、どんな噂話や蔑みも、私達には近づけなくなる。剣術を始めて三年もしたら、周りに敵うものがいなくなったので、私達は専ら近衛隊士たちに手ほどきを受けた。

そして二年もたてば、ランカスは近衛上位の者を負かせるようになり、私は若干十二歳にしてカナン隊長——当時は彼が師範長であった——しか相手にならなかった。

自分でもこんな才能があつたのかと驚いた。

そしてその年、十六歳を迎えたランカスは、有無を言わせぬ實力をもつて近衛隊に迎えられる。

入隊を控えたその頃、ランカスはカナン隊長から陛下への謁見を勧められた。

「俺はまだ陛下にお会いするほどの者ではありません、隊長」

ランカスの爵位を放棄する意志は変わってはいなかった。

少し困った顔のカナン隊長。

「いや、そうではなくてな、陛下が直々に会いたいと仰っているのだ……もちろん陛下の私的なものだが……分かるな？」

「……」

ランカスは考え込むが、カナン隊長の意図するところは分かっているようだった。

私的な謁見とはいえ、陛下からの言葉ならば否定は許されない。

「……分かりました」

ようやくの同意に、隊長はホッとした顔だ。

こんなところがこの人の好いところだ。決してその地位を振りかざさず、下々の者にも気を使ってくれる。たとえランカスが拒否しても、何とかしてくれたのかもしれないが、この人の負担になりそうで憚られる。

「良かった、自分の希望を伝えられるじゃないか、ランカス？」
ティラータの言葉に、ランカスはようやく微笑み、決心がついた

ようだった。

だが、カナン隊長がこのとき複雑な気持ちで見ていたことに、私たちは気付かなかった。

翌日、陛下のもとから戻ったランカスは、剣術場の詰め所で座り込み、ひどく意気消沈しているように見える。

「戻っていたのか、随分長かったがどうしたのだ？」

あまりの辛そうな表情に、心配になって声をかけた。

「——ティラータ」

こちらに気付き、上げた眼が切なく揺れる。

「何か、あったのか？」

ランカスは私の手を取り、半ば引きずるように歩き出す。

剣術場を出て寄宿舍の方に向かった。

ランカスはずっと前を向いていて、後手に引かれる私にはその表情を窺い知ることは出来ない。

黙ってついて行けば、辿り着いたのは私が使っていた個室だった。躊躇せず中に入ると、ランカスは扉を閉めて立ち尽くす。

「……何か、聞かれたくない話があるんだ？」

らしくない彼に、私はなんとなくそう感じたのだ。

彼に椅子を出し、私は粗末なベッドに腰掛けた。

俯くランカスはなかなか口を開こうとはせず、どうしたものかと

私は思い巡らせていると、何かを結したらしく顔を上げた。

「陛下から、お前のことを聞かされた」

剣術の腕前が上達しても、どんなに知識が増えようと、私はまだたった十二歳の子供だった。

まさか陛下の思惑など、まるで考えも及ばなかったのだ。

「私？な、何を……」

当然、頭が真っ白だった。

「お前が、陛下の兄上である先代の王太子ルートヴィッヒ様の御子だということを」

全身の血の気が引いてゆくを感じた。

たぶん、このとき私は顔面蒼白となっていただろう。

自分でも認められないことだったし、知られたくなかった。

「陛下は俺に全てを話され、お前の……ティラータの後ろ盾となるべく近衛の地位を登りつめ、爵位を継ぎ、お前を守ってやって欲しいと……」

「……それはどういう意味？」

聞きたくない、だが聞かずにはおれなかった。

「たぶん、お前の考える通りの意味だと思う。」

——何故。そんな事しか考えられなかった。

「お前を……手放したくないと仰っておられた。ティラータを森に返した方が、お前にとって幸せなのを分かっているが、どうしても手放せない——苦しんでおられた。それゆえ、過ちを犯したと——過ち——。」

己の胸倉を知らず内に掴んでいた。

「それがある限り、この国から出られないんだ。だからせめて、ティラータがイーリアスで不自由せず生涯を送れるように、俺と——」

身体が勝手に動いていた。

立ち上がり、扉を目指し走り出そうとして、ランカスに腕を掴まれた。

「は、離せ、私は陛下につ……そんな事私は望んでいないってちゃんと言わなきゃ！」

暴れる私はランカスに引き寄せられ、そのまま背中から抱きしめられた。

「離せ！私のせいで……お前がそんな事で人生を決めつけられるな

んで、駄目だ！ 私はそんなんじゃないっ、私はあいつの子なんかじゃないっ、私は……」

「ティラータ！」

諫めるような、でも落ち着いた声で名を呼ばれる。

「俺は、変わらない。何ひとつ変わる必要はないよ」

「でも！」

逃げ出すのを諦め、ランカスの言葉に振り向くと、拘束が緩められた。

「陛下には“頼む”と言われたけれど、俺は最初から爵位を欲しいなんて思っていない。どちらにしても先ずは強くなつて己の力で登りつめたい。その先どうするかは、俺が決める」

ランカスがそう言つていつものように笑つので、私は力が抜けてベッドに腰を下ろして呆然としていた。

「何も…… 変わらない？」

「ああ、そうだ。お前は どうしたいティラータ？」

私……？ そうだ、私は。

「私も変わらない。誰にも文句をつけられないくらい強くなつて、アシヤナ姫を誰よりも側で守る」

それが全てだ。

ランカスが微笑む。

「なら、いい。何も変わる必要がないだろう？ なればいいんだ。俺に守られる必要が無いくらいに、陛下の思惑すら超える存在に」

詰め所ではあんなに思いつめていたのが嘘のように、すつきりとした笑顔だった。 たったあれだけの時間で何を悩み、なにを吹っ切ったのか。 私には及びもつかないところで、彼は彼なりに結論をだしたのだ。

「思惑を超える……？」

「ああ、お前ならなれるよ、七剣聖に！」

まるで夢物語だと、この時は思った。

けれどランカスが自信たっぷりと言うものだから、私も出来るようないきがした。

たとえそれが気休めだとしても。

私たちはまだ何の力もない子供だけれど、この先、強くなれば道が開けるかもしれないのだ。

強くなって成長して確固たる地位を得られれば、こんな私と共に在ってくれたランカスが、陛下の命令で人生を無駄に囚われずに済むかもしれない。

アーシャは守りたい。しかしこの友の幸せもまた、私にとって守りたいもののひとつに、いつの間になつていたのだ。

それなのに、爵位を戴く代償としてこんな蛮族がついてくるのは、あまりにも哀れじゃないか。

この時より、私たちはお互いの信念を貫くため、あえて距離をとることに決めた。

もう幼い子供ではない事を、他に認めさせるために敢えて名で呼び合うことを止める。子供らしい浅慮だったが、それはそれで良かったと今では思う。

そしてこの四年後、私は剣聖になり、ランカスは近衛副隊長となった。

閑話 1 ある魔術師の非日常的、日常

朝靄のあける前の冷氣漂う石牢の片隅で、今日も只ならぬ悲鳴がこだまする。

ここは、イーリアス城地下にある、罪人を収監する留置場。石畳は冷たく、簡素な寝具のみで過ごす夜は、たとえ初夏を迎えようとしているこの季節でも、相当底冷えすることだろう。

明けきらぬ夜は、囚人たちの声で終わりを告げる。

「や、まて、頼む！」

最奥の牢から聞こえるその声は、震えて掠れる。

「うふふふ、優しくしますから……」

場違いの高い声音には、愉悦があふれる。

灰色のフードを被ったその端々から、淡いたんば色の綿毛が揺れる。

その手には、鋭い鉤爪のついた道具が握られており、牢に張り巡らされた鉄柱に突き立てる。

それを見た牢の中の13人の囚人たちは、青ざめ動揺する。

「ひいひいひい、やめてくれ」

金属を引っかく耳障りな音が、地下牢中を響き渡る。

ギギギギギイ――

「何をしている、こら！」

「ふぎやっ」

ペシッと場にそぐわぬ音がしたと思えば、不快な金属音が止む。

叩かれた頭を押さえフードの人物が振り返ると、そこに立つのは青筋を立てて怒りの表情を浮かべたティラータだった。

「ど、どどどうして此処に？」

その拍子抜けした問いに、更に機嫌を損ねたのか、憤怒の面持ちで見下ろす。

「オズマ殿、あなたこそここで何を？」

「あ、あのこれは単に朝のご、ご挨拶を……」

丸い眼鏡を持ち上げて、薄笑いで体裁を整えるが、誤魔化しきれはるはずもなく。

「拷問はご遠慮ねがえますね、オズマ殿」

決してお願ひには聞こえないティラータの物言いに、シユンと頂垂れるその姿は、とても一回り年上とは思えない。

「おい、あんたは一昨日の……な、何とかしてくれよ、この魔術師」

話しかけてきたのは、牢の中の囚人たちだった。

比較的大きなこの牢は、まとめて多数収容でき、大きな体格のむさ苦しい男たちが容れられている。先日魔法障壁から侵入し、ティラータとシリウスによって捕らえられた者たちだ。

ティラータは鉄格子の向こうで情けない声に振り返る。

「囚人の立場でゴチャゴチャうるさいな。ちよつと拷問好きなんだ、害意はない」

「拷問する気つて時点で、害意あるだろつ……てか、そのチンチクリンな容姿で拷問好きってなんだそりゃ！」

何のツツコミだよ、と呟きつつ、ティラータは自分よりひと回り小柄なオズマの首根っこを掴む。

「お前たちには、然るべき手順で自供を強要される。協力次第では、彼女のように生ぬるい方法などではなく、な。」

ティラータの言葉に、にわかに空気が冷える。

「早々に知っている事は話したほうが良いと思うが……」

未だに背後や協力者について話さない男たちを、牽制する。

十三人の傭兵たちはこの地下牢に入れられ取調べをうけてはいるが、芳しい情報を引き出せてはいない。

だが、こうしてティラータが顔を見せプレッシャーをかけること

で、抵抗を続けることが自分達の不利益につながると誘導できれば、と覗きに來たのだが――。

ティラータはオズマを見て盛大に溜息をつく。

「行きますよ、オズマ殿」

引きずるようにして、オズマを連れ出す。

「あ、あの今日は、まだ何もしていません、よ?」

ティラータが眉を寄せる。

「……今日は、ですか」

ということは、昨日ティラータが朝まで熱で寝込んでいたうちに、すでに來たということか。

再び大きく溜息をついてから、地下から昇りきったところでオズマの首根っこを離す。

「あ、あははは、大したことはしてません」

この魔術師次官殿の悪癖にはどうしたものか、と悩むティラータをよそに、オズマはにこやかに首をかしげている。その姿は本当に、鈍そつなただの田舎娘そのものののだが……。

げんなりしたティラータが顔を上げると、廊下の向こうから珍しい人物が目映る。

「あれは、まさかヨーゼル殿?」

その言葉に、オズマの肩が仰々しく揺れた。

「オズマ殿?」

オズマは顔色を青くし、丸眼鏡の下の目をビックリさせたまま振り向く。そしてそのまま固まった。

「……お師匠様、なな、なんで此处に?」

いつもより流暢な言葉使いなのに驚いたが、その代わりに声がプルプルと震えていた。

そんなオズマの様子を知ってか知らずか、老魔術師ヨーゼルは真っ直ぐオズマに向かって歩いてきた。

「なんと、またやりおったかオズマよ。いい加減にせぬか」

真つ白い豊かな髭と眉毛に隠されてその表情は見えないが、オズマの震える肩から察するに、この老人はそれなりに怒っているらしいと思われる。

彼はこの国第一位の魔術師、魔術師団主席ヨーゼル師である。年齢八十にして、オズマの唯一の上司だ。ほぼオズマに後を任せ、楽隠居を決め込むこの国の重鎮でもある。

ティラータとは畑違いの為か、その人となりはよく知らなかったが、若かりし頃の武勇伝はいろいろと耳にはしていた。

そんなヨーゼルは今やただの老人と噂されていた。だが、目の前の小さな老人からは並々ならぬ覇気が感じられ、ティラータには隠居爺には到底見えなかった。

ティラータの無言の観察に気付いたのか、ヨーゼルはチラリとティラータに目を向けた。

「主にはこの不肖の弟子が世話になったようじゃの。止めてくれたことに、感謝する」

「いや、今日だけだ。既に昨日は手遅れだったようだが……」
「そうか」

それだけ言うと、オズマのほうに向き直る。

腰を曲げて更に小さいはずの老人が、小柄なオズマよりも大きく見えるせいか、ティラータはついつい助け舟を出してしまう。

「穏便になさつて下さい、彼ら捕虜の移送をオズマ殿に依頼したのは私です。それに魔術の解析も……オズマ殿の働きがなければ、往生していたでしょう」

「なに、それもこれの仕事、お主が庇うことありはせん。それに、隙を与えたこやつのミス」

「……隙？」

ヨーゼルの言葉の意味を理解できず、ティラータは続く言葉を待ったが、意味深に笑っただけでそれ以上老人が説明することはなかった。

結局オズマは青い顔をして俯いたまま、ヨーゼル師の後について帰っていった。

彼女の弱点は、幼い孤児であつた娘を拾い上げ養い、魔術師次官にまで育て上げた師匠だ。

ティラータはそんな師弟の後ろ姿を、微笑みながら見えなくなるまで見送っていた。

魔法障壁に穴が開けられた事件から、既に三日が過ぎていた。事件は明るみにはならず、城下はいたって平和なものだった。

この件について内々に処理することを決めたのは国王陛下だ。首謀者が未だ掴めず、目的も不明のままで公にするのは、闇雲に民の不安を煽るだけとの判断だった。

ティラータたちに異存はない。

ただでさえ閉塞感漂う国内をより立てようと、ファラの大祭に力を入れている時なのだ。それに水を差すべきではないだろう。

日課となっている西の森の見回りから戻ったティラータは、カナン近衛隊長と共に陛下へ報告に来ていた。

「今日も西の森、魔法障壁ともに異常は見られませんでした」

「ご苦労であった、ティラータ」

白髪の間違った金髪が、少しだけ垂れて額にかかる。

国王陛下の激務を想い、ティラータはやるせない気持ちになる。隣のカナンも同じ想いのようにだった。

「陛下、ご自身のお体をお労り下さい」

「……大丈夫だ。そんなに疲れた顔をしておるか？」

自嘲ぎみのミヒヤエル王に、カナンが眉を下げる。

「陛下」

「分かった、分かった。カナンには適わぬ。そなたらの報告を聞いたら休憩を取る。それで許せ」

シワの深い目じりを下げ、ミヒヤエル王が言った。

「差し出がましいことを申し上げました。では、報告を」

カナンは内々で調べ上げた経過を報告する。

まず、実行犯で傷を負った者たちの行方について。

城下の町医者は、三日経ってほぼ回り終えたのだが、それらしい患者は見つかっていない。残るは貴族のお抱え医師か、流れの闇医者くらいだ。どちらにしても獣傷を放っておくことはありえないだろう。

「ただ、レイチエル・リンド弓士から、気になる報告が」

「何だ、申してみよ」

ミヒヤエル王の促しに、カナンは躊躇しているようだったが、まだ確認が取れていないと前置きしつつ、重い口を開く。

「事件当日からしばらく、行方の知らない騎兵隊員がいるらしいのです。ごく下っ端の者なのですが、日頃から少々素行のよろしくない輩で、レイチエルも覚えていた者だそうです。引き続き行方を確認させております」

ティラータは眉を顰める。

騎兵隊は議会が指揮権を持つ為、かなり特殊な立場であり、主な仕事は式典の花形くらいだ。当然、その隊員には貴族の子息が多い。訓練所は馬場が必要になるため、剣術場とは別の場所に宿舎がある。レイチエルたち弓士隊は、その馬場の横に併設された射的場を利用するため、騎兵隊の顔や動向に詳しい。

ティラータにとって最も立ち入りにくい場所が、騎兵隊だ。

「なるほど。どのような些細な事でも、ひとつひとつ確認をせよ。他は？」

「薬師殿からの報告ですが、ティラータへ放たれた矢に使用された毒について、入手先が判明しました」

「ほう、それは何処だ？」

「城内です」

カナンの渋い声に、ミヒヤエル王は言葉を失う。

「……それはもしかして、医務室からですか？」

ティラータの問いに、カナンは頷く。

「鍵のかかる棚から持ち出されていたのを、昨日になってようやく気付いたと、医師達から報告がありました。単独で多量に摂取すれば毒ですが、微量で調合次第では鎮痛作用を伴う精神安定剤として使用されるものらしいです。……ですが、あまり使用頻度の高いものらしく、無くなっても気付くのに時間がかかった模様で」

——苦しい言い訳だ。

ジャージャービーンが真つ先に思いつきそうな場所だ。彼の要請を、医師たちは今まで無視していたのか。

ティラータは憤りを通り越して呆れるしかなかった。

「……そうか。医師たちには薬の管理を徹底させるよう、余からも言い渡しておく」

苦い表情の国王にも、想うところはあるようだった。

それを受けてティラータが提案をする。

「陛下、薬の管理について薬師殿に権限をお与えいただく訳にはまいませんか？」

しばしミヒヤエル王は考え込む。

「いや、ゲイブルズのみ特権を与える訳にはゆくまい。だからといって他の薬師にまで過ぎた権限を与えれば、悪用するものも出てくるだろう」

ティラータの要望は、医師の膨れ上がった驕りを牽制する為には良いものであったが、用心せねば厄介が二つになる恐れに、国王はためらったのだ。

権限の名の下に、薬を出し渋り利益を独占する者がでてくれば、その不利益は民が被ることとなるう。

「そう、ですね。余計な事を申し上げました」

「いや良い。ところでティラータ、丁度よい。遣いを頼まれてくれまいか」

ミヒヤエル王はそう言うと、執務机の引き出しから手紙を取り出す。

「これをベクシーに届けてくれ」

ティラータは国王の印で封じられた書簡を受け取る。

「奴は近頃ずいぶん体調がおもわしくないと聞き及んでおる。侍従長が土産を用意したと言っておったから、後でそれも受け取って届けてやってくれ」

「はい、承りました」

ティラータは国王の心遣いに、微笑む。古くからの友人として、イーリアスに滞在する剣匠ベクシーに、国王は何かと便宜を図ってきた。

もうそう長くはもたないだろうベクシーに、城の侍医を差し向けて、手を尽くしてくれている。

「では、私は先に失礼いたします」

国王陛下とカナン隊長に礼をして、ティラータは執務室を出た。

ティラータを見送って振り返ると、深い溜息をもらす主がカナンの眼に映る。

「陛下？」

深く椅子にもたれ、国王は両手を前に組む。

「豊穡祭に合わせて、ベクシーの弟子グレカザルと、剣聖ひとりがいーリアスを訪れることを、ラプス大公国から知らせが参った」

その言葉にカナンは驚きを隠せなかった。

「では……代替わりが？」

「そのようだ——我が国の立場は、ますます厳しいものとなるやも知れんな」

ミヒヤエル王は自嘲気味につぶやく。

「もう一人の剣聖とは、いったい誰ですか？」

「金の欠月のデューク・デラ・デューンだそうだ。ラプス在の白鷺アルタイルでないだけマシであろうが……」

カナンの額に冷や汗が伝う。

「七剣聖が、四人——ですか。何があってもおかしくありません」
イーリアスにあるレグルス
代替わりする剣匠のアルクトウルス
立会人としてのカペラ
そして西の森に現れたシリウス……

——七剣聖が集る時、歴史が動く——
ただの言い伝え。カナンはそう己に言い聞かせる。

「ベクシーを失い剣聖の要がラプス大公国に移れば、我が国がレグルスを封じていることについて、今以上に他国は非難を浴びせてくるであろうよ……」

「……」

「いずれ耳に入るだろうが、今はまだティ^{あれ}ラータには悟られぬようにな」

「御意」

剣匠ベクシーの元へ向かうべく既に来たティラータを、国王の侍従長が待ちかまえていた。

「お待ちしておりました。こちらをお願い致します」

共のものに大きな荷物を持たせた姿に、ティラータは苦笑いを浮かべる。

「……ずいぶんな量ですね」

「一応、馬に乗せられる量にひかえたつもりでございます」

この量でひかえたのか、とティラータがいつも通りに思っている
と、老侍従長はにつこりと微笑んでいるので。

「……まあ、大丈夫だと思います」と答えるしかない。

ティラータが荷を受け取ると、供の者が申し出る。

「お手伝い致しますか？」

首を横に振ってから、丁重にお断りする。

「ケガされますよ」

ティラータの愛馬はそれは気性の荒い牝馬だった。

ティラータにしか手綱を預けず、もし他のものが乗ろうものなら、振り落とされその後ろ足で踏みつけられるのがオチだ。それさえなければ、眼を見張るほど美しく優秀なのだが、この気性のせいでティラータに払い下げられたのだった。

それでも難なく乗りこなすティラータを見て、この愛馬を我が物とせんと手を出してくる馬鹿者が絶えないことに、ティラータはしばしば頭を痛めている。

「悪いな、ブランシス。今日は大荷物を運んでもらうよ」

ブルル、と不満を訴えていたものの、次第に落ち着いたのを見計らい、ティラータは出立することにした。

城からは四半時ほどの所に、七剣聖が要アルクトウルのユーリス・ベクシーの屋敷がある。

田園を抜けると、小さな林を背に小ぢんまりとした屋敷が現れる。他には何もない一本道を駆け抜け、遮るものが何もない門を通り過ぎ、屋敷の正面へ馬をつける。

馬から荷を下ろしていると、屋敷の扉が開き使用人の男が顔をだした。

「ようこそお越し下さいました」

「国王陛下から書簡と賜り物を預かって来た。ベクシーは？」

鞍を外し簡素な厩へ愛馬をつなぐと、ティラータは男と荷を分け持って屋敷へ入る。

「旦那様は相変わらずの状況でございます。先程お目覚めになりましたので、今でしたらお話しできましょう」

そう言いながら、男はティラータを寢所へと案内した。

——相変わらず、か。

老剣匠が鉄鎚を持てなくなって、そろそろふた月となる。

使用人が声をかけて扉を開くと、そこには質素な寝台に横たわる枯れ木のような老人が見えた。

「ベクシー、私だ。入るぞ」

ちらりとこちらに視線を向けたその眼に、確かな生気を感じ、ティラータは安堵する。

「陛下から預かってきた」

書簡を取り出して見せると、ベクシーは上身を起こそうとしたので、手を沿えて座らせる。

——こんなに小柄な老人だったろうか。

白髪に浅黒い肌は、この国にはめつたに見られない容姿。

どという経緯でイーリアスに腰を落ち着けたのかは、ティラータには分からない。

筋張ったその手でティラータから書簡を受け取ると、その場で読み始めた。

老人にしては太く逞しい腕は、さすが剣匠といったところか……。

ティラータは一步下がり、手近な椅子に腰掛けて読み終わるのを待つ。

さほど広くない寝室には、乱雑に積み重ねられた本と彼の仕事道具の一部、武具の手入れに使う道具が散乱していた。

「……大人しく寝てなかったのか」

呟いて苦笑い。

「ティラータ」

とても低い、少し枯れた声でベクシーが呼ぶ。

「近いうちに、グレカザルとデュークがここに来る」

それを聞いて、ティラータは新緑の眼を見開く。

「……もう、決めたのか」

問いかけているのか、ただ確認しているのか、どちらともつかない口調。それしか口にできなかった。

「お前も立ち会ってくれ、ティラータ。次をグレカザルに任せることは、もう何年も前に決めてある。……その時が来たというだけ」
そう言う老人の顔が、幾分晴れやかに見えるのは気のせいだろうか。

「そうか、二人はいつ頃つくんだ？」

「大祭前には到着するだろう……デュークとは初めてだったか」

カペラの剣聖、デューク・デラ・デューンはティラータよりも剣聖となつて長い。ずい分気難しい男だと、以前聞いたような覚えがあった。

「どんな使い手だろう。楽しみだ」

純粹な好奇心が沸く。

本気で相手となる者がいなくなつて久しい。どんな剣技の持ち主なのか、と考えるだけでもウズウズする。

ふとここでもう一人のことを思い出し、眉間にシワが寄る。

「どうした？」

ティラータの様子にベクシーが気付く。

「先日、シリウスに会った……アレは何者だ？」

一瞬、虚を突かれたような表情のベクシー。

「名のらなんだか？ どこで会った」

「西の森だ。まったく、ふざけた奴」

少々憤慨したティラータを見て、ベクシーが珍しく声を上げて笑った。

「誰が、ふざけた奴だつて？」

深く、よく通る声にティラータが振り返ると、扉を開けて立っていたのはシリウスと、その足元に黒い狼。

「……また、お前か」

ティラータの口から出たのは、そんな溜息だった。

老人と憂い 2

「はあああつ」

ティラータは渾身の力を込めた手刀を受け止められ、その勢いを身体の軸に伝えて左足を蹴り上げる。

避けきれぬと判断したのか、シリウスは蹴りを右腕で受け止めつつ、体勢を崩して後方へ飛ばされた。だが、ダメージはさほど受けずに、そのまま難なく着地する。

「甘い」

シリウスはそう呟くと、地を蹴って低い姿勢のままティラータに襲いかかる。

攻撃に身を構えるティラータの虚を突いて、更に下の足元をすくわれた。バランスを崩したその身体を引き寄せるかのように腕を掴まれたと思ったら、咽喉にはシリウスの指が当てられてる。

足を取られて背中への衝撃に構えた隙に、咽を決められたうえ、無残に転ばぬよう腕を引かれる己の醜態に赤面しそうなティラータだった。

「――参った」

少しだけ上がった息を整えながら、ティラータは悔しそうな表情を隠さない。

シリウスがいつもの悪戯そうな口元に笑みを浮かべて、掴んだ腕を離れた。

「次は負けない」

ティラータは、自分でも笑ってしまいたくなる程の負け惜しみを口にした。その居心地の悪さを、土埃を払う仕草で誤魔化する。

組み手で負けるなど久しぶりだったが、多少の悔しさを除けばすつきりとした開放感で満たされていた。近頃は忙しくて、思う存分

身体を動かすことができず、少々ストレスを溜めていたのだ。

だからベクシーへ挨拶を終えた後、シリウスの誘いに乗ったのはそんな事情ゆえだった。

「そういえば、丁度いい頃合いだったな……こつち来いよ」

シリウスはそう言いながらも有無を言わず腕を引いて、庭先の長椅子にテイラータを座らせた。

「ほれ、腕出せ。抜糸してやる」

何のことかと首をかしげるテイラータをよそに、シリウスは自分の荷から道具を出していた。

「抜糸？ ああ、そういえばそんな事言ってたな」

傷の手当はジャージャービーンに任せていたので、きちんと毎日消毒と薬の交換がされている。

シリウスは慣れた手つきで包帯を外すと、消毒した細いナイフで傷を合わせるように縫った糸口を切り、その糸を引き抜く。

「つつ」

少々引きつれた痛みがした。傷の治りは良く、しっかりと塞がりつつある。

「1日遅かったな。思ったより治りが早かった」

全ての処置を終え、解いた包帯を元に巻き戻しつつ、シリウスは言う。

剣を握る彼の指は硬そうでタコができているのに、器用なものだとテイラータは眺める。だがふと男の左手にも同じような位置に人より多いタコを見つけ、苦笑する。

「……なにが可笑しい？」

ちらりとテイラータに視線を移すシリウス。

「なるほどな、と思つて。さっき組み手で違和感があつた理由が分かった。お前、両利きか」

ああ——と男は思い出したかのように、自分の手を見て笑う。

「別に隠しているわけではないけどな、両利きってより、利き手が

無いというのが正しい感覚だな」

ティラータはふうん、と呟きながら包帯が上腕に巻かれてゆくのを眺め、器用だなと感心する。

よく戦いを有利にしたり、怪我を補う為に訓練で利き手でない方を鍛える者もいるが、おそらくこの男は生まれ持ったものなのだろう。そう思わせる自然な仕草だった。

色々と考えを巡らせてシリウスを見上げると、伏せた睫毛が春の風に揺れているように見えた。

ブラウンの髪と同じそれは、日を浴びると不思議な色で透け、違う色にも見える。

整った……いや、整いすぎた造形に輝く髪が揺れて落ち、長く束ねられた後ろ髪がふいに風に煽られ、差し出したティラータの左手をかすめくすぐってゆく。

「もったいぞ」

包帯を止めて、こちらを向いた灰色の瞳と目が合った。

「ああ、すまん。ありがとう」

軽く礼を言い慌てて手を引っ込めると、照れた顔を庭先に背ける。ふと見ると、先程まで二人以外居なかった庭に、大きくて威厳のある黒い狼が佇んでいる。

「あれは、確かヴラドといったか？」

ゆっくりと歩く姿に見とれていると、狼はティラータの膝元までやってきて鼻先を向けた。

ティラータがその首筋に手を這わせると、柔らかい毛に指が埋もれる。気持ちよくなって何度も撫でていると、狼も気に入ったのかティラータの膝に顔をすり寄せ、琥珀色の眼を細めている。

「可愛いな」

ティラータの呟きに、隣で道具を片付けていたシリウスが噴き出す。

「……なんだよ」

何が可笑しいのかと、ティラータが睨む。シリウスは微妙に顔を歪ませて、困った素振りだ。

「前にも言ったが、それ人狼だからな、雄の」

きょとんとした顔で首をかしげ、膝もとで甘えるヴラドに視線を落とす。

「そっぴや、そっだっけ。お前、人にもなれるのか？ だとしたら凄いな」

シリウスの云いたい趣旨がつかめず、両手を広げ狼の首に抱きついて頼ずりするティラータ。

「いやだから、可愛いという分類じゃなくてだな……」

——ガウウ

ヴラドが主人にひと吠えし、黙らせる。

余計な事はするな、とでも言っているのだろう。しかし相変わらぬぐりぐりとティラータに頭を撫で回され、微かに揺れる尻尾はいつになく滑稽で、シリウスは肩をすくめる。

どうやらこの相棒は、ずい分とティラータのことが気に入った様子だ。主人であるシリウス以外の人間を嫌う為、滅多なことでは森を出たがらないこの狼が、尻尾を振るなど俄かには信じ難い。だが、森の蛮族たちを獣たちが恐れないという噂を思い出す。恐らくティラータにも通用するのだろう、とシリウスはひとりごちた。

「そっぴえば、お前はもう聞いたか、シリウス？ グレカザルとカペラのデュークが近々来るらしい」

ティラータはひとしきり狼の毛並みを堪能し、満足げな顔を上げてシリウスに話を振る。

「知ってる」

一瞬で渋い表情になり、素っ気無い返答をしたシリウス。

「なんだ、その顔」

「俺、あいつ苦手。できれば会いたくない」

はあ？ 子供かオマエと呆れつつ、どんな奴かますます気になる

とティラータが告げるとふて腐れた顔をされ、本心から嫌っているのだと悟る。

「お前にも苦手な相手がいたのか」

ティラータから笑みがこぼれた。

金星カペラの剣聖デューク・デラ・デューン。二つ名は『金の欠月』で、大陸の最西端フィンディアの第三王子である。出自もそうだが、気高く己を律することを最上とし、礼節を重んじ人にも己にも厳しい、貴公子という言葉を体現したような男だ。

目的の為には多少ならずとも手段は厭わず楽しむ主義の、このシリウスという男にとって、対極に位置する存在かもしれない。

シリウスは苦手な男の顔を思い浮かべながら、先々の煩わしさを思い口をつぐむ。

「まあ、会えばわかるだろ」

そうだな、とティラータは応える。

「ベクシーは思ってたよりも悪かったみたいだな。グレカザルが来るということは、すぐにでも彼がベクシーの後を継ぐ必要があるって事なんだよな……」

ティラータはベクシーの元で様々なことを学んだ。ある意味彼を師と言っても過言ではない。剣術に関して彼から教えを受けたことはないが、それ以外の知識、世界の常識から医学、経済など様々なことをアーシャと共に学んだ。

その師を、近い将来永遠に失うかもしれないのだ。分かっていたつもりでも、この時まで実感していなかったのかもしれない。

「グレカザルでは、不満か？」

シリウスの問いに首を振った。

「彼なら安心して任せられる。私に異存はないよ。そうじゃなくて……私はこういつの、初めてなんだ。近くににいる者を失うのは、経験したことない」

母のときは、そういう感じじゃなかった。何も分からず突然ひと

りになっただけで、悲しむ余裕すらなかった。

ふいに、ティラータは頭の上に温かな重みを感じた。

ポンポンと大きな手が頭を撫でているのに気付き、驚いて眼を丸くしながら手の主を見る。

そこには、優しく微笑む男がいて。

「こ……子供扱いするな」

とつさにシリウスの手を払いのけ、顔を逸らす。

ティラータは立ち上がる。

「用は済んだから、私は帰る！」

どんな捨て台詞だ、と自分自身呆れながら、ひとりと一匹を置き去りにしてその場を離れたのだった。

——あの男は不得手だ。

何ひとつ自分の手の内を明かさなくせに、ひとの懐には勝手に入り込もうとする——

ベクシー以外の同じ剣聖の位を持つ者に、こんなに多く顔を合わせたのは初めてだった。そのせいか、扱いに戸惑う。

常に不穏な空気をまとっているクセに、ふざけてそれを誤魔化そうとする男。

本来は個々が独自の判断で動く剣聖に、横の繋がりは必要ない。

掟で拘束されることがあるとすれば、それは今回のように代替わりや新たな剣聖の認定に立ち会う要請を受けたときのみ。

それをまるで無視して自分とこの国に関わろうとする男の行動に、ティラータの警戒は未だ解かれることはなかった。

「何故、名乗らなかった？」

寝台の上に座り、いくらか顔色の良くなったベクシーは、目の前

にふてぶてしく踏ん返り返って座る男に目をやる。

「ただでさえ、まだ警戒されているのに名乗ったら、また猫みたいに毛を逆立てて逃げられそうたる」

不敵、と表現するのが最もな顔でシリウスは笑う。

「ああ、そうかもしれん。あれは見ての通り、野生の猫そのものじやからな」

受けて笑うベクシーにシリウスは、獅子じゃなくてやつぱり猫でよかったのかよと、自分で言い出しておきながら呆れる。

「そんなことより、だ。ベクシー」

男の眼が鋭く光る。

「ティラータの身体に刻まれた刻印^{アレ}はいつたいなんだ」

先ほどまでのふざけた調子は、微塵も感じられないシリウス。

「見たのか、あれを……」

老人のシワが、いつそう深くなる。

「あれはのう……罪よ。ミヒヤエルだな」

ベクシーは傾きかけた窓の日差しに目を向け、黙り込む。

微かに揺れる日差しは、空を覆う虹色のゆらぎを反射して輝く。

シリウスもその老人の視線を追って、外を見る。

「忌々しいものだ。まるで『檻』だな」

低く呟くその声は、淡々としつつもそれだけで他を跪かせるかのような、威厳を放つ。

「その檻も、永遠ではない。ワシは障壁^{アレ}の崩壊を見ずして去ることになりそうだ」

老人のシワに濃い影が落ちるのを、シリウスはまるで断罪者のように黙って見ている。

「お前がワシらを甘いと言うのは分かっている。しかし、お前にだからこそ、ティラータと王女の行く末を頼みたい」

ベクシーの搾り出すような願いに、男はただ「勝手だな」と吐き捨てる。

既に関わっている。だが真に己が関わることで与える、計り知れ

ない大きな影響について、シリウスは考えを巡らせていた。
それが吉とでるか凶とでるか。シリウスにも未だ読みかねていた。

背徳の魔術師 1

ユーリス・ベクシーの屋敷から戻る途中、ティラータは城下の貧民街に差し掛かったところで、愛馬ブランシスを降りた。

馬連れでは目立ちすぎるため、一時預けることにした。荷運びを請け負う街の馬屋に行けば、僅かな手数料で馬を預けられるのだ。フードを目深く被ったティラータも、商人や旅人に混ざって目立つ長剣と馬を預けると、人ごみに紛れて貧民街へと入っていった。

人通りもまばらな旧市街には、様々な者達が流れ込んでくる。

その中には、かなり怪しい商売をする者に紛れて、タチの悪い魔術師たちも独自のコミュニティを形成していた。こうした状況はまだ一般の者にはあまり知られていないが、蛇の道は蛇である。噂を聞きつけた訳ありの者の多くが、これら魔術師を雇っている。

ティラータが身を潜めながらやって来たのは、それら魔術師たちが隠れ住む一帯と思しき地域だ。

白い石とレンガ造りの壁は、貧しくて修繕が行き届かず、崩れている箇所がいやに目に付く。

ティラータは息を殺して歩を進める。

魔術師が関わらなければ、魔法障壁を打ち消すことなど不可能だ。それも禁忌を犯した^{タブー}ことのある者だ。でなければこの術式はでてこない……それがこの国最高の実力をもつ魔術師、オズマの言だった。

ふいに気になる気配を感じ、ティラータは壁伝いに身を潜める。近くを通る二人連れを壁越に見た、ティラータの眼光が鋭く光る。考えるより前に、身体が動いていた。

気配を殺して跡をつける。相手の顔も服装も、深いフードと膝下まで長い外套で、何ひとつ手がかりになるような特徴を見て取ることができなかった。

そのような姿の者は、ここではティラータも含め決して少なくはない。

だが、本能が告げる。

見逃すな――と。

歩を進めると、更に中心街とは離れ、より荒れた街並みになる。

ゴミが散乱し、物乞いが道端に寝転がっている。

行き交う人々はあるが、どれも周りには目もくれず、フードやマントを被り、そそくさと目立たぬようにすれ違う。それらの人の動きを見ていて、やはり自分の本能が正しかったのに気付く。

やはり違うな、とティラータはほくそ笑む。

追いかける前方の男二人のうち、ひとりにはレイチエルが言っていたという騎兵隊の男であろうと確信する。ほんの僅かだが、身体の使い方や足の捌きかたひとつで窺い知ることができた。

片方は、かなりの使い手ではないだろうか。ティラータは、些細な動作で相手の实力を見抜く。

男たちはある廃墟のような建物の前で止まり、あたりを見回してから素早くその中へ入っていった。

ティラータは周囲の気配に気を配りながら、その建物に近づく。

他の入口となりそうな所を探して、出来れば中に侵入したい。

男たちの入った入口はどうやら本来は裏口らしく、ひと気が無い反対側に回ると間口の大きい扉が見えたが、そこには浮浪者らしき姿の男がひとり、ふたり。恐らく街の住人を装った見張りだろう。

とすると、他にも居そうだなと周囲全ての者に警戒すべきと判断し、息をひそめる。

ティラータは比較的ひと気の少ない位置につけ、小石を拾う。そ

れを見張りと思わしき者たちにむけて投げつける。

カチンカチンと小石がはぜる音に、人の気配が向くのを感じとり、その隙に崩れかけた壁に足をかけ、一気に穴の空いた二階部分に入り込んだ。

ふう、とひと息つき、すぐに室内に気を配る。

誰もいない———ということは、ここはアジトではないということか。

階段を探すべく、廊下に出る。壁伝いに行くと人の気配を感じて、とつさに脇の部屋に潜り込むと、かすかに、声が聞こえてくる。

石が敷き詰められた床は老朽化で割れ、いくつか隙間ができている。その僅かな隙間から階下の声が聞こえ、ティラータは床に吸い寄せられるようにして覗き込む。

「確かに穴は開いた。これを更に長時間保たせるよう、急いで次の石版を用意しろ」

男は目深に被ったフードを外し、床に胡坐をかいて座っている。

高圧的な物言いに、それなりの立場を担っているであろうことが窺われる。顔は見えない。何故なら、顔半分が痛々しくも包帯で隠されていたのだ。

その横にもうひとり男が、何かを小脇に抱えて控えている。

「あ、あれ以上のものとなると、石版がかなり大きくなって……」

「石版の大きさは抑え、威力は格段に強く。それ以外は不可だ」

そういった男が脇に控える男に目配せすると、小さな悲鳴が上がる。

ティラータからよく見えなかった男が抱えていたのは小さな少女で、どうやら魔術師の身内なのだろう。少女を抱えなおし、首を締め上げる姿が、今度ははつきり見えてティラータは息を詰める。

「やめて、娘を放して！」

か細く震える声は、かすれているが女のもので、ティラータは顔をしかめる。

「コレが大事なら、答えは決まっている筈だろう」

尚も傷を負った半顔の男が、冷たく詰め寄る。

「わ、わかったから娘を……」

その返事にとりあえずは満足したのだろう。男たちが目配せし、幼子の首から腕が緩められたようだ。

その様子にティラータもまた胸を撫で下ろし、さあどうしたものかと考えをめぐらせていた、その時。

「誰か、そこに居るのか？」

ティラータの入り込んだ部屋の扉が開き、いかつい男が顔を出した。

——しまったと思うのと、見張りの男へ身構えるのは、ほぼ同時だった。

大声で仲間を呼ばれる前に仕留めんと、ティラータは床を蹴る。

咄嗟に剣を抜いて振り上げた大男の懷に入り、ティラータは素手で拳を打ち込む。

一瞬間こんだが、さすがに頭ひとつ分ほどもティラータより上回る男へ、一撃で何とかできるとは思っていない。流れる動作で、回し蹴りを怯んだ男の首筋に決めた。

意外なほど完璧に急所に決まったことに、ティラータのほうにギョツとする。

——まずいかも。

そう思う暇も無く、白目をむいた男が床に倒れこむのと、自分が着地するのがほぼ同時で、その衝撃をどうにも出来ず。

ただでさえ崩れかけた床が、二人を巻き込んで一気に崩れ落ちた。ガラガラと石がぶつかる音と共に。

狭い部屋のほんの一部が崩れ落ちたとはいえ、レンガと石造りの天井である。相当な重量となつて、地響きとともに一階の床に降ってきた。

咄嗟のことに一階に居合わせた者たちは飛び退き、事なきを得る。
「いったい、何なんだ？」

包帯の男は、忌々しそうに埃から目鼻を守りつつ、土埃の中を警戒する。

一方、何とか瓦礫を避けて着地したティラータは、土煙の向こうで先程から覗き見ていた連中の真っ只中に飛び込んでしまったことを知り、どうしたものかと思案中だ。

こうなったからには、何かしら決着をつけないことにはいかないだろう。さしずめ今は魔術師と思しき女と、その囚われている身内の確保が優先されそうだ。

「きさまは……レグルス」

どうやら、こちらの事は承知しているようだ。

——この中で中核をなしているのが、包帯を顔に巻いたあの男かと身構えつつティラータは観察する。

あの右側の包帯の下には、ヴラドの爪あとが残されているのだろう。その横には相変わらず子供を抱えたままの男。

バタバタと人の集まる気配にチラリと後ろを見ると、見張り役と屋内に待機していた仲間が三人、ティラータの目にはいる。

「逃がすなよ、こいつはレグルスのティラータ・レダだ。幸い丸腰だ、勝機はある」

護衛に雇われたのだろうか、その言葉に男達の目が鋭くなり、剣を抜いて身構える。

ティラータはボスらしき包帯の男に目を戻し、口元に笑みをつくる。

「お前が、騎兵隊の消えた下っ端か？」

確かに幸いだ。ここで捕らえることができれば、今回の事件に一定のカタがつく。

「俺を知っているのか？」

ニヤリと笑う男にティラータは呆れ顔。

「いや、知らん」

きつぱりと言う。

「そんな様な者がいたと、聞いたただけだ。顔も名も、存在すら私は知らん。なら都合が良い。どこの手の内の者かは知らぬまま、捕らえればよいだけ」

ティラータの言葉に、男は無言のまま顔を赤らめ、激高したようだ。

「捕まえろ、だがまだ殺すなよ」

ティラータの後ろの者たちに指示する男を、ティラータは笑う。

「殺すほどの覚悟で来ねば、私を捕らえることなど不可能だぞ」

言うや、ティラータは足元の瓦礫を真後ろの男に投げつけた。

「……がっ」

目を狙ったそれは、かろうじて庇った腕で避けられたが、死角ができる。

ティラータはそこを狙って足蹴りを喰らわせる。

苦痛に顔を歪めさせつつ長剣を抜き、死に物狂いで振り下ろしてきたそれを、ティラータは身を引いて避ける。

振り切られたその手元を手刀で叩けば、いとも簡単に長剣を落とす。

それを手にとって、持ち主の首元に突きつける。

「うっ……」

一瞬で男たちの優位は消え去った。

「死にたくなければ動くなよ。両刃は慣れていないから、峰打ちしそこねるかもしれないぞ?」

軽く嘘を言って包帯男を振り向く。

左右の見張りの二人は、剣を構え目線で指示を仰ぐようだ。

「そいつを見殺しにしても、時間稼ぎにはならないと、言いたいのか」

「投降しろ。今ならまだ公にされていない。素直に目的と後ろにいる主犯を言えば、交渉に応じてもらえよう」

ティラータは、真っ直ぐ男を見る。

「主犯？馬鹿げたことを言う。俺の名はジン。俺がボスだ覚えておけ」

笑いながらそう言うと、おい、と横に居る男に指示を出す。

ティラータに見せ付けるように脇に抱えていた幼子の顔を向けさせる。

ティラータは息を飲んだ。

幼子は手足をだらりと脱力し、脇を抱えるように支えられている。長く淡い栗毛が、背の中ほどまで伸び、美しい人形のように巻いて波打っている。

白い肌は透き通るようで、手足は下町のスラムに住むとは思えない程きれいで汚れていない。

人形のように俯いて垂れそうな首を、男が顎をつかんで持ち上げるとそこには、まるで穴が開いて闇がのぞくような、何の感情も含まない真っ黒な二つの瞳。

ティラータはゾツとした。

心の底から深い拒絶感をもって、その幼子を見る。

「……なんだ、ソレは？」

ずっと成り行きを見守っていた女が走り出す。

「アーリア、アーリア！ 私の娘だ、返せ！」

ジンはその女の髪を掴んで、強引に引き戻す。

「黙ってる、女！」

床に打ちつけられたボ口を纏う女魔術師は、人形のような幼子にすがるように手を伸ばす。

そんなやり取りを視界の端で感じつつも、ティラータの目は幼子からピクリとも離せずにいた。

——禁忌を、犯したのか？

ティラータの背に、ゾワリと感じたことのない程の悪寒が走った。

背徳の魔術師 2（前書き）

残酷な描写が含まれます、ご注意ください。

敵対する者同士が向き合ったまま、そこには異様な空気が満たされていた。

両者固唾を吞んで見守るなか、両脇を抱えられた幼い少女が声を発する。

「あ……ああ、マーマ……」

ギギギと骨が擦れる音と、筋がブチブチと切れる鈍い音をひびかせつつ、首が直角にひしゃげてゆく。

ほの暗い瞳には光を宿すことなく、口元はだらしなく開けたまま。何の苦痛の色のないその顔はかえって不気味で、見ている者に咽かえるほどの吐き気を与える。

ティラータは構えた長剣を降ろしてしまわぬよう必死であったし、その剣を咽元に向けられていた筈の男は別の意味で恐怖に顔をゆがめる。その脇でティラータを牽制していたはずの男たちは、口元に手をやり、こみ上げるものを必死に押さええているようだ。

「ああ、アーリア」

娘の異常が目に入らないのか、すぐるように幼子に手を差し伸べる女の目は、恍惚としている。

「……狂ってやがる」

ジンと名乗った男が吐き捨てるように言い、汚らしいものでも見るかのように母娘を一瞥する。

そしてだらりと伸びていた手足すらも、有り得ない方向にひしゃげてゆくのを見て、少女を抱えていた男にも限界が訪れた。真っ青な顔をして、少女——だったものと表現すべきだろうか——をついにドサリと床に投げ出す。

少女であったものは、更に身体を捻らせ歪み、のどからは悲鳴と

も嗚咽ともとれる声が、空気を押し出すたびにヒュウヒュウと漏れる。ただでさえ小さかった身体は、更に縮みびくびくと震える。

目を背けなくなる惨状を前に皆凍りつく中、ティラータだけは長剣を下げ、女魔術師ににじり寄る。

「……何をしたのか、理解^{わか}っているのか、おまえ」

ティラータの怒りの形相に、女は咄嗟に這いつくばって幼子を背に庇う。

「あんたも魔術師の端くれなら、こうなることは判っていたはずだ、なのにつ……」

可愛らしい容姿が見る影もない、肉の塊となった娘を背に、女は顔を上げた。その眼には狂気の光が宿って見えた。

「死んでたんだ。あのままじゃ娘^{アリア}は……魔術で治してあげなけりや、ここまで流れつく前に死んでたんだ。あんたに何がわかるってんだい！」

震える唇で、母親の顔となって女は叫ぶ。確かに、薄汚れた格好の母親に似つかわしくないほど、娘は小ぎれいな格好で、手も荒させないほど大切にされていたのだろう。

だが、ティラータはそれを受け入れられない。

「い、いいかい、治癒魔術が禁忌だなんてあたしは認めない。事実、アリアは半年も生き延びたんだ！」

ひしゃげたモノとなりつつある我が子を愛しげに見つめ、再びティラータを睨みつける。

「こんなのまた治せばいいんだ！……そうさあたしがいくらでも治してやるんだから！邪魔すんじゃない……」

——キインと剣のぶつかり合う音で、女の言葉が遮られた。

ティラータの持つ長剣が女の首筋に向かって振り下ろされ、それを防ぐように横からジンと名乗る包帯の男が、剣で受け止めていた。「殺らせるわけにはいかないね。こいつは相当イカれているが、まだ使い道がある」

そう言つて、ジンは怒りに震えるティラータの眼光を受け流し、不敵に口元を歪ませた。

「どけ。その娘は殺さねばならない……このまま放つておけば、その女は更に罪を重ねる。それだけは許せない」

ティラータは憎悪と憐憫の眼で母娘を見る。これ以上、あの哀れな子供に苦しみを与えたくない。それがたとえ母であるあの女が望んでいたとしても。

魔術師の肩が震え、理性を失つたその眼はギョロギョロと揺れながらティラータを捕らえる。

「……そんなこと、させるものか」

その呟きに続いて、何かをボソボソと続ける。

——何を言っている？

一瞬の静寂ののち、反応したのはティラータとジンの二人だけだった。

魔術師の懷が青黒く光ると同時に、ティラータは左右の男達を後方へ突き飛ばし、側にいた男に怒鳴りつける。

「あつちのを引きずってここから離れる！」

ティラータと共に二階から落ちてきて伸びている男を指差し、自らもまた身を隠す場所を探して室内を見渡す。

ジンもまた脇にいた仲間の男の胸ぐらをつかみ、ひしゃげて蠢く元少女であつた塊を引きずって、その場を離れようとしていた。

そんな周囲の動きをよそに、恍惚とした表情で呪文を唱え続ける女魔術師の姿は、まさに異様。

「……やめろ、そんな術を使えば……」

ティラータは焦りを隠せない。

魔術師が懷から出した小さな魔道具からは、禍々しい光が渦巻き溢れだす。そこに集まる魔力のあまりの濃さに、魔術に詳しくないティラータでさえ、生み出されるであろう術の威力を想像し、背筋が凍る。

その場にいた人間、全てが同じ気持ちだった。
ティラータに突き飛ばされた男たちは、われ先に逃げようと唯一の扉に走り出す。

——ふいに、長い詠唱がとぎれ、不自然なほどの静寂が訪れる。
視線を上げたティラータの眼に、ありえない光景が映る。

魔具と女を中心に、黒い炎が膨れ上がる。

足を止めていた男達を振り返り、ティラータが叫ぶ。

「……お前ら、早く逃げ——」

黒炎は妖しく光り、だが確かに実在として肌を焦がす圧倒的な熱気をもって、死の恐怖を煽る。

触手のようにうねりながら手を伸ばしてくる黒い炎は、次第に大きくなり狭い室内を埋め尽くす。

ジリジリと下がり、壁に背をつけたティラータの逃げ場は既にどこにもない。

——このままじゃまずい、どうしたら

焼け付く熱気と黒い炎の触手の間から、ジンが床を引き上げ、そこに仲間を押し込めるのが見える。

「……まさか」

足元に迫りくる、身を焼かれるような熱さに絶えながら、ティラータは一か八かの賭けに出る。手にした長剣を振り上げ、石の床を凝視する。

剣を振り下ろすその瞬間、爆発的に光が膨張した。

「……っ！」

——飲み込まれる

限界に達した魔術の炎が、一気に爆発する。

あたり一帯を衝撃波がつたい、ただでさえ崩れかけた家々が爆風でなぎ倒されてゆく。

地響きをともなった轟音は、人々の悲鳴とともに王都にいる全ての者の耳に届くほどだ。そしてその中心は、城下のどこからでも見えるほど、高々と黒煙を上げ続けていた。

王都の南西にある貧民街で起こった爆発の衝撃は、中心にそびえ立つイーリアス城へも伝わっていた。

「きゃ……何、今の？」

自室に閉じこもることを余儀なくされていた王女アシヤナは、いままで感じたことのない音と地響きに、読みかけの頁をめくる手を止める。駆け寄った窓からは城下の南側が一望でき、音のした方角に眼をこらす。

西の方、はるか城下町の外れで黒煙がもうもうと上がっているのが見えた。

「姫、失礼します」

何事かと、室外に控えていたボルド近衛副隊長が、慌てて様子を見にきた。

「見てボルド、あれ……」

アシヤナは黒煙を指差し、片手で胸を押さえる。

——ティラータ——

湧き上がる嫌な予感を押さえ込もうと、胸に当てた手を握りしめる。

「……あれは貧民街ですね」

ボルドの表情も険しくなる。

「ひどい煙。怪我人が出ているかもしれないわ。すぐに人をやって頂戴」

アシヤナはじっと遠くの煙から目を離せないでいる。

「はい、大至急。姫は部屋から決して離れないで下さい。人の手配

を済ませたら、すぐに戻ります」

「いいえ、私は大丈夫よボルド」

アシャナの言葉に、退室しかけたボルドが振り返る。

「しかし、姫」

「いいのよ、お願い。早く行つて頂戴」

ボルドはためらいつつも、一礼して部屋を出ていった。

「……ティラータ、あなたまさか、あそこに居ないわよね」

入れ替わりに入ってきた女官マイアに止められるまで、アシャナは身を乗り出し食い入るように見つめていた。

王城最上階の一室で、カタカタとチェス盤の上の駒が揺れ、閉められた窓越しにですら、ゴオンと音が入ってくる。

「いつたい、何かしら？」

茶色のもじやもじや頭がふわりと揺れ、窓を開ける。

「なに、あれ……」

「薬師よ、なにが見える？」

窓に乗り出して見える城下からは、人々のざわめきも次第に大きくなる。

ジャージャービーンは執務室の一角、チェス盤の前に座る国王を振り返る。

「下町、いえそれより外側の貧民街から、黒煙がひとつ上がつております、陛下……」

それを聞いて厳しい顔で立ち上がるミヒヤエル王を、ジャージャービーンが制す。

「危のうございます、陛下。どうか窓の手前までで」

「民の様子はどうか、混乱はしておらぬか？」

そう言いながら、薬師の言う通り窓辺に届かぬ位置から、城下を眺める。

そこに、激しくノックが聞こえ、返事を待たずして近衛隊長カナ

ンが入ってくる。

「陛下、ご無事で？」

「カナン、余は何ともない。あれはいったいどうしたのか」

カナンは少々顔色が悪い。

「たった今、オズマ殿が現場に向かいました。どうやら魔術の暴発の疑いがあるようです。城下に混乱を招かないよう、兵を出す許可を願います、陛下」

「分かった。直ちに現地に怪我人の救助と、原因究明に尽力せよ。それから、街の治安にも気を配ってくれ」

「は、御意」

一礼して退室しようとしたカナンを、ジャージャービーンが呼び止める。

「——オズマの対応が早すぎるわよ。何かまだあるんじゃないの？」

薬師の言葉に、カナンは苦い表情だ。

「ねえ、あの辺りって前からオズマが調べてたところよね。たしか、流れの魔術師たちの潜伏先らしいって」

「——それは本当か？」

ミヒヤエル王が聞いたさすが、カンンの表情が厳しくなる。

「……何？どうしたのよアンタらしくない」

「確かではありませんが……そこにテイラータがいるものかと」

そのカナンの言葉に、ミヒヤエル王と薬師の表情が凍る。

「なんですって？ あ……馬鹿娘は、何やってんのよ！」

ガタンと扉が無造作に開く。

「失礼します陛下——隊長、私に行かせてください」

アシャナ姫の下からかけつけたボルドだった。

「ボルド……聞いていたのか。しかしお前は姫様の元を離れるわけには……」

渋るカナンを制したのは、国王だった。

「ボルドに行かせよう。万が一、先だつての事件の者が引き起こした犯行ならば、オズマたち魔術師団では手に負えぬであろう。ティ

ラータに何かあれば、尚更の」

「ありがとうございます陛下」

ボルドは国王に一礼すると、カナンの指示も待たずに踵を返し退出していった。

王の執務室には、ジャージャービーンの長い溜息が響く。

「しょうがないわね、怪我人が多数であるかもしれないから、あたしも失礼するわ、陛下」

「おお、よしなにな。今日の勝負は、またの機会にの」
ミヒヤエルが微笑む。

「……えーええ、そうですね。あと少しで今日こそあたしの勝ちだったのに、もう！」

ぶつぶつと不平を漏らしながら、薬師も退出していく。いつでもどこでも規格外の薬師を、ミヒヤエル王が笑って許すのはいつものことだ。

そしてカナンもいつも通り、相変わらず不躰な薬師と己の部下を、困った顔で見送る。

「さて、私も兵の移動と警護の建て直しを致しましょう。」

なにかあればいつでもお呼びください、と告げて執務室を退出するカナンの顔は、いつになく厳しいものに変わっていたのだった。

不気味に立ち上がった黒煙は既に収まり、今はかすかに煙る白煙が辺りを覆う。

だが、貧民街はいまだ騒然としていた。爆発が起こって逃げ出す者、何が起こったのか様子をうかがう野次馬などでごった返す。

被害は黒煙が上がった一軒と、その周囲数件が爆風でなぎ倒されていたが、凄まじい音と地響きの割には被害は局地的なものであった。だが、当然巻き込まれた者がいないわけではない。多数の怪我人が出て、ざわめきの中にも呻きや嗚咽が混ざって聞こえる。

もちろん、爆発の中心であつた家屋の状態は格段に凄まじく、えぐれたような屋敷の中心はぽっかりと天井に穴が空き、黒焦げの瓦礫が放射状に散乱する。

まだあちこちで熱がくすぶっているので、野次馬といえど近寄れないのが現状であり、人々はその見たこともない状況を、ただただ遠巻きに眺めるしかできなかった。

「——とんだ隠し玉を持ってやがる。おい、そっちは大丈夫か？」
ジンは連れの男に声をかけながら、真っ暗な中ようやくランプを探り当て、火を入れる。

ぼう、と明かりが灯り、連れの男が青い顔をして座り込んでいるのが目に入り、チツと舌打ちする。

「しっかりしろ、これくらいでビビるな！　で、あの女はどこだ？」

「……女？」

虚ろに顔を上げはつきりとしめない様子で聞き返してくる男にジンは、使えない奴と溜息をつく。

「あの魔術師だ。まさか自滅なんてありえねえだろ。自分の術にやられた魔術師なんて聞いたことねえ！ 恐らく奴もどさくさに紛れてこの地下道に逃げ込んでるはずだ」

ジンはランプをかざして、キョロキョロと辺りを見回す。

幾度か使ったことがあるが、狭くて地下ということから方向が分かりにくくて厄介だ。じめじめと水が垂れそうな狭い地下道は、上にあつた屋敷とつながっていた。はるか昔に使われていた貯蔵庫のようだが、そこから地下道が延び、少し離れた場所に出入り口が作られている。

ここに住み着いた魔術師が発見し、魔術の研究と実験のために利用していた。

——カラン、カラン

狭い地下道に、小石が跳ねる音が反響する。

「あつちか、おい行くぞ」

ジンは連れを促し音のした方へ歩く。暗がりランプひとつで進むが、連れがヨタヨタとふらつき苛立つ。

「おい気を抜くなよ、あのレグルスが簡単にやられるわけない。殺られたくなけりゃ、周りを警戒しとけ」

「レグルス——？ あんな中で生きてるわけないだろ！」

信じられない、何を言っているんだと言わんばかりの連れを、ジンは鼻で笑う。

——だからお前は使えないんだよ、いつまでたつても。

「だといいがな」

確かにあの凄まじい黒炎の中、普通なら生きてはいまい。事実、この地下道が地上の焼かれた熱で、普段よりかなり蒸し暑くなっている程の威力だったのだ。

「……ホント、たまんねえな」

クククとジンは笑いを堪えられない。もしあれで生き残っているとしたら、これほど面白いことはない。

ジンの意味不明な笑みに、仲間の男は訝しみながらも口数少なくついで行く。もう何も起こらず、ただここを脱出することのみを考えて。

ようやく狭い入口を見つけ、地下道は少し開けた場所へと出た。

そこは魔術による明かりが灯り、ほんのりと明るい。それでも物陰などは目を凝らさねばはつきりと見えず、ジンはランプをかざしながら辺りを見回す。

部屋の一角に、崩れた瓦礫が積みあがっている。

そこに歩みより、天井を仰ぎ見てヒュウと口笛を鳴らす。

「ふうん、面白い」

ニヤリと笑うと、足元の大きな瓦礫をいくつか除ける。
中から鮮やかな金の髪が見えた。

「おい、こつちに来てくれジン！」

他を探索していた男が、後ろから声を上げる。

「……ああ、今行く」

瓦礫の山を一瞥し、ジンはその場を離れていった。

「どうした？」

ジンが男の元へ駆けつけると、そこには床に倒れ伏した女がいた。被っていたフードを除けると、青白い顔をしてはいたが、確かに女魔術師は生きていた。

倒れている床には、かすかに魔方陣の跡が見える。

「……用意のいいこった」

術の発動後、この用意されてあった転移魔法陣に飛んだのだろう。
「どうする、抱えて脱出するしかないか？」

どうにもビクつきはじめた仲間に、ジンは鼻白む。

「それしかないだろ。お前はこいつ背負って行けよ、俺は……」
舌なめずりしながら、顔を上げて瓦礫の山を見る。その目はまる

で、獲物を狙う獣の眼だった。

土埃で咳き込むと身体が動かず、何かで押し付けられて狭い場所に
いるのに気がつく。

目をあけると、ほんのりと暗い室内だった。

手足に力を入れ、レンガと石を払いのける。どうにか足を引き抜き、首を上げたところでティラータは全身を緊張させる。

「よお、無事ですんでなによりだ」

その声でティラータははつきりと覚醒し、己の置かれた、多少よろしくない状況がのみこめた。

——そうか、確か黒炎の魔術から逃れるため、一か八かで地下へ逃れたのだっけ。

ジンという男が、ティラータを見下ろす。その顔は、ティラータから見ても至極楽しそうだ。

「いいなあ、お前。ますます嬉しくさせてくれる……石も斬れるのか？」

ジンは払いのけた瓦礫を足で裏返すと、そこには崩れたものとは違う、鋭利な切り口が見える。そしてチラリと天井を見ると、そこにも鋭利に切り取られたような一辺が残されている。

「床に穴を開けたうえに、壁をフタ代わりにして閉じたか……この目で見るまで信じちゃいなかったが、剣聖つてやつはまさに人外だな。もしかして石だけじゃなく、鉄も斬れるのか？」

くくくつと笑いながら、ティラータに剣を向ける。

ティラータは黙ってその剣先を承知で身体を起こし、土埃を払う。斬れる。あんななまくらでなければだが」

ティラータは、ジンという男を改めて観察する。

「ほう、あんな細身の剣でか？ さすが、かの剣匠ベクシーの拵えだ」

ピクリとティラータの頬が反応し、薄闇に光る瞳孔が細くなる。

この世に一振りしかないであろうあの剣を、この男は知っている。ティラータは警戒する。今日は手元のないあの剣ほど、風変わりなものはない。片刃で細身とは知られているだろうが、見たことのないものには想像しづらいはず。世間での主流はティラータの剣の五割り増しの太さはある両刃だ。そして、城でもほとんど抜いたことはない。

「お前……何者だ？」

「俺はジン。そう言っただろ。お前の知つてるとおり、騎兵隊のほんの下っ端だ。ティラータ・レダ？」

ティラータは黙ってジンを睨む。

目の前の男の目的が分からない。せつかくあの魔術から逃れ、追っ手であるティラータも動けなかったのだ。なぜここに留まり、わざわざ――

ハッとして男の周囲に眼をこらす。

「魔術師を逃がしたのか」

ティラータの問いに、ジンは肩をすくめる。

「ま、結果的にそうなったな。使えない役立たずは邪魔なだけだしジンの表情が次第に恍惚としてゆく。

「俺はお前に興味があるんだよ、ティラータ・レダ。お前は面白くないからなあ」

ティラータはぞくりとした。

「他の連中の目的は、ま、色々だ。国を憎むやつ、王を呪うやつ、この嘘くさい楽園とやらを毛嫌いするやつ、単純に金が欲しいやつ……俺は、お前だ」

楽しそうに眼を細めながら、ジンはティラータの左腕に剣を向ける。

「いいねえ、俺がつけたその傷、その毒。思い出すだけでゾクゾクしてくる」

――あの矢を放ったのは、この男か。なるほど、騎兵隊に所属す

るこいつなら、逃げ切れる。

ティラータが嫌悪の表情を浮かべると、ジンは更に高笑いする。

「私を殺したかったのか？ 憎いのは私が、それとも私の立場か」

ティラータが淡々と問うと、高笑いがピタリと止んだ。

「他の奴らと一緒にするな。お前を殺したいのも、憎らしいのも、他の誰かのことだ。俺はただ、お前相手に楽しみめりやそれでいいんだよ」

——執着、か。

ティラータは呆れたように男を見た。

執着 2

——執着

ティラータは呆れたようにジンを見る。

「お前も、あの魔術師と同じか」

子供にただただ執着し、本人の心もおかまいなしに人形のように弄ぶ、『母』としての執着。

——ならば、この男は私の何に執着する？

ティラータはジンの言葉を思い起こし、考える。剣聖となり得る能力か？ いや、羨望ならじきに憎悪にとって代わる。ならばいたい何に？

「なあ。お前は俺を倒せるのか？ なぜ丸腰でここに来た。素手で俺を殺せるのか？」

ジンはゆらりと立ち、もどかしそうに顔半分を覆う包帯を解く。そこには生々しい三本線の傷が見え、いまだ塞がっていないようだ。赤く腫れ、まぶたを重くさせてはいたが、眼はどうやら見えているようだ。

ティラータの観察をよそに、ジンはうわ言を繰り返す。

「俺は見ていたんだぜ？ あの城で、お前を。なのに、お前はちつともその剣聖たる片鱗も見せやしねえ」

ティラータは黙ってにらんだまま、目の前の剣先を指でつまんで逸らし、ジンの懐にすつと入り込む。そして全体重を両手に込めた。次の瞬間、ジンの身体が鈍い音とともに、石の床めがけて吹っ飛ぶ。

「剣聖たる片鱗？ …… お前は馬鹿か」

ティラータは倒れた男を無視して周囲を窺い、側に落ちていた、剣の長さですら足りぬ棒切れを拾いあげる。

「はは、いいね面白い、馬鹿で結構！」

さほどダメージを受けていないのか、のんびりと起き上がる。

「この広い世界、たった五人しかいない剣聖のうち一人が目の前にいるんだ。殺し合わずしてどうする」

「二人、会ってるじゃないか。珍しくもなんともないだろう」

その言葉に、ジンは首を振る。

「アルクトウルスを入れてどうする。老いばれが役にたつか？」

拾った棒を構えるティラータ。

「……その傷」

ティラータの夜目がきく目には、はっきりと見える。

「それをお前につけたのが、もうひとり。シリウスだ」

ジンの目が、大きく見開かれる。

「あの狼……？ どういうことだ、あの時誰か居たのか？」

思いもかけないことを知らされ、ジンにできたほんの一瞬の隙について、ティラータは棒切れの剣で正確に咽元を突きこんでいた。

「なんだ、あいつ姿は現さなかったのか？」

咄嗟にかわしたジンに、冷や汗が伝う。たとえ棒切れでも刺されば死ぬ。ほんの少しかすめただけで、薄い皮膚は赤く腫れあがった。

「剣を持つてこない理由を聞いていたな…… 邪魔だからだ」

ティラータは反撃してくる剣を難なくかわす。

「邪魔、とはな」

「剣聖の地位は、あの剣に与えられたわけではない、ということだ」
ティラータが構えているのはただの棒切れであるが、そこには隙など一切無く、ジンは一歩も近寄れない。だがそのことに悔しさは

感じてない様子で、それどころか気味が悪いほど上機嫌だ。

剣を持たなくても、身体能力、知識、状況判断、それらをどんなときにも発揮できるティラータ自身が、剣聖の器なのだ。

「なるほど、こうして一対一なら、俺などどうとでも出来るということか」

「いや、そうでもない。私は万能ではない……お前がつけた傷が証明している。だが、私には優位にできる手が幾つかあるだけ」

淡々とした物言いのティラータ。こういった手合いは興奮させると面倒くさい。

「教えてやる。私はこの地下でもさほど苦なく物を見分けられる。そしてどうやら体術でも私の実力は上だ。時間を稼げば、必ずここには兵が集まってくる。あと……出口はどうやら一箇所らしいな」

ティラータは手の内を全てさらけ出す。それは暗にこのままティラータと一戦交えても、勝ち目がないことを理解させるということ。だがジンは焦ることなく、また笑う。

「どうして出口がひとつと分かる？」

「……空気の流れが、常に一定方向だ」

ふつと力を抜き、ジンは剣を収める。

それに合わせて構えを解くティラータを、ジンは不思議そうな顔で見る。

「どうした、お前はこれまで王と姫を害するものを、容赦なく葬ってきただろうが？」

「私からも問う……なぜそちら側に与した？ お前は騎兵隊にいたのだろう」

真っ直ぐ睨むティラータに、ジンは笑いを堪えられない。

「そりゃ、あそこにいたのは都合がいいからに決まってるんだろ。俺は最初から忠誠なんぞ誓っちゃいない」

「それでもだ。今私にとって重要なのは、あの逃げた魔術師を悪用されないよう消すこと。お前じゃない」

「だから俺を逃がすのか？」

「逃がさない」

「——なんだそりゃ」

「お前が言った。王が憎いのも、国を呪っているのも他のやつだとなら、こつちに来い、ジン」

初めて名を呼ばれ、男が柄にもなくたじろぐのに気付いた。

「私と殺り合うのに、そこにいる必要はない。すぐ側で命でも何でも狙えばいい」

一瞬の沈黙の後、ジンが大笑いする。

ヒイヒイ言つて腹を抱えるのを、ティラータは呆れて見る。

「本当に、お前面白いな。くく、だがやっぱりダメだ。俺はお前を心の底から、酷い目にあわせて殺したくなった」

目を細めて言うその顔は、獰猛な肉食獣に戻っていた。

「……そうか、次もそちら側で私の前に立てば、その時は容赦しない」

「へえ、やっぱり逃がすのか？」

「違う。一度だけチャンスをやると言っている。まだお前は——」
殺すに値しない、という言葉を読み込む。

それに、瓦礫に埋まったティラータを、そのまま殺さずに置いておいた男の真意を量りたかった。——まあ単に、起きている状態で殺したかっただけなのかもしれないが。

「無駄なことだ」

さて、と男はランプを片手に飄々と、天井の向こう——地上を見上げる。

「そろそろ外が騒がしくなってきたやつだ……んじゃ、首洗って待ってけよレグルス」

男が手を上げて地下道へと去ってゆくのを、ティラータは黙って見送った。

どうかしている——それは自分でも思う。
放っておけばアレは、罪を罪と思わぬことを平気でしかすような輩だ。

ティラータが短い溜息を漏らしていると、天井からパラパラと小石が落ちてくる。見上げると、蓋の役目をしていた崩れた壁が持ち上がり、地下室に光が差す。

咄嗟に振り返ったが、ジンが去った方向には、ランプの揺れる明かりも人の気配も既に消えていた。

「あああの、誰かそこに、いますかあ？」

ああ、とティラータはその拍子抜けした声に笑う。やはり、来てくれたのはオズマ殿か。

彼女と決めてここに偵察に来たのだ。

「オズマ殿、こっちだ！」

ティラータが空いた天井に向かって、手を振る。

「ティラータ殿！ ご、ご無事でしたか？」

淡いたんぽぽ色を垂らし、穴からそばかす顔がぴよこんとのぞき込む。

「ああ、あの、いまそこに助けに……ぎゃああ」

顔からずり落ちた眼鏡を取ろうと、オズマは手を離す。

当然そのままバランスを崩しふわりと落ちてくる魔術師を、ティラータは慌てて駆け寄って受け止めた。

ドサツという音とともに勢いで尻餅をつく、腕の中でオズマが「ヒイイ」と叫ぶ。

マントにからまったせいで、ひっくり返ったまま落ちてきたので、頭を打ったようだ。

「大丈夫か、オズマ殿？」

相変わらず冗談のようなオズマの動きに、ティラータは笑いを堪

えつつ様子をうかがう。

当のオズマ次官は、慌てて身を起こし、辺りを手探りで眼鏡をたぐりよせる。

「だ、大丈夫です……スミマセン」

しゅん、とする国家魔術師次官。

手を貸して立ち上がらせると、天井ではオズマの部下である魔術師たちが、またかという顔で心配そうに覗き込んでいた。

「今、他の者もこちらに……」

オズマをティラータが制す。

「まだ、ここでやる事がある。オズマ殿、人払いを頼む」

ティラータの苦い表情に、オズマは頷いて天井——一階なのだが、その者たちに伝えてくれた。

そして地下室の一角に、迷うことなく歩み寄る。

「もうひとつ頼みたい。オズマ殿、剣を一振り借りてほしい」

ティラータは足元にある、哀れな塊の側に膝をつく。

もう何も言わぬそれは、ただ息をして、拍動を刻むだけ。歩くことも食べることも、笑うことも、憎むこともなく、このまま衰弱してゆくだろう。

「ティラータ殿……これは」

傍らに來たオズマは、一見してそれが何か理解した。

そのオズマから剣を受け取る。

「ティラータ殿、こ、これは本来私達がやるべきで……」

痛ましい少女であつた成れの果てを、処分するのは魔術師の仕事だ。だが、ティラータは首を振る。

「いい、私がやる。オズマ殿は下がっていてくれ」

ティラータは、少女のものであつた金髪をひと房手に取る。美しく手入れされたそれは、柔らかく、少女の面影を思い起こさせる最後の欠片。

ティラータは目を伏せ、祈る。

何に祈ればいいのか分からないが、これ以上少女が苦しむことがないよう、願った。

そして剣を払い、振り下ろす。

足元に伝う赤い流れが、彼女が生きていたという唯一の証に見えた。

もう、拍動は刻まれない。

「……すまない」

その眩きは小さく、そして震えていたのを、オズマだけが聞いていた。

魔術の暴発を逃れ、地下から上がってみてティラータは、よくも生きていたものだと思えて思った。

一階居間だったと思われる床は、真つ黒に炭化していた。そして見上げればそこにある筈の天井がまるで無く、よく晴れた青空が広がっている。

呆然と周りを見回していると、見知った顔が駆け寄ってくる。

なんとなく考えるより先に、回れ右したティラータ。続いて地下から上がってきたオズマの影に隠れる。

「無事ですか、レグルス」

心配顔のボルドだった。

ティラータはこの男の、この表情が非常に苦手だ。

「一応、なんともない」

苦笑いで受け答えるその姿は、全身ススだらけだったが、どこも怪我がないのが見てとれたのか、ボルドは大きな溜息をつく。

「……で、なんで隠れるんですか？」

「つい、条件反射で」

間に挟まれ、訳が分からずおたおたするオズマが助けを請う。

ふと遠まきにざわめく、兵に追い払われる野次馬たちに目を向ける。

ボルドとティラータもそちらを見ると、ざわざわと人々がこちらを注目しているのに気付いた。

「……また、あの女だ」

「なんで、あいつが……」

「まさか……」

「よく見ろ、あいつの姿！ どう見てもあの中にいたんだ」

「じゃあ、やつぱり……」

「まったく、疫病神だな」

「あいつのせいで……」

「蛮族が」

ひそひそと不穏な空気が流れ始めたのを、そこにいた兵と魔術師団も肌で感じとる。

ボルドが動く。

側の兵にいくつかそつと指示を出すと、自らは様子を窺っていた民の前に立つ。

「静まれ！」

良く通るその声に、人々がハツとして息を呑む。

「私は王宮近衛隊副隊長、ランカス・ボルドだ。この度の件は、近辺に潜伏していた魔術師が違法に起こした魔術の暴発である。主犯の魔術師の情報を探求している。皆に協力を願う。この家にいた者について見知っていることがあれば、兵に伝えてくれ」

ボルドの言葉が終わると、再び人々がざわめく。一般人に魔術の仕組みは分らないが、これで惨状を引き起こしたのが、ティラータではなく魔術師と断定された。この事実が近衛副隊長の口から出たものならば、今ここにいる誰にも否定することはできない。

「それから――」

再び人々が静まる。

「陛下から、怪我人の救護を仰せつかっている。怪我のある者は、遠慮なく申し出てもらいたい。そして、関係のないものは速やかにこの場を立ち去ること……以上だ」

ボルドは言葉をまとめると、反論は許さぬといった体で、早々に人々に背を向けティラータたちのもとに戻ってきた。

「事後処理は陛下から任せられています。いったい何が起きたのか説明してもらいますよ」

ティラータはここで何が起きたのか、おおまかではあったがボルドとオズマに話す。

オズマが指摘した通り、ここに潜伏する魔術師が手を貸していることが明らかになったが、結局魔術師とジンの両方を取り逃がしている。その上、街に甚大な被害を出してしまった。

話をすすめるうちに、ボルドの顔色が青くなったり眉間にシワが寄ったり、溜息をついたり少々煩わしかったが全てを伝え終わる。「……というわけだから、早急に元騎兵隊員のジンと名乗る男の搜索手配を頼む。どういう輩なのか、背後を調べて交遊関係も洗い」

ティラータの言葉に、魔術師オズマが首を捻る。

「どうした？」

「と、取り込むのは、無理でしょうか」

オズマの言葉に内心どきりとしながら、ティラータは実際にジンを取り込もうとしたことを話していなかったことに気付く。

「……私もそれは考えたが、腕は立つだろうが性格に難アリだしどう出るかわからない。今回は逃がしたわけだが、追わないとも言っていない。今から追って捕らえられるなら、その程度の男」

ティラータは苦笑いを浮かべつつ、なんとなく誤魔化す。

「それに本人にも言ったが、次は無い」

その言葉に、ボルドも頷く。

「では、あとは魔術師団に任せてわれわれは怪我人の救護と、現場整理か」

ボルドは散らばり始めた野次馬を見渡す。

ふと、ティラータは屋敷内に横たわる、布を掛けられたものに目が行く。

「……助けられなかったか」

布の端からはみ出た、黒くこげた手足が数人分見える。

逃げると伝えたが、間に合わなかったのだろう。

「一瞬で炭になったのなら、さほど苦しまなかったでしょう」

痛ましい遺体を前に、そう言って取り繕わねばボルドとて平静を保てなかったのかもしれない。それ程に今回の魔術は熾烈を極めていたのだ。

「できる限り、彼らの身元を捜してやってくれ。恐らく雇われた者だろうとは思うが……もうここに手がかりはない。城へ戻ろう」

オズマは頷く。

「ここ、この術式はトレース済みです。あとは、み、皆が痕跡を消せば、私たちの出番はなな無いかと」

ボルドもまた兵達に指示を出しす。救護所と現場の保存のための見張り、そして街の巡回兵の手配を終えて城へ戻ることにした。

ティラータは愛馬ブランシスと剣を回収し、魔術次官のオズマと近衛副隊長ボルドと共に、イーリアス城へ戻ってきていた。

ティラータが貧民街で得た情報を、早急に陛下に報告せねばならない。そして対策を立て一刻も早く動き出さねば再び先手を取られない。かねない。

三人が城門をくぐろうとした所で、物々しい一団に出迎えられた。それははた目にも歓迎されているとはいいがたい、雰囲気醸し出している。

ティラータは目を細め、ボルドとオズマは息を呑む。

白地に金と銀の刺繍が眩しい、きらびやかな騎士服に身をつつみ、長く垂れたマントが目立つ。そのマントと隊服の胸には、イーリアスの紋章と共に、交わる双剣と百合の紋章が光る。

そろいの一団の中から、中央の壮年の男性が一步前へ出る。

その男は銀に近い輝く金髪で、背が高い。神経質そうな顔立ちが、その整った美しさを際立たせ、年齢を感じさせない精悍さと近寄り

がたい気品を生んでいる。

——ティラータには別の意味で、近寄りたくない相手だった。

「私に何か？ アレク・フェイゼル騎兵隊長殿」

真っ直ぐ見返しティラータが口を開くと、彼の隣にいた男が睨みつけながら叱責する。

「控えよ！ 身分の卑しい者が、許しも無く先に発言するとは何事だ！」

そう言った男を、フェイゼルが片手を上げて制する。

「よい、今さらこの獣に礼節もなにもなかるう」

高慢な白い一団が、揃って鼻であざ笑う気配に気付いたが、ティラータはあえて無視する。

それに耐えられず口出したのは、拳を握りしめいつになく厳しい顔のボルドだった。

「フェイゼル殿、ご用件は何ですか」

「お前か、ボルド卿の息子よ。まだそこにおったか。いつまでもそのままでは、今は亡き侯爵も泣いておられよう。早く目を覚ますのだな」

フェイゼルはボルドにも厳しい口調だったが、そこにはティラータに向けられたような蔑みは見えなかった。

フェイゼル騎兵隊長は、この国でも指折りの家名を誇る伯爵だ。貴族議会を支持しており、当然選民意識の塊ともいえ、元来ティラータへの格別の待遇を快く思わない人間のひとりだ。いや、先鋒ともいえる。

さて、とティラータに向き直ったフェイゼルの顔には、既に表情は無い。

「貴様には一緒に来てもらう。このたびの件で、議会は貴様を国家反逆の疑いで議題にかける」

「なっ……！」

声を上げたのはボルドだった。オズマも大きな目をこぼれんばかり

りに見開いて固まっている。

一方ティラータは、無表情でその言葉を受けている。

「何故ですか？」

「何故？ その疑問こそ我らは問いたい。今度の騒動の渦中にいるのは、いったい誰だ？」

それは違う——と叫びたかったボルドだが、事の始まりである魔法障壁での事件を、陛下が内々で収めた以上、滅多なことは口できかない。

ティラータは、苦悩するボルドに告げる。

「疑いがあるのなら晴らすまでだ。私にやましい事はない。議会にでも何にでもかければいい……議会の迅速な行動力には、感心させられるがな」

ニヤリと笑うティラータを見て、ボルドが悟る。

「分かりました。では、私たちは戻ります」

ボルドは、これが騎兵隊の保身ゆえの行動であることに気付いた。
「では早々に行くぞ」

頷くティラータを中心に、四方を囲む形で騎兵隊員が配置され、先頭にはフェイゼルが立つ。

まるで罪人を連行するかのような有様だ。

ボルドは苦々しい思いでそれを見送る。

「……あ、あの行かせてしまって、よ、よろしかったのでしょうか」
オズマがようやく発した言葉に、ボルドは頷く。

「議会の要請は、彼女とて断れません。ですがこれは少々調べる必要があるかもしれませんよ」

「ボルド殿？」

——早い。ティラータが指摘した通り、対応が早すぎる。いくら元騎兵隊員が係わっていたとしても、議会まで動くとは……

ティラータを見送って、二人は指示を仰ぐべくカナン近衛隊長の下へと急いだ。

剣と百合と、すみれと茨 2

王城の長い廊下を黙々と進む一行の中央に、ティラータはいた。ふと気付くと、議事堂に近づくようで少し逸れた。

「どこへ行く？」

ティラータは一人飛び越え前方を歩く、長身の騎士へ声をかける。だが、そのフェイゼルはティラータの問いには見向きもせず、歩を緩めることすらしない。

——やれやれ。

ティラータが辺りを見回すと、そこは議員用の控室の一室へと向かっているようだ。

先頭のフェイゼルが止まり、扉を開けて中に待機していた侍女に声をかける。すると、ティラータは背中を押され、部屋へと押しやられた。

振り返ると、冷たい表情の騎兵隊長フェイゼル伯爵がこちらを見下ろす。

「高貴なる貴族議員の方々を前に、そのなりではあまりにも不敬にあたる。時間をやる、身なりを整えろ」

そう言う。それ以上見るのとはばかられると言いたげに、フェイゼルの視線が外れ、目の前で扉が閉められた。

そうしてティラータは改めて、自分の格好を省みる。

先程の戦闘でススを被り、いたる所に黒い汚れがついている。それに咄嗟だったとはいえ、瓦礫に埋もれたせいで服の裾が、ほつれ擦り切れていた。

「——こちらへどうぞ」

その声に振り返ると、そこには小さな控室とはいえ湯浴みができる簡素な水場が設けられていた。

「こちらが着替えです……手伝いますか？」

見知らぬ侍女だったが、ティラータを無表情で見るその顔の下には、戸惑いが見てとれる。

「いや、自分でやる。すまないが退出を……無理ならあちらを向いていてくれ」

侍女は一瞬考えたように目を泳がせたが、素直に部屋の隅に移動し、背を向ける。

それを確認して、ようやくティラータはススだらけの剣士服を脱ぐ。

大きめのタライには湯が張っており、中に入り手足についた汚れを落とす。

その白く若々しい手足、そして幼さの残る胸には赤いイーリアス紋。

ちらりと侍女を見るが、先程から動かず背を向けたままであるのを確認し、ほっと息をつく。

手早く洗い、そばにあった布で身体を丁寧に拭く。そして用意された服を手に取り、ティラータは苦笑いを浮かべる。

そこにあつたのは、簡素なワンピースのドレスだった。スカートなどの女性ものの服に袖を通すのは、いつ以来だろうか、ティラータは首を捻る。

スカートの丈は幸いにして足首まであるようで、ひとまず安心する。ススまみれのブーツで紋章を隠さなくて済む。だが、肘から下の紋章を隠れるような長い袖ではない。

とりあえず仕方なしに着てみると、何とか胸の印は隠せるものだった。ならば、とキョロキョロと周りを見回したが、他には何も用意されていないようだ。先程着けていた甲当てもススだらけで使いまわしは無理そうだ。何より、ワンピースにはあまりにも似合わない

い。

さて、どうしたものか。

考えた挙句、侍女に声をかける。

「侍女殿、申し訳ないが長い手袋があればお借りしたい。無ければ裂いてもよいような布を頼む」

話しかけられるとは思っていなかったのだろうか、侍女は方を震わせ、振り向く。

そして少し考えた後、部屋にある筆筒の中を探しはじめる。

「——手袋はありませんでしたが、スカーフでしたら」

侍女が持ってきたのは、白地に刺繍があらわれた大きめのスカーフが二枚。

ティラータがホツとして受け取ると、侍女の目がその隠されていない腕をとらえてビクリと固まる。そして眉を寄せしかめた目を、すぐに背ける。

差し出された腕に刺青のようにくつきりと浮かぶイーリアス紋。常には隠されているそれは、滅多に人目に晒されることはない。

だが、ティラータにとって侍女の反応はとりたてて珍しいものではなかった。隠しているとはいえそれは絶対ではないし、激しい訓練中に外れて人目につくこともある。

この国イーリアスでは刺青の習慣などなく、この印を見た大概のものたちは奇異な目を向けられる。そしてやはり蛮族の風習は野蛮なものだ、と蔑まれる。

——実際には蛮族と呼ばれる民にも刺青の習慣などないのだが。

そういえば、この印を見てまた違った反応を見た男、シリウスを思い出す。なにか言いたげな男は、躊躇無く印に触れてきた。

考え事をしながらも、ティラータは借りたスカーフを腕に巻きつけ、元々していた手甲のベルトで留め体裁を整えた。そしてスカーフの上から腰ベルトを巻き、愛剣も下げる。

「待たせたな」

準備が整ったことを告げると、侍女は黙って頷き、廊下で待つフェイゼル伯爵に声をかけた。

ティラータは促されるまま、再び囚人のように騎兵隊に連行される。

フェイゼルは相変わらず無表情に確認すると、再び歩き始める。「分かっていると思うが、貴様には許可無く発言する権利はない。卑しい身分であることを肝に銘じ、せいぜい尊き方々に失礼のないよう、伏しておれ」

前を見据えたまま、冷たい声が降ってくる。
まるでティラータをあざ笑うかのように。

初めてではない。以前にも議会に連れてこられたことがあった。それは剣聖の地位を得て、剣術師範長の任を陛下から賜ったとき、反吐が出るような空気があった。

貴族議会とはいえ、陛下の勅命を破棄できるほどの力は持っていない。結論としたら陛下の決定を承認するしかない。

だが、よほどティラータの剣術師範長就任が気に食わなかったのだろうか。

強引に議員の前に連れてこられ、ただ蔑み冒瀆されるのをティラータは黙って聞いた。

だが、今回は違う。

黙っていれば彼ら議会は、ティラータに罪をきせて城から追いつてくだろう。

ティラータは握る拳に汗を滲ませる。

まだ彼らにしてやられる訳にはいかない。守りたい、守らなければならぬひとがいるのだから。

ティラータはじつと前を向いて歩き続ける。

ほどなく議事堂のとなり、待機室に通された。

小ぢんまりとした部屋の中央に小さな椅子があり、そこに座られる。両脇には騎兵隊員がひとりづつ立ち、ティラータが逃れないよう見張る。そして残りは二つある入口を固め、万全の体制になったところでフェイゼルが会議室に入っていた。

彼、騎兵隊長フェイゼルもまた、名だたる貴族の一員として議員のひとりに名を連ねている筈だ。

ティラータはこれから臨む戦場へと意識を向ける。

負けられない。闘って力と技で打ち負かすのは得意だが、今回はかりはそれは役立ちそうにない。

だが、勝たねばアシャナ姫の傍にはいられなくなるだろう。それだけは阻止したい。

ティラータは硬く唇を結ぶ。

「ティラータ・レダ、入れ」

扉が開き、名を呼ばれる。

ティラータはひとつ、大きく息を吸ってから立ち上がった。

* * *

「なんですって、何故ティラータが疑われなくちゃならないのよ！」

近衛隊詰め所の一室で、怒声をあげたのはレイチエル・リンドだった。

その燃えるような気性を隠さず、レイチエルはボルドの胸倉を掴む。

「レ、レイチエル、やめて下さい」

赤毛の戦士を止めようとしているのは、頼りなげなオズマ魔術師

次官。

「アレルヤは黙ってて。ねえボルド、なんでいつもあの娘なのよ！ なぜいつも目の敵にされるの。あの姿だって、そんなに目立つものじゃないわよ！ あいつらだって私達だって、蛮族の何を知っているというのよ？ 森の民は西の森からあそこ一步だって出てきやしないのに、なんで忌まわしいものだなんて決め付けるのよ、なんでワザワザ民にまで流布しなくちゃなんないのよ、教えて！」

レイチエルは一気にまくし立て、ボルドに詰め寄る。

彼女自身、そんなことをボルドが答えられるとは思っていないのだが、日頃の積もり積もった感情を押さえ切れなかったのだ。

「あんたたち剣士どもが、一番分かっているんじゃないの？ ティラータに……ティラータの剣に野心も偽りも何にもないって。正しいと思ったことを行動している。それがこの国の為になることじゃない！ なのに何故あの貴族様とやらは、ティラータを排除しようとするの？」

ボルドに問うというより、もはや自問に近かった。

一部の貴族——とくに上位の者たちがティラータを厭う意味。

それは彼女の持つ半分の血——レイチエルの言ったのとは真逆の方だが——に起因していることを、ボルドは知っている。

だがそれを知られれば、更にティラータを追いつめることにしかならない事も、分かっている。

ボルドの一瞬の揺らぎに、レイチエルが気付く。

「……あんた、何か知っているの？」

その言葉に、ボルドは己の失態に気付く。

ボルドは乱れた心を咄嗟に押し隠し、胸倉を掴むレイチエルの手に自分の手を重ね、諭すように言う。

「いえ、私は何も知りません。レイチエル、放して下さい。今は、私たちに出来ることはありません」

それが更にレイチエルの感情に火をつけた。

「出来ることが無い？　あなたそれ、本気で言ってるの？」
レイチェルの高い声に、問い詰められるボルドではなく、オズマがビクリと肩を震わせる。

一触即発かと思える状況の中、静かに詰め所の扉が開いた。

苦い表情のボルドとオドオドと見守るオズマ、そして燃え盛る感情の波を爆発させようとしていたレイチェルまでも振り返る。

そこには。

「放してあげて、彼が悪いわけではないのよ、レイチェル？」

——苦笑いを浮かべた、王女アシャナだった。

「姫……！」

三人が口を揃える中、アシャナはドレスの裾を持ち上げ、詰め所に入る。

その後ろには、ばつの悪そうな近衛隊員二人がつき従っている。

「ご免なさいね、彼らを叱らないでやってボルド？　私が無理やり来させたのよ」

にっこりと微笑むアシャナにも、ボルドは苦い表情のままだ。

「マーヤ女官長がよく許し……いえ、黙っていらしたんですね？」

アシャナは否定せず、笑ったままだ。

ボルドは大きく溜息をひとつ。

「ティラータが議会に招かれたと聞きました。ボルド、私も議会へ向かいます。ですがその前に、詳しい報告をして頂戴」

アシャナは笑みを消し、らしくない真剣な目を向ける。

ボルドとオズマは互いに目を合わせ、頷く。

そうだ。議会に対して詳しい情報は武器となるだろう。そしてそれを使えるのは王族たるアシャナ姫しか今はいない。

ボルドは、ティラータから聞かされた一連の事件、そして爆発の経緯を話し始めた。

剣と百合と、すみれと茨 3

中央の宣誓台を囲むように、内側を向いて居並ぶ貴族議員席。

その中央は空き、一段上がって国王が座す。王の背後には近衛隊長が控え、守りを固める。

王の左右それぞれ十席ずつに、絢爛豪華な衣装を身に纏い、肥え飾り立てられた貴族の当主たちが不遜な態度で中央のティラータを見下ろしていた。

中には空席も見られる。王の左手すぐは王弟殿下アレス公の席だが、主不在のままだ。そしてその中ほどにも一席空いている。

国王の背にあしらわれた、鮮やかなステンドグラスから入る光が、罪人のごとく立たされた中央のティラータを照らす。

だがその当人は罪人となるつもりなど微塵もなく、背を伸ばし真っ直ぐ前を見据える。その姿は堂々として、貴族の年老いた当主たちにはない若い力をみなぎらせているように見える。

国王のすぐ右手側が、今回の議長であるユモレスク伯爵。その議長が立ち上がる。

「それでは、今日の審議を始めさせていただきます」

そう言つて国王に一礼すると、ユモレスク伯爵は貴族議員の面々に向き直る。

「本日は、我がイーリアスの名誉ある剣術師範長を務める、ティラータ・レダの国家反逆の疑いについて、皆様にご判断願います」

——僅か二十名にも満たない貴族議員たちが、一斉にざわめく。その反応は様々で、ほつつと面白がる者、黙ってやりすごす者。だ

が多くは悪意に満ちた笑いが、表情に見てとれる。

「詳細は私から――」

貴族議員の末席についていた騎兵隊長、フェイゼル伯爵が立ち上がる。

「先程、皆様もお気づきでしょうが、貧民街で起きた爆発事件においてこのティラータ・レダが、大きく係わっていた事が分かりました。

現地では、死者も出ております。怪我人も多数――。この者が現場に居合わせたことを、調査に向かった魔術師や近衛の者のみならず、民衆も目撃しております。しかしその様な危険な場所に遭遇しておきながら怪我すらないとは、些か不自然と言わざるを得ない。

以上のことから、これら危険な爆発を引き起こしたのは、このティラータ・レダと考えられるでしょう。あのような惨事を引き起こすなどと、罪なき民、ひいては国家に対する反逆の意があると断じるに足ると思われます」

フェイゼルがひと息ついたところで、議長であるユモレスク伯爵が発言する。

「それだけかね、他には？」

「はい、残念ながら他にも余罪が……」

――茶番だ。

ユモレスク伯とフェイゼル騎兵隊長は、いわば師弟ともいえる立場だ。同じ伯爵位をもつ二人は古くから親交があり、親子ほどに離れたフェイゼルの、ユモレスクが何かと指導し取り立てていることは、王宮に足を運ぶ者で知らぬ者などいない。

芝居のような決まりきったやり取りに、ティラータは辟易する。

だが、一字一句聞き漏らさぬよう、萎える心を奮い立たせて集中する。彼らの真の狙いを、言葉の端々から少しでも読み取りたい。

一見何の動揺も見せないティラータを、フェイゼルは冷たく見据

えつつ、言葉を続ける。

「先日、西の森にて魔法障壁を打ち破り、傭兵まがいの賊が入り込みました」

その言葉に、ざわりと義堂内の空気が揺れる。

「魔法障壁を破ったと……？　いったいどういうことだ？」

ほとんどの貴族議員たちが知らされてなかった事実、困惑している。

「これがどういう事態なのか……それはこちらに居られる議員の皆様ならよくお分かりでしょう。我が国がかつて経験したことのない危機です。こんな事態を放っておけば、この国は、イーリアスの尊い民は唯では済みません。この『地上の楽園』『至高の宝』と謳われたイーリアスの、存亡の危機でありましょう」

その言葉を受け騒然とする中、議長が再び立ち上がる。

「皆様、ご静粛に――」

議長ユモレスク伯は、黙って成り行きを見守るミヒヤエル王を振り返る。

「畏れながら陛下……今の報告は事実でございましょうか」

王の返答を、全ての貴族議員たちが固唾を呑んで待つ。

深く玉座に座った王は、重い口を開く。

「事実である」

瞬間に、議堂内は再び騒然となる。

互いに顔を見合わせ驚きを口にする議員たちを、ティラータは観察する。

青ざめる者、ただ大げさに仰天するだけの者、怒りを顔にする者――。しかし、ティラータはある一点で目を止める。

薄く口元を弛めるフェイゼルに。

「ご静粛に」

議長のひと声で、しんと静まり返る。

その反応ひとつで、その場での彼ユモレスク伯爵の立場が窺える。その場ではとりたてて発言しない国王を押しつけ、場を制しているのは、紛れもなくユモレスクその人だった。

「今ここで騒いでも詮無きこと。まずは真実をよく知らねばなりません、審議を始めましょう」

ユモレスクの目は、猛禽類のごとく鋭く光る。

「さて、ティラータ・レダ。そのほうは剣術師範長という任に就き、陛下ならびに姫の信をいただきながら……あまつさえ名誉ある西の森の守護者でありながら不法な侵入者を許し、その責を問われず放置し、更に今日のような騒動を巻き起こした。これが事実であるならば、忌々しきことである。……異議があるなら、申し開きをしてみせよ」

——ひとつ、息を吐き心を落ち着かせる。

ティラータは真つ直ぐ立ち、初めて口を開く。

「異議を申し上げます」

凜と響くその声は、怯むことなく議場の隅々まで通った。

——ティラータが言葉を綴ろうとしたその時、議事堂の扉が開く。一斉に向けられた視線の先にいたのは。

「ヨーゼル殿……なんとこれは珍しい」

つぶやくユモレスクの顔には、苦い色が浮かぶ。

注目の中、白く長い髭と眉毛を揺らしながら、魔術師の好むマントを手繰り寄せ、空いていた中ほどの席へ移動する。。

袖から見えるしわがれた指は、杖の上に乗せられ落ち着いたようだ。

「ほれ、ワシに構わず、すすめて構わんよ」

まるで茶でも飲みに来たかのような気楽さでそう言うと、老人は何事もなかったかのように椅子に収まった。

彼は、国家魔術師団を束ねる魔術師団長官。つまり、オズマの上司だ。

今でこそ隠居魔術師としての身分にのみ収まってはいるが、その出自は子爵にあたる。

御年八十を迎え、ここ最近はめったに表に出てくることは無かったはずだ。その思いは皆同じなのか、白い老人から目を離せずにした。

ティラータもまた、魔術師団の重鎮、ヨーゼル師の思惑が気になる。

——つい先日偶然顔を合わせたこと、今日の突然の来訪といい、ティラータには彼ヨーゼル師がほんの気まぐれを起こしてやって来たとは、到底思えない。

そして、彼が既に呆け始めたなどという噂も、ティラータには俄かには信じがたかった。

「ほほ、どうしたかの——確かその剣士殿の、陳述を始めておったのじゃろう？ ほれ、続けんかい」

目にかかる長い眉毛を揺らすヨーゼル師に促され、ティラータは頷く。

「……まず、国家反逆の意は無いことを誓います。

先日、魔法障壁に細工をし、穴を開けた実行犯は私ではありません。その主だった者は、元騎兵隊員を名乗る者であることを、先程貧民街で突き止めました。しかしながら、ご存知の通り、その者の仲間である魔術師が魔術を暴走させた為、取り逃がしました。

一連の事件を未然に防げず、犯人を取り逃がした責は負いますが、決して私がこれらに加担していないことを、ご理解いただきたい」

ティラータの言葉に、議事堂の空気が動く。

「ほほ、元騎兵隊員と……どうじやなフェイゼル殿、そのような人物に心当たりありますか」

早速口を挟んだヨーゼルの問いを受け、議員、そしてティラータ、成り行きを見守る国王もフェイゼルに注目する。

その重々しい雰囲気の中、悠然と立ち上がりフェイゼルは答える。
「我が騎兵隊に、そのような不埒者はおりませぬ。たとえ過去に在籍していた者として同じ。それにこの者の言う事が真実と、誰が証明できましよう」

貴族議員の中には、その言葉で露骨な安堵の表情をする者までいる。

それはそうだろう、とティラータは苦笑する。

騎兵隊は、彼ら貴族議員の指示で動くいわば身内だ。そこから反逆者を出したとなれば、議会も責任を負うことを免れない。場合によっては、その発言権も失うことになる。

「ティラータ・レダよ、フェイゼルはそう申しておる。が、そなたの言う元騎兵隊員とはどの誰だ。まさか名も知らぬとは言わせぬ、申してみよ」

議長であるユモレスクは当然、フェイズルの言い分を疑うことは無い。

「本人は『ジン』と名乗りました。それが本名なのかそうでないのか分かりません、それを調べる間もなくこちらへ参りましたので」
ティラータは宣誓台に立ち、一度も視線を俯かせることなく淡々と答えている。それがまた貴族たちの反感を買うことは重々承知している。

だが、ティラータには彼らにへつらい従う必要などないと思っている。彼らに迎合して己の見た事象を偽ることは、彼女の矜持に背く。それは剣聖という正義を根底から覆すことだ。自分ひとりの個人的な事情で事実を偽れば、全ての剣聖たちの存在が危うくなり、それによって定められた正義もまた保てなくなる。

この国での立場を多少悪くしたとしても、今更だと心の中で毒づく。

それに彼らにティラータを止めることなど、はなから出来はしないのだから。

——何故なら

突然議事堂の扉が再び開き、一斉に皆が注目する。

そこには、春風のような爽やかさを伴い、強く艶やかなすみれ色の瞳を輝かせた、黒髪の女性が立っていた。

「アシャナ姫！」

突然の姫の来訪に一同が声を失った中、アシャナ姫は華麗に一礼すると、その愛らしい顔を上げ微笑んだ。

「わたくしの盟約の剣士を、断りも無く呼び立てるとはどういう事ですか？」

鈴の鳴るような可憐な声にはたしかに威厳が漂い、普段の愛くるしい姫は鳴りを潜め、彼女こそが女王であるかのように錯覚する。

コツコツと議事堂を進み、ティラータの横をすぎる。議員たちの中央まで来ると、アシャナは円を描くように座る議員たちを見回す。「彼女は、このわたくしと血の盟約を交わし忠誠を誓う、わたくしのための剣士。イーリアスではありません。彼女の行動は、全てわたくしの意志と考えてくださって結構です。そしてお忘れのようですが——」

アシャナは議長を鋭い目で見つめる。

「彼女は七剣聖がひとり、黄金レグルスの獅子です。その意味、高尚な皆様方にならわたくしの言わんとするところ、お分かりですね？」

固唾を呑むティラータをよそに毅然と立つアシャナ姫は、その場の全てを威圧する存在に見えた。

剣と百合と、すみれと茨 4

ティラータは初めて目を伏せる。

そして瞼の下に鮮やかに甦る、幼き日々思いを馳せる。

決別を誓ったあの日、アーシャと私はまだ子供で、とりわけ幼いアーシャは泣いて――

でも彼女は私が考えているよりずっと強くしなやかで、そして眩しかった。

一年も経たないうちに、彼女はそれを実現した。

私に再び『アーシャ』と呼ばせるため、ありとあらゆる手を尽くし、大人たちを呆れさせた。時にずる賢く、またある時は子どもらしく盛大に駄々をこね、そして状況に応じて王女らしく気高く居丈高に。

そして私たちは再び寄り添い、今度は二人ではなくボルドも加わって、立場は違えど三人共に歩んできた。

再び彼女は私の前に立つ。

その華奢な肩に全てを背負って。

ならば、とギョツと閉じていた瞼を上げる。

私は彼女のゆく道を、害なすものから護る茨となろう。

蔓を這わせ、この身にとげを巻き、身体を張っていかなる敵からもアーシャを護る。

彼女を傷つけるものの足元を掬い、棘で行く手を阻もう、たとえば我が身もともに血を流そうとも。

ティラトウネ
森の守護獅子と呼ばれる黄色いバラに相応しく。その名をもらっ
た己もまた、王女アシヤナの守護者になりたい。

普段とは全く違う凜としたアシヤナ姫に、思わずのまれた議員た
ち。

だが、すぐに我に帰り反撃に出る。その先鋒はもちろんユモレス
ク議長だ。

「——ここは茶会の間ではございませんぞ、アシヤナ姫。只今、重
要な案件処理中ですので、どうかお引取りを」

「——!!」

思わず剣の柄に伸びた手を宙で止め、ティラータは奥歯を噛みし
める。

「くだんの詳細はわたくしがお話しいたします……わたくしがティ
ラータを使い調べさせたのです、わたくしから報告するのが筋とい
うものでしょう。それとも、ここで詳細を語るのに、何か不都合で
もございますか？」

議員たちに緊張が走る。

ティラータの宙に浮いた右手が、アシヤナの言葉で元に戻される。

「——どうぞ、お話し下さい」

渋い表情でユモレスクが促すと、アシヤナは頷く。

「では失礼して、発言させていただきます。まず、ティラータが
偽りを申し上げることには無いと宣言しておきます。彼女はこのイー
リアスだけでなく、大陸全ての国でその身分と権威を保障されてい
る存在です。その代価として正しくあること、中立であること、そ
して正義であることを求められ、なおかつその資質があると認めら
れた者です。もし今ここで、ティラータの証言を嘘であると何の証
拠も提示せず断ずるとしたなら、それは『剣聖』という世界を調律

し安定させる制度そのものに異を唱えるということであり、他の国々と異なる道を我が国が選択するという意味を持つのです。それは、これまで他国と長年にわたり築いてきた友好に、反旗を翻すことに他なりません」

一気にまくし立てたアシャナの言葉に、そこに並んだ全ての貴族議員たちが反論すらできず、黙り込む。

そんな様子を、ティラータは胸を締め付けられる思いで見守っている。

護りたかったひとを、こんな矢面に立たせるなど不甲斐なさでどうにかなりそうだった。

「――否を唱えるものがないと判断し、続けますがよろしいですね？」

アシャナは円を描くように端から端まで見回す。

「では、わたくしどもが調べた限りをお話いたします。まず、ティラータが先程追い詰めつつも取り逃がした者について……名をジン・マクガイアと申しまして、最初に起きた魔法障壁での事件があった日から足取りが分からなくなっている者と一致しております。何かしら事件とかかわりがある可能性が否定できません。騎兵隊の名誉の為にも、このジン・マクガイアの行方をお調べいただきたいのですが、フェイゼル伯？」

アシャナは鋭い口調で、フェイゼルに言葉を投げる。

すっと立ち上がり、フェイゼルが一礼する。

「……御意」

フェイゼルの口からは是の意味が発せられたにも拘らず、その表情はどこまでも強く不遜だ。

「……期待していますよ、あなたの調査に限って『分からなかった』などないと思っていますが」

アシャナは念を押すことを忘れない。

普段のアシャナからは想像もつかない、的確かつ狡猾なやり返しに、貴族の大半が驚き言葉を失っている。

それを分かったうえで、アシャナは尚もたたみかける。

「魔術の暴走の件につきましてですが、これは予め魔術師団との情報交換をいたしておりました。魔術師団からの情報提供を元に、先の障壁の事件に係わりそうな違法魔術師の潜伏先を搜索させております。だからこそ、爆発の折には、迅速な魔術師団の対応が可能だったのです。違いますか、ヨーゼル長官？」

今度はヨーゼル師に向かって問う。

「ほほ、違いないの。姫のおっしゃる通りです。これでその剣士殿が有罪とあらば、わしらも同罪かの？」

ヨーゼルは相変わらず楽しげにユモレスクの方を見る。

「いえ、そのようなことは……」

さすがのユモレスクも、半世紀にわたり歴代の王に仕えてきた老伯爵に下手な事は言えないようだ。

この古くからの重鎮がまさか、アシャナを援護する形になるとは想定していなかったのだらう。そもそもが彼がここに現れること自体、想定外なのだから。

苦い表情のユモレスクだったが、まだ何かを諦めていないのかアシャナに向き直る。

「アシャナ様のおっしゃりたい事は分かりました。ですが、実際に賊を追い詰めておきながら取り逃がしたのも事実。そして魔術の暴走とはいえ、怪我人を多数出したのもまた事実。これをどう、責任を取られるおつもりか？」

その苦し紛れの言葉に、ティラータはさすがに呆れるのだが、ここで自分がしゃしゃり出てはまた混乱すると思い、黙ってアシャナ

の言葉を待つ。

アシャナの裁定に、全てを託す。

貴族議員の中には、その理論が矛盾していることに気付いているのかいないのか、勝ち誇って罰をと呟く者もいる。

アシャナの口角が上がる。

「それはもちろん、ティラータに多少なりとも責を取らせませうわ。

彼女には、ファラの大祭が始まるまで、謹慎させます。」

「ほう、謹慎ですか」

議員たちが、その言葉に賛同する。

だが、つぎに発したアシャナの言葉ですべてが覆る。

「はい、謹慎です。剣術師範はおるか、犯人の捜索にも行かせず、このわたくしのそば近くで責任をもって謹慎させます……それで宜しいですね、お父様？」

アシャナは段上で静かに成り行きを見守っていた父王を、初めて仰ぎ見た。

「良い、私が許可する」

その王の言葉に、ユモレスク伯爵が息を呑む。

そして、フェイゼルもまた、口元を歪ませる。

小娘と思っていたアシャナ姫に、まんまとやられたのだ。悔しくないわけがない。

これで、ティラータの反逆罪は認められず、謹慎とはいえアシャナの側からティラータを引き離すことすら、当のアシャナに阻止されたのだ。

ティラータは心の中で胸をなで下ろし、晴れ晴れとこちらを振り向くアシャナに、頷いて見せる。

——まさか、アーシャに助けられるとは思っていなかった。

ティラータは微かに己の手が震えているのに気付く。

いつもなら己の背に護るはずのアシャナが、ティラータの前に立

ち、降りかかる火の粉を身を挺して払いのけたのだ。

護られる不安、自分を護る大切なひとへの心配が、こんなにも重く苦しいものだなんて、ティラータは知らなかった。相手がアーシヤだからこそ、更に不安は尽きない。

日頃、アーシヤもまた、同じように自分を案じているのだろうか……ティラータは初めて知るその感覚に戸惑う。

「陛下、もうひとつお願い致したい」

苦渋に満ちたフェイゼルが、国王ミヒヤエルに懇願する。

「申してみよ」

フェイゼルは深く礼を取ると、あえてアシヤナが触れずに誤魔化した事について口にした。

「西の森の警護についてでございます。ティラータ・レダが謹慎となりますと、西の森しいては魔法障壁の守りが手薄となります。ここは、我ら騎兵隊にその任をお任せいただきたいのです」

ティラータひとりで入っていた森に、騎兵隊が踏み入れる。それはティラータにとって、実は最も避けたい事態だ。

ティラータの不在時に、細工をされては手の打ちようが無い。

「陛下……」

ついティラータが遮る。

「黙れ、無礼者。陛下のお言葉を遮るなど」

「よい、フェイゼル。ティラータもだ……」

ティラータは我に返り、口を噤む。

「西の森へは、限られた時間のみ、しばらくはフェイゼルに任せよう。だが、あそこは危険な森だ。狼が多く住み着いて来る者を拒むそうだね、ティラータ？」

ミヒヤエル王の言葉に、訝しく思いながらもティラータは頷く。

「何か危険があれば、すぐにでも騎兵隊は引かせる。それで良いな？」

フェイゼルにそう言って、限定的ながらも王は騎兵隊が西の森へ

入ることを許可した。

——狼。

ティラータは、西の森で会った黒い大きな狼を思い出す。そしてその主たる男のことも。

——陛下は、あの男と繋がりがあるのだろうか。

ミヒヤエル王と剣匠ベクシーが古くからの友であることを考えると、ここ最近のシリウスの出現について、王とベクシーが係わっているとしても不思議ではないと、ティラータは気付く。

ならば、王は何か策があって騎兵隊の立ち入りを許可したのだろうか。

結局、ティラータは罪に問われることはなく、嫌疑を解かれた。アシャナは議員に淑女らしく一礼し、ティラータを促して議事堂を退室させる。

ホッとして浮き足立つ心を押さえつつ、議事堂を出ようとしたそのとき——

「次の審議に入る……魔術師団次官アレヤ・オズマ、入れ」
ティラータは冷や水を浴びせられたような気持ちで振り返る。

「まてっ……」

しかし、目の前で無情にも重厚な扉が、大きな音を立てて閉められる。

——何故、オズマ殿が？

ティラータは言葉なくアシャナを振り返る

アシャナは黙って首を横に振る。

「そんな……なんで、オズマ殿が？」

「ティラータ、ごめんなさい。私にはあなた一人しか助けられる術がないの」

アシャナは申し訳なさそうに、ティラータの手を取る。

「じゃあ、オズマ殿は……」

「大丈夫、あなたを無罪としておいて彼女だけ有罪にはできないわ。でも、別件を言われたらどうにも……でもねそのためにヨーゼルが来てるのだから、きつと悪いようにはならないわ」

ティラータはそのアシャナの物言いに、首を捻る。

「別件？」

アシャナが複雑な表情になる。

ひとつ溜息をついてから、口を開く。

「あのね、障壁の件で捕らえた捕虜に対しての、その……無許可の拷問というか」

それを聞いて、ティラータが天井を仰いで溜息をつく。

「……そうか、それで」

——これが、ヨーゼル師の言っていた『隙』か。

オズマが拘束されるのは、こちらにとってかなりの痛手だ。

障壁に穴を開けた魔術の解析は、オズマほどの者でなければ出来ないと聞いている。解析がすすめば対策もいろいろ講じられる。

ティラータは祈るような気持ちで、固く閉ざされた議事堂を睨む。これ以上、この国を乱そうとする者の好きにさせるものかと決意を新たに――。

剣と百合と、すみれと茨 5

謹慎を言い渡されたティラータは、議事堂を出てアシャナと共に王女の私室まで戻る。

二人はどちらからともなく抱き合った。

ただ無言で抱きしめ、互いの無事と舌戦の勝利を噛みしめる。

そこへ扉を叩く音と聞きなれた声がしたと思えば、主であるアシャナの返事を待たずにその者たちが入ってきた。

「姫、レグルスよく無事で」

少し垂れた目尻を更に下げ、溜息とともにボルドが呟く。

「すまないボルド、心配かけた……レイチエルも」

言いかけて、掴まれた肩をガクガク揺らされたので、次の句が出ない。

「し、心配したんだからね！」

「レイチエル、わかったから」

揺さぶられるティラータを、アシャナとボルドが生暖かい目で見ている。止めてくれと心で思ったティラータだったが、その訴えは聞き届けられなかった。

——『心配かけた』と、ここ最近何度口にしたことが。

無事を喜んでくれる気のおけない仲間を前にして、ティラータは心が温かくなる。そして、アシャナに向き直って微笑む。

「アーシャ、ありがとう」

アシャナの助けがなかったら、どうなっていたのかティラータにも分からない。

そして凜々しいアシャナの姿を見せられ、彼女を守護する剣士としてどんなに誇り高かったことが。万感胸にせまり、かえって言葉が出ない。

アシャナもそれを分かってか、目を潤ませながらも大きく頷いて笑って応えた。

「私たちは、互いを護るのよ？ ティラータは剣で、私は王女という上に立つ者として。いつまでも泣いて駄々をこねる子供ではないわ」

「本当だ。私たちはもう、あの頃のような何の力も無い子供じゃない」

ティラータはアシャナとボルドを見る。

したたかに貴族たちと渡り合い、第一王位継承者の王女として立ちはじめたアーシャ。

近衛副隊長として陛下と王女の側に在り、貴族としての地位はなくとも多くの兵を動かすことのできる立場となったボルド。

そしてこの国に在りながらも、一国の利益やしがらみに囚われない立場を得た自分。

だからこそ行動を起こさねばならない。

「アーシャ、謹慎とはなかなか面白いことを思いついたな」

「でしょ？ これなら誰はばかりなくティラータと打ち合わせができるし、効率よくボルドたちと繋ぎやすいわよ、我ながら強引だとは思ったけれどね」

ふふふ、と笑いながらアーシャはしたり顔だ。

「しかし、アーシャ、オズマ殿の状況次第では……」

「もしかしたらアレルヤは少しの間、拘束されるかもしれないわ」
アシャナの想像では、そう軽くない処罰が下されるのではないかということだ。軽くて自宅軟禁、重くて禁固一ヶ月。

「禁固は少々まずいな……」

ティラータは思わぬ協力者の喪失に、表情が曇る。

「例の違法魔術師とやらの行方を追うのは、どうするのよ？ ティラータしか会ってないのだから、当然アレルヤを当てにしていたのに」

「オズマ殿を頼れない今、地道に捜すしかないだろうねレイチエル。あとはジンという男か……」

貧民街で死亡した男達の身元やジンの行方を追うことでしか、魔術師へつながる道はない。

「ジン・マクガイアね」

レイチエルがその名を聞いて眉を寄せる。

「いろいろと調べたのよ、あいつどうやらティラータの事を何人かに聞いたりにして調べていたらしいの」

「……それは、その者からしたら最大の障害という意味ですか？」

ボルドの言葉に、レイチエルは苦笑する。

「んゝそうなんだろうけど……それにしてもしつこかったんで、懸想でもしてるんじゃないかって弓射隊の仲間が言うのだけどね」

「けそう？」

——ははは、とティラータが笑う。

「心当たりでも？」

ボルドのいぶかしむような問いに。

まあ、ある意味あれは懸想かもしれないと、自虐的な気分になる。

「……なんとなくだが、殺す相手としての執着というか、何というか？」

「それってまさか、ジン・マクガイアの目的が反王制とか魔法障壁とかより、ティラータ……なんて冗談だよな？」

レイチエルとアシヤナが女性らしい生理的嫌悪を滲ませながら、
どうなんだとティラータに詰め寄る。

「ジン自身はそうみたいだが、組織として行動しているようだから
両方じゃないのかな？」

尚悪いとばかりに二人が溜息をもらすのを、ティラータは首をか
しげながら更に爆弾を落とす。

「だから一応、こちらに寝返るかと思つて誘いをかけてみたんだが
……」

「はあっ?! 何考えてんのよあんた、まだ素性も知れない奴に
!」

レイチエルが叫ぶ。

「だって、私を倒すことの方がジンの中で上回るのなら、別にあち
らに居なくなつていいと思つたし、何より向ここの戦力を削げれる
だろう?」

「いやいやいや、あんたがジンに倒されるとは思わなければ、寝
込みを襲われるとか不意打ち喰らうとか……怪我したら元も子もな
いでしょう!」

ボルドがレイチエルの後ろで、コクコクと頷いている。

アシヤナまで呆れたように目を丸くしているのに気付き、ティラ
ータはようやく自覚する。けっこう楽しそうな状況だと思つていた
自分がいたのを。

「主義主張があつてあちらに雇われているようじゃなかった。報
酬さえ与えれば、こちらに回つて良い戦力になると思つただけど
ね」

「報酬は、いつでもあなたを狙つて襲つてもいいという権利ですか、
レグルス?」

「うん、そう」

そのあつけらかんとした返事に、ボルドの頬がピクリと引きつる。
「あんたホント馬鹿！」

レイチエルは開いた口が塞がらないといった調子で、アシヤナはティラータらしいと苦笑する。

「もつとも、ますます酷い目にあわせて殺したくなったと断られたが」

「そりゃそうでしょ！」

「だから次に会ったら必ず落とし前はつける。四度目はない」

ティラータの一転して冷たい眼に、その場が固まる。

「ちよつと待ってください……四度目？」

ボルドが聞き返す。

しばし考えてから気付くティラータ。

「言い忘れてた。この腕に受けた矢を放ったのも、ジンだったようだ」

「そんな大事なことを忘れないでください……しかしそれならば、あれ程搜索の手を伸ばしたにもかかわらず、侵入者の特徴はおろか手がかりすらつかめなかったのも領けますね。今となれば当然あの事件も一連の流れと分かりますが、あの時点で騎兵隊を疑うわけにもいかないでしょう」

アシヤナ姫も同意する。

「そうね、できればもう少し早く分かればよかったのでしょうけど……仕方がないわね、その件も含めてあちらを牽制する材料としましょう」

そこへ隊長からの伝言を託された、近衛新兵のベルナールがやってきた。

「アレルヤの処遇が決まったようね、いいわベルナールを通してちようだい」

ベルナールからの報告は、やはりオズマ魔術次官の処罰についてだった。

カナン隊長からもたらされた報告は、ティラータたちの期待を裏切るものだった。

——禁固二十日。

罪状は捕虜への未許可の干渉。

「は、二十日？ そんなに長く？」
レイチエルが叫ぶ。

——女神ファラの大祭まであと十八日。
やられたな、とティラータは心の中で舌打ちする。

「アーシャ」
分かってるとアシヤナも頷く。

「いくらあの悪癖が以前から問題だったとはいえ、ここのところ大人しくしていた——もといそんな暇のなかったオズマ殿を、今回のような未遂に終わった用件で強引に処罰するなどさすがにおかしい。とすれば、オズマ殿を我らから引き離すの理由はひとつ」

「魔法障壁を中和する石版の解析をされたくない？」
レイチエルに頷く。

「あとひとつ、オズマ殿の魔力追跡能力で、石板の魔術を作り上げた魔術師の居場所をつきとめられたくない、ということだろう」

ボルドとレイチエルは以前、オズマが剣術場で見せた能力を思い出す。

魔力の位置を感知し、ティラータの正確な位置を把握してみせたのだ。そのような能力は、他には知らない。

「つまり、オズマに探られたくない人物が、議員たちの中にいるってこと？」

レイチエルが乾いた声で笑う。

「レイチエル、ボルド、覚悟してほしい。私たちは倒してはならない相手を敵に回し、尚且つ彼らの企みを阻止せねばならない」

この国に深く根ざし、複雑に絡みついた権力を持つ者たち。単純に排除できない相手——だが。

ティラータは腰の愛剣の柄に手を置き、静かに言う。

「今、何の準備もなく魔法障壁がなくなれば国は混乱する。しかも奴らはその先に傭兵くずれのならず者を用意している。これは単に国を憂いその先を見据えた上での主義の違いなどという、きれいごとでは済まされない。無為に民を傷つけ、国を私欲のために滅ぼし混乱を招こうというのなら、私は彼らを敵と判断せざるをえない」それはイーリアス剣術師範長としてではなく、剣聖レグルスとしての言葉だ。

ティラータはアシヤナを見る。

それを受けてアシヤナは引き継ぐ。

「まずは、魔法障壁の中和を阻止します。先の事例とアレルヤの解析等で、満月の作用が大きく係わっていることが分かっているわ。次の機会は恐らくファラの大祭中でしょう」

今回は四年に一度の大祭だ。言い知れぬ不安と閉塞感を払拭せんがため、多くのものが楽しみにしている。

障壁が破壊され祭でにぎわう中の襲撃は、たとえ死傷者を出さずとも大祭は失敗に終わるだろう。この国の民は、魔法障壁の護りは揺るぎない自分たちへの恩恵と信じて疑わないのだ。

もし障壁がもたらす安寧が、砂上の楼閣と知れたら——

すでに綻びは始めているこの国は、いったいどうなるのか。

ファラの大祭までは女魔術師の地道な搜索と、騎兵隊ならびにユモレスク伯爵の動きを逐一監視することになった。それと同時に、祭の警護をぬって障壁の対応ができる要員の確保を急ぐ。

なるべく反王制側の息がかかってない兵のを選ばねばならない。これはカナン隊長を頼らざるをえないだろう。

あとは――西の森。

大祭前に障壁へ再び何かを仕掛けられたら、防ぎようがない。いくら人を寄せ付けない森とはいえ、全く道がないわけではないのだ。

そして陛下が何故か騎兵隊が森に入ることを許した……。

ティラータが今後の対応を、ボルドとレイチエルと確認していると、アシャナが思いつめたような顔で割って入ってきた。

「ボルド、近衛を使ってアレス公を見張ってちょうだい」

「姫?!」

ボルドが驚きアシャナ姫を見るが、その唇はきゅっと閉じられ決意がうかがえた。

そしてもうひとり、ティラータを振り返る。

目を伏せ、姫の決断を受け入れている。

「よろしいのですか?」

アシャナとティラータ二人にとって、アレス公がどれほど特別な存在なのかボルドにはよく分かっている。

「叔父様は変わられたわ――それに公の妻はユモレスク伯爵の娘。それゆえ義父であるユモレスク伯の地位が、貴族たちの中で堅固なものとしているのは事実。これを好きにさせている公のお考えは分からないけれど、今はそんな事言っていられる状況ではないもの」アシャナは既に覚悟しているようだった。

「それにね、彼らがこの国を倒そうと本気で考えているのなら、その原動力って何だろうね？　公はどんな立場なのかしら？　私は知りたいの、叔父様はどうしたいのか……」

避けて通れはしない問題だった。

テイラータもまた、覚悟をせねばならないのだろうと悟る。

左腕の傷跡をさすり、思い出す。

薄暗い闇の中でのアレス公を。

閑話 2 ある魔術師の非日常的、日常その 2

イーリアス宮廷魔術師団、次官アレルヤ・オズマの収監から三日。普段は何も目立った仕事らしい仕事をしないという、実質引きこもり状態の魔術師団トップのオズマだったが、いざ居なくなると困るようだ。オズマを支えていた自負をもつ魔術師たちだったが、三日もすれば何をしたらよいのかと右往左往する者が出始めた。

オズマが自室でもある魔術師団の実験室からいなくなって以来、部下である魔術師たちはやる事がない。主のいなくなった埃と妖しげな道具や薬、本が積み重なった足の踏み場もない部屋は静まり返っている。

何をするでもなく、途方にくれた下っ端魔術師たちが呆けている。普段の仕事といえば、食べることも忘れ研究と実験に没頭するとつばい上司の食事の世話から、失敗した実験の後片付け、そのついでに頼まれる調べものなどなど。

がちゃがちゃと落ち着きのないオズマからひっきりなしに用事が発生していた。そしてそれが日常となり、気がつけば彼らの仕事になっていたのだった。

そんな情けない状態の魔術師たちを見かねて、半ば隠居状態だったヨーゼル師が姿を現した。

「あきれた状態じゃな……オズマが指示した事は進んでおるのか？」
「思い思いに休憩していた魔術師たちが、突然の魔術師団長官のヨーゼルの登場に驚き固まっている。」

「ここしばらくは魔術師団だけでなく、貴族議会や宮廷行事にすら顔を見せなかったのだから、当然の反応だろう。」

「ヨーゼル様、次官には特に何も指示は受けておりません」

傍らにいた若い魔術師が、控えめに答えた。

それを受けて少々考えた様子の老人だったが、すぐに何かを思い返して指示を出す。

「遣いを頼む」

ヨーゼルの言葉に、若い魔術師は素早く部屋を飛び出していった。

ヨーゼルは散らかった実験室にひとり足を踏み入れ、杖の先で床に散乱した魔道書をずらす。

埃と落ちた薬品の色で変色した石の床には、かすかだが白い筋が見てとれた。

白い老人は目を覆うほどの垂れ下がった眉を片側だけ持ち上げ、歯の抜けた声で笑う。

「いらぬところは似るもののよ、保身にだけはよく知恵が回りよる」

もはや見る影はないが、かつては自分の仕事部屋だった実験室。

ヨーゼル師は、よくもまあ汚してくれたものよと嘆く。

何が落ちてるのか分からないオズマの自室は危険だからと、終いには下っ端魔術師たちに連れ出されたのだった。

オズマと同時に謹慎を余儀なくされて、ようやく三日。ティラータはアシヤナ姫の護衛と称して、一日のほとんどをここ姫の自室で過ごしていた。

アシヤナ姫はといえば議会で承認されたのを良いことに、日頃会ったのを制限されていたティラータとの時間を満喫しているようだった。それはもうご機嫌で、あれこれとティラータに世話を焼こうと茶を自ら入れたり、ティラータに新たな服を作らせたりと忙しそう

そんな二人の姿に、そろそろお付の女官たちの堪忍袋の緒が切れそうなのはご愛嬌。

今日もティラータの日課となりつつあったお茶の時間。アーシャを前に慣れない華奢な装飾の椅子に座らされ、ティラータは苦笑いを浮かべつつカップに口をつけていた。

「ねえ、今日は面白い噂話を仕入れたのよ」
アシャナ姫はのご機嫌は、ここ三日うなぎ登りである。

噂話ってどこで仕入れるのだろう、と疑問に思っていると既に話は始まっている。

「それでね、パワーてなってガタンてしたら、獣がフーッてなったからギヤーってなったみたい！」

——パワーでガタンでフーがギヤー？

「ア、アーシャ？ ……意味わからないんだけど？」

目を瞬き首をかしげていると、アーシャが頬をふくらます。

「もうっ聞いてなかったの、ティラータ？ あのね、魔術師団の部屋の前でね、怪奇現象が起こっているみたいなのっ！」

テーブルに身を乗り出して言うその目は、好奇心で輝いている。

それはもう、全開に。

「ええと……そうか」

「なあに、その薄い反応！ 信じてないのね？ もう何人も目撃してるのよ、しかも深夜よ？」

どうしてこの面白さが分からないの、と責められるティラータ。
「それ、近衛に言った方が早いのでは？」

怪奇現象ではなく、不審者事件では？ と言っても聞く耳を持たないアシャナ。

「きつと謂れのない罪をきせられて、命を絶ったという女官の霊が……」

そんな馬鹿なとティラータの嘆きにも屈しないアシャナの様子に、まだ続くのだろうかこれはと内心あきらめかけた時、ティラータに救いの手が差し伸べられた。

「魔術師団ヨーゼル師からの遣いが来ておりますが」

近衛に伴われた女官が、アシャナにそう告げる。

「わかったわ、通してちょうだい」

女官と入れ替わりで入ってきたのは、何度か出会ったことのあるオズマがよく使い走りにする若い魔術師だった。

「王女殿下に、わが魔術師団長官のヨーゼル師から伝言にございます。あの……剣術師範長殿をお貸し頂きたいのですが」

その言葉に、ティラータとアシャナは顔を見合わせた。

いったいあのご老人はどういった裏技をもっているのかと、ティラータは少々頭を悩ませる。

謹慎は解かれていないが、いとも簡単に外出許可が下りたのだ。どう考えても議会側にとっては、自分と彼女を会わせるのは好ましいと思えないのだが。

牢番はいかなる部署とも接点がないよう、隔離された人間が就いている。たとえそれが剣術師範長という剣の師であっても、魔術を統括する魔術師団長官であつてもだ。

——の、はずなのだが。

ティラータは今、牢番に導かれてオズマのいる独房の前に立っていた。

「では何かありましたら、お呼びください」

初老のやる気の無い牢番は、そう言つて鍵を開けると元の道を戻つていく。

ここは捕虜などの重犯罪者が入る牢とは異なり、多少小ざれいに

してある。廊下との間は鉄格子ではなく壁で個室となっていた。

オズマは罪に問われたとはいえ、謹慎に近いものがありさほど酷い扱いを受けるわけではなさそうだった。

「オズマ殿、私だ入るぞ？」

ノックをして重い木の扉を押し開けると、石造りではあるが床にはラグが敷かれて簡素ながらも木枠のベッドも用意されていた。

「オズマ殿……？」

どういう訳か、中には誰もいなかった。

ティラータは入る部屋を間違えたのかと思い、慌てて外に出ようとして思い直す。

室内には木の机があり、そこには魔術書らしき分厚い本。その脇のベッドには人が寝起きた後のシーツの皺。そして床には、どこかで見たとような白い砂がかすかに落ちていた。

———どうということだ？

ティラータが頭を悩ませていると、ふいに石の壁の一面が揺らぐ。かと思えば次の瞬間には光って壁が飴のようにぐにやりとめくれ落ちた。

真っ黒い不気味な穴が開いたかと思えば、生成りのローブに包まれた尻がそこからひよっこり飛び出す。

次に貧相な骨ばった足が一本、後ろ向きのまま恐々出てきた。すると次の瞬間。

「あ、ひゃああっ！」

ドスンという鈍い音と共に、穴から落ちてひっくり返ったのは、この牢の住人アレルヤ・オズマその人だった。

「あ、あああの……どうして、ここに？」

床に後頭部をつけたまま、相変わらぬ気の抜けるような声を出

すオズマに、ティラータは盛大に溜め息を吐く。

「オズマ殿こそ、いったい何をしているのだ？」

「み、みみ見たんですか？」

慌てるオズマに、ティラータは頷く。

「ひああつ、おおお願いです、なナイシヨにして下さい」……ちょつと忘れものを取りに」

ティラータは再び項垂れ溜息をつく。

「で、つまり忘れ物を取りに、自室の魔術師団の部屋に取りに戻っていたと？」

ようやくかいつまんで話を聞きだしたティラータは、呆れながら確認する。

当の本人はようやく起き上がって髪を整え、ばつが悪そうに薄ら笑いをうかべながら頷く。

「だが確か牢には魔術を封じる細工がしてあるのではなかったのか？　いったいどうやって……」

「ああ、ソレは、私が作ったモノですから……あの、解除するのは簡単です」

ティラータはこめかみに手を当て、苦悩の表情を隠しきれない。

「ただ大丈夫です、誰にも見つからないようにいつもは深夜に、い移動してますので」

丸眼鏡をずりあげ、いつになく自信満々だ。

「……」

——なるほど、コレが噂の『パワーでガタンでフーがギャー』の元凶か！

ティラータの額に薄っすらと青筋が浮かぶ。

「……オズマ殿！」

「え、えええ？　なな何かマズイ事でもっ？」

素早く椅子の後ろに隠れる姿は、小動物のようだ。

「……いや、頼むからほどほどにな」

がつくりと敗北感たつぷりのティラータを見て、オズマは意味が分からぬといったように首をかしげている。心配して損した気分なのはどうしてだろうと、ティラータは自問する。

結局オズマを拘束することなど、誰にもできないということだ。

詳しく聞けば、移動できるのは自室に準備された魔方陣との間だけでなく、城のいたる所にオズマの魔法の痕跡があり、多少の難しさはあるがほぼ何処にでも出られるらしい。

なんて非常識なひとなんだ。それがティラータの素直な感想である。

三食昼寝つきで綺麗な部屋をあてがわれたようなもので、何の不どころか煩い部下が来ないだけ上等と言い切るオズマに、ティラータは半ば呆れつつ牢を後にした。

魔法障壁を中和した魔術の解析は、続けて行ってくれているのだ。文句は言つまい。

ティラータは何をしにオズマ殿への面会に行ったのか分からぬまま、どっと疲労感を抱えてアシャナの元へ帰っていった。

獣の王 1

猟を生業とする者でさえ決して深く立ち入らぬ西の森で、無数の蹄の音と幾人もの悲鳴が響きわたる。

常には不気味なほど静かな森が、明らかにいつもとは違う顔を見せる。

イーリアス城から西の森入口まで、馬を走らせれば一時間ほどだ。その森の手前には豊かな森からの恩恵ともいえる川が横たわり、周辺にはいくつか小さい集落がある。

細々としたものだ。たが村人は森からきのこや薬草、わずかばかりの動物などを得て、主には畑に麦を植えて暮らしていた。

そんなのどかな村々を、ここ数日ものものしい集団がひっきりなしに早馬で駆け抜けていく。

尋常ではないその荒々しさに、細々と暮らす村人たちが息をひそめて見守る。

「邪魔だ、どけどけ！」

集落の中央を土煙上げながら駆る、馬上の鎧の胸には白い百合と交わる剣。

村人たちがそこにいても手綱を弛めようとはしない。その様子に恐れをなしてほとんどの村人たちは家の中にこもり、畑仕事どころではなかった。

いったい西の森で何が起きているのだ。

時折城へ戻る者のなかには怪我を負った者や、恐怖に引きつる顔をした者がいた。

それがさらに不安をかきたてるのだろう。

「なぜだ、既に一週間になろうというのになぜ障壁に辿り着けぬ」
表にこそ現れないが、内の苛つきは頂点に達していた。

ひとときわ煌びやかな白い鎧をまとう、騎兵隊長アレク・フェイゼルは馬上から部下を見下ろす。

無表情に加えてそのグレイの瞳がいつそう冷たさを強調させる。

「申し訳ありません。障壁どころか中間地点にあるとされる泉にすら、いまだ誰ひとり辿り着けません」

「原因は？」

「……狼の群れに阻まれております。少しずつですが調べましたところ、どうやら個体数は二百を超え……いくつかの群れが集まってきているようです」

フェイゼルの冷たい表情に変わりはないが、部下たちには場の空気が凍ってゆくように感じられた。

「地元の猟師を連れて来させる」

「は、只今」

フェイゼルは側に控える副官にも指示を出す。

「腕の立つものを集めろ、私が行く。それから議会に報告を。この状況ではあの女がきちんと守護の任にしていたのかも怪しい。その上で魔術師の派遣を要請する」

フェイゼルは部下が指示通りに動きだすのを馬上から確認し、巨大な塊となって横たわる西の森へと目を移す。

感情を表に出すことの少ないフェイゼルの苛立ちが伝わるのか、馬が怯えたようにいなくな。

西の森は常に誰も入らせぬよう立ち入り禁止となっではいるが、森に入ること自体不可能ではないはずだ。

フェイゼルは考えられうる可能性全てに頭をめぐらせ答えを導こ

うとするが、思うような成果は得られそうもない。だが、この状況をただ指をくわえて眺めているわけにはいかない。これを最大限に利用し、己の思惑を成す材料とすればよいのだ。

フェイゼルは気を引き締める。

ほどなくして近くの集落から獵師が連れて来られた。

年老いた男とその孫くらい若い男の二人だった。身なりはたいそうみすばらしく、使い古しところどころ継ぎはぎしたズボンに擦り切れた革の靴。元は白だったのか判断のつかない厚手のシャツに綿の入ったベストを着ていた。二人共にほぼ変わらぬ姿で、髪は痛み汚れていて、伸ばされたヒゲがかるうじて貧相に痩せこけた頬をこまかしている。

滅多に崩さない顔をしかめ、フェイゼルが二人の前に降り立った。

「そのほうらは、この森で獵をしておったのか？」

その質問に獵師の二人はおずおずと答える。

「はい、入口付近のみですが兎や猪などを……歩いて十分、森の外が目視できるところまでと言われておりましたので」

「……誰にそのような事を？」

「は、はい。この森に毎日来られる『森の民』の血を持つお方に……」

……」

——ティラータ・レダか。

フェイゼルは悟り、その表情がすつと冷える。

年老いたほうの獵師が、何か悪いことを言ったのかと青ざめる。

「もうひとつ聞くが、獵で狼と遭遇した経験はあるか？」

二人の獵師が揃って首を横に振る。

「——本当なのだろうか？」

念を押す言葉に、若い方の獵師が慌てて肯定する。

「本当でございます。いつも罽をしかけてかかっていれば捕るだけの簡単な獵です、それに狼は森の奥ふかくにいて、めったに森から出ることはありません」

「では、この一週間我らが行く手を阻まれるほどに狼が出没するなど、これまでなかったと？」

フェイゼルの言葉の意味すら分かってないのか、不思議そうにながらも獵師たちはしつかりと頷いた。

「そうか、分かった。もうよい」

そのフェイゼルの言葉にほっとした様子の獵師たち。てつきりこれでお役御免とばかりにその場を辞そうとして、呼び止められる。

そして青ざめることとなる。

「そなたらも知っておろうが、西の森は今も昔もなんびとたりとも入ることを禁ず、と法で決まっておる。唯一、陛下ティラータの許可をいただいた者だけが入ることを許されるのだ。あの不埒者がお前たちに何と言ったかは知らぬが、今後いつさい森へ侵入すること罷りならんよいな？」

老人のほうは半ば諦め顔だったが、若い獵師のほうは愕然としつつも悔しさを滲ませていた。

「……そんな、それじゃ俺たちはどうやって生きて……」

凍るような眼差しが青年に向けられる。

「……おい、やめろって、すいません、まだ若くて世間知らずなのです、どうかお許しを」

老獵師が慌てて若者を制止し、抱え込んで共に跪き、目の前のいたく身分の高そうな貴族の男に頭を下げる。

フェイゼルが名乗らずとも、彼が自分のような者と本来ならば口をきくような人物ではないことを、老人は本能で悟っていた。

「本来なら罪に問われるところ、今日の協力に免じて不問にいた

す。以後気をつけることだ」
フェイゼルはそれだけ言っと、獵師たちに目もくれず立ち去ろうとした。

跪く二人の前を通り過ぎようとして、ふとフェイゼルが足を止める。

「……黒い巨大な狼を見たことがあるか？」

年老いた獵師の肩が揺れる。

「いえ……まだ一度も見たことはございません」

「——まだ？^{それ}狼が何か知っているのか」

「く、黒い大きな狼は、女神ファラの従者として獵師には伝説として言い伝えられております。地を這う獣の王だから、決して狩ってはならないと……」

「くだらぬ」

それだけ吐き捨てるように言うと、今度こそフェイゼルは去っていった。

フェイゼル隊長は重装備の鎧を外しながら、副官を呼びつける。

「人選が済んだら鎧を外させろ。馬で入るゆえ、鞍もなるべく装飾を外し軽くする」

その言葉に、副官が一瞬言葉を失う。

「は、しかし……。危険なのではございませんか？ 相手は狼です、牙を防ぐには鎧のほうがよろしいかと」

「馬に負担が大きすぎる。道なき道をゆかせる上に、狼に襲われれば機敏に動けまい。逃げ遅れればお前たちとて容赦なく置いてゆく」
「……は、分かりました」

青ざめながら指示にむかう副官を見て苛立つ己に、フェイゼルは自嘲する。

そして同時に近衛副隊長として、カナンの片腕となったボルドの顔を思い出していた。

本来ならば、平民同様の爵位しかない名ばかりの貴族であるカナンの下につくような立場ではない、こちら側にいたはずの男――。

今となつてはどうにもならない『ばかげたことを』を、と思い直し身支度を終える。

最小限の防具に減らし剣を腰に収めると、居並ぶ騎兵隊の精鋭十名の前に立つ。

軽装に変わつて直立する部下をながめて頷く。

「では隊列を組み、これから森への突入を開始する。邪魔するものは排除することを許す」

フェイゼルの号令を元に、騎兵隊が動き出した。

獣の王 2

ばかりと空いた木々の間から暖かな日差しが差し込み、泉に反射してあたり一面を照らして光輝く。そして寄り添うようにそびえ立つ楠の枝葉からも、穏やかな木漏れ日が重なる。

森の入口での喧騒とはうってかわって、西の森の中はいつもの穏やかさが保たれ、鳥達もいつもどおりさえずり、空を行き交っている。

楠の太い幹にもたれかかり、午睡をむさぼる男がひとり。

ふと慣れた気配に片目を開ける。

「……………どうした？」

近づく気配は答えることなく音もなく近寄り、その黒い巨体を横たえ、組んだ両前足の上に顎をのせた。

「退屈してきたか……そろそろ本隊が来るころだろう、それを追っ払えば終わるだろうから辛抱しろよ」

シリウスは相棒を慰める。

耳をぴくぴくと動かすだけで、そつばを向いたまま動かない。

二人——いや、一人と一匹は再び目を伏せ、しばし退屈を紛らわす。

そよ風が頬をくすぐり、適度な暖かさで木漏れ日がゆれる。すんなりと夢の中に入れそうな、昼寝にはうってつけの日だ、とシリウスはしみじみと思う。

「ああ、いつそのこと、ここに住みつくかな」

あまりにも久しいのんびりとした空気に、思わずそんな呟きももれるのも仕方のないことだとひとりごちる。

隣でも同意するかのように、機嫌よく咽をならしている。

「おまえは半分本気だろう、シャレにならん」

相棒の目的がのどかな森と泉ではなく、泉の主である金の髪の娘とすぐにわかり、笑いがこみ上げる。

「おまえが尻尾を振ってるの初めて見た……そんなに懐くなんてなくくつと笑うと、不満なのかヴラドもひと吠え。

シリウスは相棒の狼が何を考えているのか、手に取るようにわかり呆れる。

——ガウ

もうひと吠えして、再びそっぽを向いてしまった。

いったい誰の半身だおまえは、と心の中でつつこむシリウスだった。

「だがまあ、それも悪くないか……むしろ気楽な放蕩生活のほうが俺の性分だ。そうだろう、ラスフォン？」

シリウスが視線を森の奥へと投げると、茂みをかき分けて、壮年の体格の良い男が現れた。

「ご冗談はやめてください。私の心臓を潰すつもりですか」

「おまえの心臓がそんなに弱いとは知らなかった。で、いったいこんな所まで何の用だ」

己よりかなり年上の男に対して、シリウスは不遜な態度だった。それでも相手の男もそれが当然であるといった風に、気にする素振りもない。

「客人をお連れしました」

その言葉にシリウスは慌てて起き上がり、振り返る。

気配を全く感じていなかったことに、自然と表情が厳しくなる。

大柄の男の後ろには、思ってもいなかった人物が立っていた。

「久しいなシリウスの——相も変わらず不遜で不真面目。まったくもって不愉快だ」

「おまえに言われたくない……しかし、ずい分と早いお出ましじゃ

ないか？」

シリウスの前に現れたのは、同じ剣聖の金の欠月カベラのデューク・デラ・デューンだった。

森の木漏れ日を浴びた髪は金に輝き、細く整った顔は綺麗としか言いようもない。だが瞳は鋭くシリウスを見据え、出自の王族という立場を忘れさせない気品が漂う。腰の両脇には、見覚えのある細身の剣が二振り。

シリウスの表情が常になく引き締まるのを、側のラスフォンが驚きをもって見守る。

デュークは剣匠ベクシーの退位と、次代のグレカザルとの引継ぎの立ち会いが目的だ。だが師でもあるベクシーの容態を心配したグレカザルの依頼で、デュークは予定より早めにイーリアスを訪れたのだった。

「そもそも、なぜここにいるのが貴様なのだシリウス？ いつから貴様是他国に干渉するようになった？ レグルスはどうした説明してもらおうか」

デュークの疑問はもつともだろう。だがシリウスとて本位ではないことを、責められるいわれはない。

「仕方ないだろ、どういつもこいつも任せるだの頼むだのと、いちいち俺に面倒事を押しつけて——？」

シリウスが言葉を止め、何かを探るように森へと視線を泳がせる。その脇を黒い塊が音もなく駆け抜け、あっという間に森の中へ消えた。

「……何があったシリウス？」

デュークの問いかけに、ようやく意識をこちらに戻したらしいシリウスの顔には、黒い笑み。

「来た。本隊だ……これでしばらく退屈しない」

「何を、するつもりだ貴様」

「教えてやる。この森に手を出すことの愚かさを、な」
不遜な発言に表情をこわばらせる二人を無視し、シリウスはヴラドが走り去った先を見すえる。

密集した木々とその間を埋めつくす倒木。狭く平たんでない森の中を、黒い狼が疾走する。障害物をものともせず全力で走りぬけるその様は、まるで草原でも走っているかのように迷いが無い。

この森を時おり訪れていたヴラドにとって、ここは庭のようなものである。しかもこの一週間で知らぬ場所もなくなった。

走るヴラドの耳に、馬の蹄の音といなき、そして仲間たちの咆哮と息遣いが届いてきた。

この森に馬を連れて来るような軽率な人間を引き止めることなど、狼にとつては朝飯前だ。この地で馬を自由に駆れるのは、我が主と森の女神のようなあの女性^{ヒト}だけだろう、と考えながらヴラドは湿った空気の中に、生臭い人間の臭いを嗅ぎ分ける。

十人か。

ぞろぞろと大勢で神聖な森を踏み荒らすことはどうやら止めたらしい、と鼻で笑う。

数十頭にも及ぶ狼たちに取り囲まれ、騒然とした騎兵隊の前にヴラドは躍り出て、地の底から響くような低い咆哮を上げる。

黒い巨大な身体に金の瞳。その金に映るのは、声もなく驚愕する男たち。

そしてその光景は、そのまま泉に残った半身であり、主でもあるシリウスにも共有される。

『気をつけるヴラド。中央の男がフェイゼルだ。殺さず殺されず、完膚なきまでに追っ払え』

ヴラドは小さく唸る。

——いつものことだが、無茶を言う主だ。

仕方がない、とヴラドは群れに遠吠えで指示を出す。

——狩りをしよう。

ヴラドの声に反応し、狼たちが動き出す。黒や茶色の波が、寄せ
ては返す波のようにうごめき、騎兵隊員の屈強な精神をも苛む。
血気盛んな年若い雄たちが馬を挑発するように近づく。

いくら調教されているとはいえ、狼を本能で恐れる馬の興奮を、
簡単に収めるのは難しい。中には振り落とされる者まで出てくる。
しかし中央のフェイゼルはさすが、己の馬をしっかりと収めつつも
周囲の状況へ冷静に目を配っているようだった。

「慌てるな、固まれ」

フェイゼルは部下を諫めつつ、不自然さを感じていた。

周囲をぐるりと囲むこれだけの数の狼が、統制されているとしか
思えない動きを見せている。頭は目の前の顔に傷を持つ黒い狼。あ
れを押さえられれば所詮獣の集まり。群れは霧散するだろうとフェ
イゼルは考えた。

「隊長、囲まれました……このままでは」

副官の情けない言葉を打ち消すように、フェイゼルが吠える。

「あの黒い狼の先に、目的地がある！ 臆するな！」

フェイゼルの眼が、ずっと冷める。

「槍をかせ！」

後方の部下から受け取ると、狙いをヴラドに定め突進する。

ヴラドはそれを軽々と避け、隣の岩場に飛び乗る。

フェイゼルが柄を回転させヴラドの足元をなぎ払うと、それもま
た飛び退けると地面を蹴って逆に襲いかかる。

グルガアアッ！

激しい音を立てて槍が柄の部分で折れ、ヴラドがその穂先を咥えて降り立った。

フェイゼルは表情を変えず槍を捨てると、剣を抜きはらってヴラドに斬りかかる。馬上からの打ち払うような剣筋も、素早い跳躍でかわされる。

「すばしい奴め」

思いのほか苦戦したフェイゼルは、次の手に知恵を巡らす。

『ヴラド、フェイゼルには手出しをするな』

遠くにいる主の指示に、ヴラドは反発を覚えつつも従って数歩下がる。

『俺が行くまでもたせろ、狼たちも少し下がらせるんだ』

グルルル、とヴラドが呻く。

気が猛りきつた狼たちを鎮めるのは至難の業だ。

ヴラドはひととき大きな声で遠吠えをする。

すると応えるように、群れのそこかしこから遠吠えが返ってくる。

次の瞬間、ヒュツと何かが空気を切り裂く。

「ギャン！」

鈍い、何かが地面に叩きつけられる音。

金の瞳が振り返ったときには、既に長い槍の柄を腹から生やして横たわる哀れな仲間が映る。

ヴラドはフェイゼルを振り返る。

振り切られた腕は、この男から槍が放たれた証。

ヴラドの全身の毛が逆立つ。

身体が怒りで震える。

咆哮のせいで咽が焼け付く。

爪が大地をかきむしり血が滲む。

『まてっヴラド……』

主の言葉は届くことなく、ヴラドは牙をむき出し、大地を蹴って
フェイゼルに襲いかかった。

獣の王 3

それはフェイゼルの想像をはるかに上回るスピードだった。牙をむいて襲い掛かる獣を剣で斬りつけようとかまえるが、容易く懷に入られる。

寸でのところで牙を受け止めたが、押し返すだけの力が足りず振り切った柄を持ち上げ、払いのけるのが精一杯だった。

「隊長！」

騎兵隊員の叫びと共に地面に降り立った黒狼、ヴラドの口元には赤い血が滴っていた。

——グルルル

低く響く声はまだ攻撃がやまないことを知らせる。

「隊長、お怪我を？」

フェイゼルは目線を獲物であるヴラドから離さず、剣をかまえる。「私ではなく、奴の血だ」

フェイゼルの咄嗟の判断で刃を引き上げたことで、ヴラドにわずかとはいえ傷を負わせていたのだった。

ヴラドの血の臭いに、周囲の狼の群れの様子に変化が現れた。

どの狼も姿勢を低く保ち、眼光鋭く人間たちを睨みつけにじり寄ってくる。

獣たちの主であるヴラドを傷つけた人間を許さぬと言わんばかりだ。もはや騎兵隊たちと狼の前面衝突は避けようもない、一触即発な雰囲気だ。

騎兵隊員は円陣を組み、互いに背中合わせとなるようにして、襲いかかるうとする狼たちを警戒して武器をかまえる。

唯一ヴラドと対峙するフェイゼルは陣を外れ、馬を捨てヴラドに襲い掛かる。

「隊長、危険です！」

副官の叫びに、フェイゼルは眉を寄せる。

この状況で、目の前の狼を倒さず活路を見出せるとでも思っているのか、と部下の場違いな声に毒づく。

フェイゼルの剣はヴラドの速さを捕らえきれず、次々と空を切る。ヴラドの金の眼はまったく覇気を失っておらず、反撃の様子をうかがっているのが分かる。それが分かっているからこそ、フェイゼルは次々と攻撃の手を休めず剣を繰り出し、反撃の隙を与えない。しかし、一瞬だがフェイゼルの足が木の根にとらわれ、一步遅れる。

——グルガアアッ！

千載一隅のチャンスとばかりに、ヴラドが牙をむき飛びかかる。

「……くっ！」

フェイゼルは再び剣の腹で攻撃を受け止めたが、勢いまでは流しきれず、ヴラドに押し倒される形で背をつける。

フェイゼルの咽元に牙が食い込もうとした次の瞬間、呻いたのはヴラドの方だった。

——グウウ……

フェイゼルの蹴りがヴラドの腹に入っていた。

ヴラドの巨体が軽々と、その威力で転がされる。

期を逃さんとフェイゼルは体制を建て直し、剣を振り下ろす。

「死ね、獣」

ヴラドの胴と頭が一刀両断とされようとした、その時——。

高い金属音を響かせて、フェイゼルの剣はヴラドの真上で止まる。

「——！」

フェイゼルは剣先をたどり目線を上げる。

黒い狼をかばうように受け止めているのは、色とりどりの星を散

りばめたかのような美しい刀身を持つ一振りの剣。柄には相反するような禍々しい蜥蜴のごとく爪と鱗の生えた翼を模した意匠。それを持つ腕は確かに鍛えられた男のもの。顔は目深に被ったフード付きマントのせいで分らないが、垣間見える口元には不敵な笑み。はっとしてフェイゼルは身構える。

だがそれも空しく男が剣を軽く振り上げただけで、その剣威によってフェイゼルは吹き飛ばされた。

「……か、はっ！」

背を木の根に叩きつけられ、フェイゼルが呻く。

倒れて悶絶するフェイゼルの剣を持つ腕を、男は容赦なく踏みつけた。

「ぐっ……貴様！」

ギリリと軋む肩を押さえ仰ぎ見るフードの中には、凍るほどの怒気に満ち、グレーに光る男の眼があった。フェイゼルの背に、感じたことのない悪寒が走る。

「代償は払ってもらう。命ひとつ分、決して軽いと思うな」

男は剣を鞘に納めると、その鞘ごとフェイゼルの脛すねに振り下ろす。

「ぐあああっ！」

骨を砕く鈍い音と、フェイゼルの叫びが森にこだまする。

「隊長！」

苦痛に顔を歪めるフェイゼル。突然の男の出現と圧倒的な展開にも、ようやく正気を戻したのか騎兵隊員たちが慌てて武器をかまえ直す。

得体の知れない狼たちより、人間が相手となれば自分たちでも何とかできると考えたのだろうか——相手が悪かった。

フードの男は再び剣を抜き、馬上の男たちに切っ先をつきつけた。
「死にたいのか？」

唯そのひと言で、騎兵隊の精鋭たちは青ざめる。

「ま……て、貴様が、シリ、ウスか？」

地に伏したままのフェイゼルが、やつのことで声を発した。

フードの男——シリウスが踏みつけたままのフェイゼルへ顔を向ける。

「やめろ……ここは、退く」

フェイゼルは周囲を見回す。自分を屈服させている男とその脇に静かに立つ黒狼、そして先程まで猛りきっていたはずが今は王にかしづく臣下のように伏せた狼たち。

この状況を見れば黒い狼ではなく、この男こそが本当の獣たちの王であることは、フェイゼルにも理解できた。

フードの下で、シリウスの口元には笑みが浮かぶ。そして切っ先は騎兵隊に向けたままではあったが、一步退いてみせた。

その様子を受け、副官がフェイゼルに駆け寄り助け起こす。

「おまえ……」

シリウスの声に、フェイゼルが肩を借りたまま振り返る。

「不用意な言葉は身を滅ぼすぞ……俺の名、どこから得た？」

そのささやきに、再びフェイゼルの背筋が冷える。

——誰に？

その問いは事実、フェイゼルの立場を危うくするものだった。

そう、誰から聞いたのが問題だ。

シリウスと呼ばれる七剣聖が、西の森で暗躍しているということ
を——。

もちろんティラータ・レダから彼らフェイゼルに漏れることなどありえない。そしてティラータが報告したミヒヤエル王とその腹心カナンでもなく、その片腕であるボルドでもない。

とすれば、残るは西の森でヴラドに傷を付けられた本人——ジン・マクガイア以外にありえないのだ。

そのことに気づき、フェイゼルは口を歪める。

肩を貸す部下にはそれが傷の痛みに耐えているせいなのか、シリウスの追求に窮してのことなのかは知るところではないだろう。

笑みをもって見送る男を、フェイゼルはただ畏れをもって振り返る。格の違いを見せ付けられて。

「行け……そして二度と来るな」

ここはお前たちのような者が、土足で踏み荒らしていい土地ではない。シリウスの言葉には、そんな意味を感じさせるに足る、怒気が含まれていた。

大きな黒狼と無数の群を引き連れて、フードの男が立つ。

その姿を苦々しい思いで見送り、騎兵隊員たちは西の森を後にした。

今回ばかりは退かざるを得ないだろう。隊長であるフェイゼルが追った傷は決して浅いものではない。こんな森ひとつに貴族たる我ら騎兵隊員の尊い命を、かけるに値するものがあるとは副官の男には到底思えなかった。

だが……。

「大丈夫ですか、フェイゼル隊長？」

恐らく砕かれたであろう足を庇い、支えられながら同乗するフェイゼルを気遣う。

「隊長、あれは本当にシリウスなのですか？ なぜ、王の許しを得た我々があのような得体の知れない輩に……っ？」

副官のわき腹には、鋭く光る短剣が当てられていた。あまりのことに言葉を失い、こめかみからは汗が噴き出る。

「た、隊長？」

「そのような者はいなかった」

「……は？」

副官は自分に向けられた、フェイゼルの凍るような眼差しに何も

言えず、ただ頷く。

フェイゼルもまた、黙ったまま短剣を収め再び前を向く。そのやり取りを見咎めるものは、どこにもいない。だがこの出来事が、騎兵隊の隊長と副官の間に亀裂が入るひとつのきっかけとなったのは、まちがいにかった。

一方森に残ったシリウスは、厳しい表情のまま立ち尽くす。足元には無残に横たわる一頭の狼。

シリウスの脇にいたヴラドが、歩み寄ってそつと遺体に鼻先を寄せると、二人の前に一頭の雄が近寄ってきた。

「おまえの、つがいか」

シリウスはそうつぶやくと、膝をつく。

死んだ仲間に寄り添う狼の首に手をおき、そつと撫でる。

「すまなかった」

間に合わなかった。

シリウスがそう告げると、狼は鼻を鳴らして身をすり寄せてきた。決して彼らを駒として使うつもりはなかった。それは言い訳ではないかもしれないが、傷つけるつもりはシリウスにもヴラドにもなかった。

シリウスは横たわる若い狼の下に手を入れ、力ないその身体を持ち上げる。

「ここは騒がしい……せめて静かな場所へ移そうか」

そう言つと、死んだ狼の群のボスらしき一頭が案内を買って出た。森に、狼たちの悲しい遠吠えがこだまする。

そして狼たちの悲しみの葬歌が止むころには、西の森はいつもの穏やかな獣たちの楽園に、その姿を戻していったのだった。

先触れと凶聞 1

イーリアス城が騒然とした空気に包まれる。

ここ一週間ほどティラータ・レダの代わりとして、西の森と障壁の警護を買ってでていた騎兵隊の様子がおかしいと噂にはなっていた。だが今日、日の傾きとともに戻った騎兵隊隊員たちの同様は、尋常ではない。

そしてその騎兵隊隊長の姿を見た者、全てが唾然としたのだ。門番は大慌てで城内の医師のもとへと走り、残りの者は国王へと……つまり近衛を通して、事の次第を報告がなされた。

アシャナ姫は今、祭の準備の為に城の一角に設けられた神殿に來ていた。

女神ファラを祭る祈りの間は、かなり大きな広間となっており、大祭の初めにここで女神に捧げる舞が披露される。

祭神が女神だけあり、なにかと女性である王女アシャナの出番が多く、今日も祭殿の打ち合わせをかねて、奉納の剣舞の練習を見ているところだった。

祭の前夜祭に一回、当日に三回舞が奉納される。そのほぼ全てに国王と王妃の両陛下と、アシャナ姫が殿上で見守ることとなる。当然民衆もそれらの剣舞の奉納とともに、王室の方々の姿をひと目見ようと楽しみにしており、警護についてボルドが頭を悩ませている真つ最中だ。ただでさえ人手が足りないところなのに、それ以外――西の森の監視にもかなりの人員を割かねばならないのだ。限られた人数でバランスを取るのは至難の業だろう。

ティラータは目の前で剣を持って舞う巫女を眺めながら、警護に

ついて思いを巡らせていた。

「ティラータどうかしら？ あれ、あなたならすぐにも出来るのではなくって？」

同じように眺めていたアシヤナ姫が、突拍子も無いことを言い出す。

「……は？ 私？」

「あのね、昔は形式としてではなく、本当に剣舞として真剣を使ってたそうよ？ ティラータならもしかして、見たただけですぐに舞えるのになって」

アシヤナの目が好奇心に輝いて見えるティラータ。

「いや、さすがに無理だろう」

素っ気無い返事に、アシヤナは頬を膨らませる。

「本当？」

「ああ、あれは型そのものに意味があって、順番もきっちり決まっているんだらう？ それに私は今日初めて見たんだし……」

アシヤナの表情がとたんに残念そうに変わるのを見て、ティラータは微笑む。

祭を目前にしてなにかと慌ただしくなり、以前のようにゆっくりお茶に付き合ったり、アシヤナに服を仕立てさせられたりしている余裕は無くなりつつある。しかしこうして、ふとしたひと時がティラータには何より得がたい安らぎになっていた。

しかしそのひと時も、つかの間の泡と消える。

神殿の広間で舞を堪能していた二人の下に、近衛副隊長であるボルドが近寄ってきた。

「姫、お楽しみのところ申し訳ありませんが、隊長から遣いがあります」

「何か、あつたのね？」

アシヤナ姫の顔が引き締まる。

ボルドはチラリとティラータに一瞬視線を向ける。

「はい、西の森の探索に向かっておりました騎兵隊が、たった今全
て帰還いたしました。フェイゼル隊長が重傷を負ったようです」
「なんですって、あのフェイゼル伯が？ いったい何があったとい
うのボルド！」

詳しく聞かされた事実にあしやナは驚き、ティラータもまた眉を
寄せ言葉を失う。

——狼、西の森。その二つだけで、ティラータの脳裏にはあの男
がよぎる。

「ボルド、フェイゼル隊長の怪我はどんな様子だ？」

「右足の脛の骨を、折ったようです。ですが外傷はなく骨だけ断た
れているようで、恐らくこれは狼などではなく人の手によるものか
と」

「あの……馬鹿者がっ」

ティラータの声にあしやナがびっくりした顔をするのを見て、思
わず出た悪態にすまないと言ひびる。こうした他人に対する言いよう
を、あしやナは珍しく思っているようだった。

「それでは、騎兵隊は撤退するということでもいいのかしら？」

「はい、そのようです」

ボルドの返答に、あしやナは口元を弧を描くように吊り上げ、そ
して二人にしか聞こえないような小さな声で、ふふふと笑う。しか
しあくまでも目は笑っていない。

「ア……アーシャ、その笑みはどうかと思うぞ」

まあ気持ちは分かるが、と付け足す。

「これくらいのことには許容範囲内よ。では、当初の予定通り、ここ
からティラータの謹慎を一部解いていただけるよう、父上に申請
しましょうか」

あしやナはティラータを見て、すごく残念だけれどね、と眉を下
げた。

アシャナの王女らしからぬ会心の笑みの理由は、三日ほど前に遡る。

西の森へ他の者を踏み入らせることに最も懸念を抱くティラータだったが、謹慎という立場である以上、手も足も出ないというのが現状だった。騎兵隊がティラータになり代わり、かなりの人員を割いて西の森に入っていると聞き、危機感を抱かないわけが無い。

ただそれを承知の上で謹慎を良しとした、国王の意図をはかりきれずにいた。だが騎兵隊の様子がどうもおかしい。

それでティラータとアシャナは陛下を問い詰めるという、最終手段を取ったわけだが――。

「お父様、どういことですか？　今あの場所を不埒者どもが入り込めば、再び障壁が危機に晒されることくらい、分かりきった事ではありませんか。お願いです、今すぐ西の森に関してのみ、ティラータの謹慎を弛めてください」

アシャナはティラータを引きつれ、父王の執務室に乗り込んでいた。

父王ミヒヤエルは書類から目を上げ、アシャナを通り越して後ろに控えるカナンに手を上げる。

するとカナンは扉に行き、側に控える老執事に人払いをさせ、その扉を背に守るようにして立つ。

「アシャナ、そなたの言い分も分からぬでもないが、そもそもティラータの謹慎を申し出たのは自分であることを、忘れてはなるまいよ」

「しかしお父様！」

次にミヒヤエル王はティラータへと視線を向ける。

「おまえも同じ意見か、ティラータ？」

問われてティラータは言いよどむ。障壁が気になるのは確かだが、今回の件に関して王に何か考えがあつてのことだと感じていたのだ。「陛下は、なにか策がございますのでしょうか。でしたら私から異を

唱えることはありません」

「ティラータ？」

そのティラータの言葉に驚きつつも、アシャナは父王を更に問い詰める。

「お父様、それは本当なのですか？」

「策というほどの大層なものは何もない」

「……どういことですか？」

「私は言い渡したはずだぞ、アシャナ？　もし騎兵隊の手に余るような危険があれば、その時は致し方ない、引かせると」

ミヒヤエル王はアシャナに微笑む。

「……ならばお父様、その時には必ず、ティラータを西の森の守り人の任に戻してくださいませ。約束ですわよ？」

「分かつておる、二言は無い」

それでようやくアシャナは渋々ながらも引き下がったのだった。

それから三日。

ミヒヤエル王の言葉通り、騎兵隊は手痛い負けを喫した。

たかだか狼相手に。

再びアシャナはティラータを引き連れて、王の執務室を訪れる。

「約束です、お父様」

にんまりと笑う王女アシャナに、父王であるミヒヤエルも苦笑いだ。

「分かった……ローランド、あれを」

脇に控えていた老執事が、用意してあった書類を差し出すと、それにミヒヤエル王がサインをしてアシャナへと渡す。

「……ありがとうございます、お父様」

アシャナはティラータを振り返り頷いて見せた。

「陛下、ひとつお聞きしてよろしいでしょうか？」

ティラータが一步踏み出る。

「申してみよ」

「陛下はシリウスと面識がおりなのですか？」

ティラータは真剣な面持ちだった。

「無いといえば無い、しかし有るといえば有る……だが接触は可能であろう。手はいくつか考えられぬこともない」

「ベクシーですか」

ティラータが使いを頼まれたあの書状だろう、と当りをつけ同時に納得する。

「ティラータが謹慎を受けるのは想定外ではあったが、それもまた補うに足る働きを見せてくれたと、思っておる」

「少々やりすぎの印象は否めませんが……」

ティラータの苦い表情に、ミヒヤエルは低く笑う。

「たしかな」

「あの者は容易く対価として命を狩ろうとする。少々危険であると感じております」

「いったい何者なのでしょうね、シリウスとは……」

アシャナが肩をすくめる。

「確かにフェイゼルは我が国の誇る騎兵隊長。此度のことは痛手ではあるが剣聖の成した事である。無闇やたらと捕まえて処罰する訳にもいかぬ。その身元も知れぬというのだ。……という訳でティラータ、おまえに守り人の任に戻ってもらう故、今後心して励むがよい」

「御意」

ティラータは一礼する。

——やはり陛下はあの男が何者か、知っているのだろう。
だからこそあえてその存在を伏せているのか。

アシャナとティラータは王女の自室に戻るかたわら、城内の慌ただしさに目を向ける。怪我人は多くはなかったようだが、フェイゼ

ルの負傷は議会や貴族たちに与えた衝撃は少なくなかったようだ。城の侍従たちが慌ただしく行き来するのは、貴族同士の腹の探りあいか、はたまたご機嫌伺いか……。

アシヤナ姫の自室に戻り、ティラータはボルドと今後の相談をしていた。すると城内の慌ただしさがここにも溢れ出したような勢いで、女官長マイヤが数人の女官を引き連れてやってきた。

「どうかされましたか、マイヤ殿？」

ボルドの問いかけに、こちらをチラリと一瞥しつつ声高に述べる。「フィンディアの王子であらせられます、デューク・デラ・デューン様がもうすぐお着きになると、先触れが参りました。王女であらせられるアシヤナ様が出迎えにお出ましになられるのは当然の事。これから支度を致します」

ティラータとボルドは顔を見合わせる。

——「デュークが到着する？　少しばかり早くはないだろうか、このタイミングとは……」

「では私は外しますので、あなたは姫の警護をお願いします」
ティラータが頷くと、ボルドは確認のため慌てて出て行った。

先触れと凶聞 2

重傷を負ってイーリアス城に戻ったフェイゼル騎兵隊長は、国王ミヒヤエルに謁見すらできずに、城内の医務室に運び込まれていた。

本来ならば自らの屋敷に戻って治療を行いたかったが、城に帰り着いたところには傷の痛みに意識が朦朧とし、それも叶わなかった。

とはいえ城の侍医たちが数人がかりで傷の状態を診て、適切な骨折の治療を施していたので、屋敷であろうと城の医務室であろうと結果は同じことだ。折れた右足の骨を引っ張り整え、添え木をして固定された。これから恐らく患部が腫れて熱をもってくるだろうことは、戦士であるフェイゼルも承知している。

しかし一番の心配は、この先元通りに完治するかどうかである。

「……チッ」

苛立ちに自然と舌打ちして、さらにそれを思いもかけない者に聞かれたことに気付く。

「なぜ、貴様がここにいる？」

「失礼ね、あたしが医務室に出入りしてても、何の不思議もないでしょ。相変わらずねフェイゼル」

「笑いに來たのか」

そう言われ、呆れたように肩をすくめるのは、薬師ジャージャービーンだ。

茶色いもじやもじや頭を揺らしながら、ベッドに横たわるフェイゼルに歩み寄る。珍しくも薬師らしく、白い白衣を羽織って木でできた薬箱を片手に抱えていた。

「あたしはそんな暇人じゃないわよ。あんたに良い薬を処方してやってくれて、陛下から頼まれたの。じゃなきゃ、こないけ好か

ないつつけんどんの所になんか来るもんですか」

「陛下が、貴様を？」

そうよー、と軽い口調で答えつつ、ジャージャービーンは持ってきた薬箱の中から白い包みをひとつ取り出すと、側に置かれてあった茶に混ぜる。

「上手に折れたみたいじゃないのさ、良かったねえ相手が手練で。破損させずに真つ二つに折るなんて神業よ、ふふふ」

鼻歌交じりにかき混ぜ終わると、薬湯の入った湯飲みをずいと差し出す。

「はい、痛み止め……飲みなさいよね」

だがフェイゼルは湯飲みを差し出す薬師を見向きもせず、ただ正面を見据えたままだ。

ジャージャービーンは薬湯を受け取られるのを待ったが、なかなか動こうとしないフェイゼルに業を煮やす。

「んもうつ、陛下からだって言うてんでしょ、この石頭！」

「貴様の入れた毒など、口にする気はない」

ベッド脇のチェストの上に、ゴンと勢いよく湯のみが置かれた。

「……馬鹿にすんじゃないわよ！ あんたは気に食わないけど、あたしは薬師よ。たとえ殺されてもね」

その言葉にフェイズルの肩が一瞬揺れたのを、薬師は見逃さなかった。

「だから、あんたのその隠し持っているモノで刺しても、何にもならないわよ。……ホント馬鹿な男よ、あんた」

何も言い返さず、ジャージャービーンとも目を合わせることすらしない鉄面皮のフェイゼル。薬師は腰に手を当て、ひとつ溜息をもらす。

「ヴィヴィは、元気？」

突然フェイゼルは隠し持っていたナイフを投げつけた。

「……つつ……」

刃はジャージャービーンの自慢のもじやもじやを掠め、鈍い音と

ともに後ろの壁に突き刺さった。

「貴様がその名を口にするな！」

フェイゼルは憎しみに頬を引きつらせ、苦々しく口元は歪み、その眼は先程までとは打って変わって、感情の波が溢れたかのように見開き、獲物を射抜く。

「……なんだ、ちゃんと感情出せるんじゃない。だけど、相変わらずそれがあの娘のことに触れられたときだけなのね。成長しないんだ」

「黙れ！」

フェイズルの叫びは、まるで悲鳴のようだとジャージャービーンは思った。いけ好かないこの男が抱える過去が、いまだ男の心を蝕んでいると知りつつも、自分は知らぬふりをして突き放している。この男を見るたびに、微かな罪悪感と無力感を抱く。

しかしそう思っていることを知れば、このプライドの高い男が更に怒り出すに違いない。

無駄に年をとったと、ジャージャービーンはらしくない感傷に再び溜息を落とす。

フェイズルの叫びは部屋の外にまで届いたらしく、すぐに医師たちが様子を見にやって来た。

ジャージャービーンはやれやれと呟く。

「んじゃ、あたし行くけど、ちゃんと薬飲みなさいよね。でないと今晚苦しむわよ？」

そう言っ取り乱したままのフェイズルを置いて、医師たちと入れ替わりに出て行った。

フェイズルは忌々しい薬師に波たてられた感情を抑えようと、大きく息を吐く。だが急に動いたせいで足から全身へと伝わる激痛に、冷や汗を滲ませながら耐えるのが精一杯だった。

医師たちがフェイズルを気遣ってあれこれと煩いので、大丈夫だ

とやつのことでとりなしていると、再び来訪者があると告げられた。

「いったい、なんの騒ぎだ？」

現れたのは、貴族議会議長ユモレスク伯爵だった。

彼はベッドの上のフェイゼルを確認し、医師たちを遠ざけた。

「相当な深手と聞いたが、そのように起き上がっていて大丈夫なのか、フェイゼルよ」

「お恥ずかしいところをお見せして、申し訳ありません」

フェイゼルが頭を下げると、「よい」とだけ返し、連れて来た従者に人払いをさせる。

「おまえにこのような傷を負わせたのは、何者だ？」

ユモレスクは従者の男が用意した椅子にゆっくり腰掛けると、静かな口調で問うた。

「剣聖、シリウスにございます」

「……それは本当か？」

「はい、先日報告にありましたとおり、西の森にはシリウスとその手下となる黒い狼が、騎兵隊の行く手を阻んでおりました」

「顔は、見たのか？ 何者だ？」

「いえ、深くフードを被り顔を隠しておりましたので……不覚にございます」

「またしても剣聖とは……」

ユモレスクは眉間のシワをいつそう深く刻みながら、大きく息をつく。

「フェイゼルよ、その者は確かにシリウスなのだな？ カペラではなく？」

「カペラ……カペラとは確か、フィンディア出身の？」

今ひとつユモレスクの言わんとしているところが掴めないフェイゼル。

「そうだ。つい今しがた先触れが来たのだ。直にこの城にカペラのデューク・デラ・デューンがやって来る」

フェイゼルはそれを聞いて考え込む。

確かに男は名乗ったわけではない。だがユモレスク伯が疑うのも当然かもしれない。もしあの森で会った男がカペラではなく本物のシリウスであるならば、このイーリアスという小さな国に四人の剣聖が集まったことになる。

たったひとりの小娘にすら手を焼くというのに、今この時期に他の二人がどう出るかで、フェイゼルたちに打つ手が無くなるかもしれないのだ。

「森で狼を従えているのが、シリウスに間違いないと思いますよ、ダンナ方」

おもむろにユモレスクの連れて来た従者が口を挟む。

フェイゼルが従者をじつと見てから息を呑む。

「……貴様、ジンか？」

従者はにやりと下種な笑みで応える。

「よくお分かりで」

「気安くその名を口にするな、フェイゼルよ。これは魔術師に姿変えの魔術を施させてあるのだ。そう易々とばれはせぬが用心にこしたことはない」

「は、閣下」

「それで、そなたは何故そう思うのだ？」

ユモレスクはジンを問いたです。

「シリウスの二つ名は『天狼星』。それと詳しくは知りませんが……三百年前の最後のシリウスは、人狼をその脇に従えていたという伝説があるんですよ」

——人狼。

その話を聞いてフェイゼルは、森で対峙した頬に傷のある、黒く大きな狼を思い出す。

魔獣。そう言われれば納得できるほどの禍々しい獣だった。

「ジンの言つとおり、黒い大きな狼を従えておりました。さらにはその狼が数百等もの狼の群を統率していたようで……とても人の成せる業とは」

それが人狼だったと言われれば、ようやく納得せざるを得ない。

「じゃあ、シリウスで確定つてことで。隊長はゆっくり休んでくださいよ、あとは俺がやりますから」

ジンが楽しそうに目を細める。

「フェイゼルでさえ、遅れを取ったのだ。お前にできるのか？」

ユモレスクはジンという男を信用しきれないのか、それは見下したような言い方だった。

「まあ、やってみるしかないでしょう。それに、今が好機だと思いますよ。騎兵隊が撤退を決めたのなら、向こうも安心して油断するでしょうし、これからあの女が一人で見回るなら隙もできる」

「だが、シリウスの存在はどうするのだ？」

「顔隠してレグルスあいつの代わりしてたのなら、表に出られない理由があるとした考えられない。そもそも、シリウスは公表されてない存在。このさい無視するしかないでしょう？」

ユモレスクはこの男の楽観的な読みに、半信半疑のようだった。

視線でフェイゼルに意見を求める。

「一度は障壁に辿り着けたのは確かです」

フェイゼルは苦い表情でかつての部下を見る。

「ではこの件はこの者に任せる、それで良いな？」

ユモレスク伯が決定することに、フェイゼルは否はない。

「障壁まで辿り着けさえすれば、後はなんとでもなる。先日あの小娘魔術次官が捕虜を送ったように、魔法陣となる印を置いておかせる」

「ああ、そうそう報告が遅れましたが、二百ほどですがあちらも準備完了だそうで」

ジンの報告に、フェイゼルが頷く。

新たな剣聖の存在に焦りはするが、着実に準備は整いつつあった。

ユモレスクとジンは去り、フェイゼルは医務室のベッドに横たわる。薄っすらと額に汗がにじみ、神経質そうな細い眉が苦痛に歪む。右足の傷が鼓動にのせて音をたてて軋む。砕かれた骨の周りの肉が、まるで悲鳴を上げているようだ。「チツ」と舌打ちしても、視界に入るのは変態薬師の置いていった薬湯。

次第に朦朧としてくる意識を何とか支え、フェイゼルは湯のみに手を伸ばす。

「……くそつたれが」

一気に飲み干し、ベッドに沈んだ。

日も傾きかけたイーリアス城に、二人の男が馬で城門に乗りつける。

ひとりには金の長い髪を肩までなびかせ、白いマントを羽織る美丈夫な若い男。背に立派な双剣を携えてなければ、女性と見まがう繊細な顔つきが印象的だ。

もうひとりは重厚な鎧をマントの下に覗かせる、黒髪の壮年の男。柔和な表情ではあったが、黒い瞳の奥には強い覚悟がはつきりと見てとれ、それだけでこの男が多くの人の上に立つものであることが察せられる。

壮年の男のほうで門番に近づいて、丁寧に礼をする。

「私はシンシア国の將軍、フォレイ・ラスフォンと申す。本日先触れを出した通り、剣聖カペラのデューク・デラ・デューン殿をお連れ申した。イーリアス国王陛下にお目通り願いたい」

そう告げられると、門番ははた目にも分かるほど固まる。

「は、はい、只今！」

一人がそのまま慌てて城門の中へと駆けてゆく。

金髪の男、デュークが連れの男に声をかける。

「ラスフォン殿、申し訳ないのだが、私が面会を望んでいるのはイリアス王ではなく、我が同胞のレグルスだ。なるべくなら早急に彼女に会い、話しておかねばならないのだが……」

その申し出に、ラスフォンは渋い表情だ。

「私の口からは申し上げにくいのだが、それは容易には叶わないかもしれないませんぞ」

「それはいったいどういう事ですか？」

デュークの視線が鋭くなる。

「あなたの会いたがっているレグルス……ティラータ・レダ殿は、ただ今謹慎中らしいですからな」

ラスフォンはデュークの問い詰めるような眼差しを受け流し、あっけらかんと笑う。

さすがに一国の——シンシアはイリアスに比べようもないほどの大国であるが——將軍ともなれば、剣聖といえども若いデュークの威嚇などものともしないようだった。

「ティラータ殿にお会いになりたいのでしたら……そうですね、姫にお会いするのが一番の近道と聞いておりますよ、デューク殿」

「姫、というと確かアシヤナ王女ですか」

「なぜ、剣聖ともあるう者が同胞である剣聖に会うことを、邪魔されるのか……そう言いたげですね？」

デュークは自身の心中を悟られたことに少々気を悪くしたのだが、あえて無視してその先の言葉を促す。

「彼女は、表に出てこれられないのですよ。特に私やあなたのような立場の者がいるような場には、特に」

デュークの神経質そうな眉根がびくりと揺れる。

「では、あなたはレグルス本人に会ったことは無いのですか、ラスフォン殿？」

「はい、残念ながら」

ラスフォンはにこやかに言う。

信じられないという面持ちのデュークを、門番が城門を開けて城内へと誘う。

門の中では、近衛兵と思しき兵が数人待ちかまえていた。そのなかの一人が前に出て、敬礼をもって二人を歓待する。

「ようこそ、イーリアスへ。カペラの剣聖デューク・デラ・デューン殿、我が国は貴殿を歓迎いたします。私はイーリアス国王の近衛隊隊長アズール・カナンと申します、以後お見知りおきを。そして案内役、ご苦労様ですラスフォン將軍閣下。お二人ともどうぞこちらへ」

カナンに促され、デュークは数々の疑念を胸にイーリアス城へと足を踏み入れたのだった。

先触れと凶聞 3

金星カペラの称号を持つデューク・デラ・デューンは、案内役をかねて付き添うラスフォンと共に、謁見の間へと続く控え室へと通されていた。

列強国に比べれば小さなイーリアス城の中は、古めかしい調度品と珍しい魔道灯が目立つ。世界中の魔術師が集うハシエスの都でさえ、ここまで魔術に頼った仕組みを採用してはいない筈だ。イーリアス城のスタイルは、遙か昔に廃れたと云われる神話の物語のようで、まさに旧世界の遺物と呼ぶに相応しい。

ふとデュークは小さな控室の中を守る兵に、違和感を感じる。

先程城門まで出迎えてくれた近衛隊長は、立ち振る舞いに一切の無駄がなく、デュークから見ても油断ならない実力の持ち主であることが窺えた。しかしこの部屋に移されてからはどうだ。いったい何があったと問いたいくらい、兵の質が落ちたような――。

いや、見てくれだけは質が上がったな、と苦笑を浮かべるデュークの視線の先には、白い鎧とマントを羽織った煌びやかな兵。鎧にはご大層にも、百合と剣が交わる紋章が輝く。

デュークにはあずかり知らぬ事だったが、それは謁見の場がミヒヤエル王の手の内である近衛から騎兵隊へ、つまりは議会に主導権が移されたという証に他ならなかった。

連れのラスフォンにもそれが分かるようで、苦笑しながら、やはりすんなりといかないですねと囁かれる。ならば、と呆れつつも成り行きに任せることに決めたデュークだった。

暫くすると二人は煌びやかな兵に連れられて、謁見の大広間へと通された。

広間の中央には赤い絨毯が敷かれ、それに添うように騎士が並び立つ。その周りには二人に好奇の目を向ける、派手な衣装を身につけた貴族たち。言うまでもなく娘達も着飾り、うら若き剣聖の目に留まろうと待ちかまえている。

見慣れた景色に、デュークは怯むことも呆れることもなく、凜とした表情で前に進み出る。

最奥には、イーリアス国王が待ちかまえていた。

「よく参られた。イーリアスは貴殿を歓迎する、カペラの剣聖よ」
デュークはそれを受けて簡単な礼をとって、跪くことなく真っ直ぐ顔を上げる。

その目に映るのは、年老いた細身ではあるが貫禄のある品の良い王。淡い金髪を束ね、深い緑の衣を纏って玉座に座す。その脇には同じくらいの年配の、微笑を絶やさない落ち着いた雰囲気王妃。そして王妃の横には、目も覚めるような長い黒髪を艶やかに垂らし、白い肌が印象的な美しい姫。

あれがアシャナ姫か、とデュークは得心する。生き生きと輝く黒髪と黒い瞳。噂通りの黒真珠だ。

「お目にかかれて光栄です。私は金星カペラの剣聖、デューク・デラ・デューンにございます。このような歓待、痛み入ります。しかし、私の目的は同胞アルタイルの病状を窺う事。後に訪れるであろう、次のアルタイルへの引継ぎを準備する事です。それをお忘れ無きようお願いす」

デュークからのいきなりのけん制に、周りの貴族たちが動揺を醸し出す。

それを分かつてはいたが、デュークから何も言うつもりはなかった。

剣聖の称号を与えられて以来、このようなことは日常茶飯事なのだ。どの国も、どの領主どの貴族たちも、建前はきれいごとを並べるが、本音では剣聖を自らの内に取り込みたい。それが妻を持たない若い男ならば尚の事、関心が注がれるのは当たり前だとも言い

たげに。

だから敢えて、デュークは真つ先に自らの目的を告げる。

他の余地を与えない。

もちろん、邪魔だてするのなら容赦しない。

もつとも他の劔聖やっくらがどう対応しているのかは知らぬが——とデュークは苦笑する。

「デューク殿」

殿上からよく通る声が響くと、ざわめきが止むのは流石か。

「今日は既に日も傾ききつておる。旅の疲れもあるだろう、明日にもベクシーの元へと案内を遣わすゆえ、今晚はこの城で休まれよ」

「……お気遣いありがとうございます」

デュークが王の申し出を受けると、再び殿上から軽やかな鈴の音のような声が振ってくる。

「お父様、わたくし諸外国のお話にとつても興味がありますわ。もしデューク様がよろしければ、サロンなどにお誘いしてもよろしいかしら？」

アシャナ姫が父王におねだりしている姿は傍目にも愛らしく、これまたデュークにとつてはよく見かける景色だ。

またかと呆れた溜息をこぼしそうになったが、先程のラスフォン
の言葉を思い出して飲み込む。

「姫、お疲れのデューク様がお可哀想よ、明日以降になさい」

王妃の言葉に否を唱える。

「いえ、ご心配には及びません王妃様。私の拙い旅の話でよろしければ、いつでも」

その言葉にアシャナ姫の顔がほころび、「まあ」と頬を染める。
謁見も終わりを告げ、後ろに控えていたラスフォンが帰城を申し出る。

「大儀であつたなラスフォン殿。客人を無事連れて参ってくれた事、感謝する。レイモンド王にもよろしく伝えてくれ」

「痛み入ります。ですが我が主より、丁重にと申し付かってございましたので、当然のことです」

「もう、戻られるのですか？　今からですと夜通し馬を走らせねばなりませんわよ？」

アシヤナが心配して留まらせようとしたのだが、ラスフォンが微笑む。

「お心遣い嬉しいのですが、私が戻りませんと、大祭までにシンシア軍の将が欠けることとなります。そうなると我が王子がこちらに向かつて出発が遅れることとなりますので、アシヤナ姫」

「えっ……あ、はい。そうです、よね」

アシヤナ姫が突然動揺して、頬を赤らめる。

満足そうに姫を見つめると、ラスフォンは殿上の両陛下に一礼をし、そしてデュークにはまたお会いしようと言いつつ告げ広間を退室していった。

日は既に沈み、イーリアス城の回廊には幻想的な淡い魔道灯が燈る。もやがかかったような光りが浮かぶ古城の中、デュークはまるでおとぎの国に迷い込んだ気分を味わっている。

侍女によって案内されたのは、城の上階、王族の居室が近いのではないかと思しき一角。狭い廊下を進むと、趣のあるサロンに行き当たる。ガラス張りのサロンからテラスへ出ると、小さな空中庭園のようだ。テラスには花壇が作られ、小さな花が風に揺れる。

その奥の東屋に、目的の人物が優雅にお茶を用意して待ちかまえていた。

「ようこそお越し下さいました、デューク殿」

改めて自己紹介をし、席を立てて微笑むのは黒真珠の姫、アシヤナ・ル・イーリアス。

デュークが正体の礼を述べようとすると、アシヤナ姫がそれを制す。そして侍女を下がらせ、再び王女が口を開く。

「座つて頂戴、デューク殿。堅苦しいあいさつは面倒だわ」

一変して口調が変わった姫を見て、しばしの躊躇の後黙って席につく。

姫とその後ろに立つ、黄金の髪と新緑の瞳を持つ華奢な少女を見比べる。そして周囲の気配を察して静かに笑う。

「これはこれは……噂とは本当に中てにならない」

アシャナ姫の後ろにレグルス。そしてデュークの右手側には近衛隊長にも劣らぬ身のこなしの男、左手にはこれまた鋭い気配を持つ赤毛の女兵士。東屋の外を固める兵士二人も近衛なのだろう、謁見の間で見た兵とはまるで違う。

この国には先程の妙に飾り立てた、使えそうにない兵ばかりなのかと思えば、アシャナ姫のそばには驚くほど手練ばかり。

笑うデュークに、アシャナが首を傾げる。

「恥を晒すようで申し訳ないわ。イーリアスも一枚岩ではないのよ」
「いえ、こちらこそ失礼したアシャナ殿」

後ろに控えていたティラータが前に出る。

「おまえがカペラ……私はティラータ。黄金の獅子のティラータ・
レダだ」
レグルス

デュークが立ち上がる。

「ようやく、会えたなティラータ」

ティラータは差し出された手を握り返す。

「こんな形でしか会わせられなくて、ごめんなさいね。それで聞かせてもらえるかしら、あなたが予定を早めた理由を」

華やかな花と茶器が置かれたテーブルを挟み、にこやかにアシャナが問う。

ティラータが頷くのを見て、デュークはこの姫が信用に足ることを確信する。もっともこれだけの手練を配下に引き込んだのである。ただの可愛いだけの姫ではないのだろう。

「グレカザルからの頼み……ベクシーの容態が思わしくないのを心

配して、早めに様子を見てくれと」

「グレカザルから？」

ティラータが聞き返す。グレカザルとは、ベクシーの一番弟子であり、次代の剣匠である。今はシンシアの隣国であるラプス公国に腰を落ち着けているが、ティラータの幼い頃はイーリアスにいたこともあつて顔なじみだ。

「まあ、それは建前だがな」

「……まあそうだろうな」

真っ直ぐティラータを見据えてデュークが告げる。

「無法地帯……つまりイーリアスから見たら魔法障壁の向かう側に、ならず者を集めている者がいる。傭兵盗賊あがり……様々だが武装した者達だ。その数既に二百」

東屋の中に緊張が走る。

「二百」

ティラータの低い声に、アシャナの組んでいた指に力が入る。

「それほどまでに……愚かな」

アシャナの可憐な顔に苦渋の色が浮かぶ。

二百の武装集団。城を落とすには全くもって足りない数字だったが、開けた障壁を潜り抜け、祭でにぎわう城下を混乱させるには充分な人数だ。だが――

「たとえ障壁を越えて来たとしても、ひとりたりとも、森から出さない。その者たちを引き入れ、一網打尽にする。デューク、ひとつ頼まれてくれないだろうか」

凶聞をもたらしたデュークにそう告げると、ティラータの新緑の瞳が細く締まり、魔道灯の光を集めて光った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6826t/>

イーリアス　－獅子の涙－

2011年12月30日14時45分発行